
最弱勇者とチートな勇者の御一行様

優魔くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱勇者とチートな勇者の御一行様

【Zコード】

N7217V

【作者名】

優魔くん

【あらすじ】

僕は普通の中学2年生。喧嘩もした事ないし、成績も中間ぐらい。そんな僕が異世界に勇者として召喚されてしまった。勇者として召喚されると、とてもない力を得るらしいが、僕はせいぜいチョイっと優秀ぎみな近衛兵ぐらい。こんな僕じゃ勇者なんてこなせないよ！僕が旅の最中で仲間になるのは、神様より罰で魔王掃除の手伝いを命じられたルシファー。三蔵法師との旅が終り、暇つぶしに猛者に挑む、聖天大成孫悟空。500年後の未来に生まれてくるアーサー王の存在が消えないよ！魔王を消そうとする、今はまだ若

き少年魔導師マーリン。そんなチートすぎる仲間と共に大冒険。むしろ僕は勇者じゃなくて、猛者達の従者じゃないのって疑問を抱えて旅をする。空色の髪の無口なチートヒロインも加わりました。

第1話 それぞれの旅立ち（前書き）

すみません、異世界召喚ものを読んでたら僕も書いてみたくなりました。偉大なる賢者 トール&徹（徹）も書いてる最中なので、こちらは気が向いたら書く事になりそうです。

第1話 それぞれの旅立ち

俺はルシファーて名前だ。俺は神に愛されて天使の中で頂点に立つものだ。

俺は神の如き力を持ち、神の様に美しい容姿を持つ。俺様は完全無欠だ。

「おい、ルシファー。お前天使長としての仕事はどうした！しつかり、働け！これが最終警告だ！」「

おや、こういふあたりで天使副長のミカエルが来たな。

「メンドーだ。ミカエル、適当にやつといて。」

俺は寝つ転がりながらワインをぐびぐび飲む。天使長なんてメンドクセー管理職だ。そんなもん、ミカエル任せときや万事OKさ。いつもミカエルに任せときや上手くいくんだからなミカエルは、ハーアーとため息をついた。

「ルシファー、俺は『最終警告』と言った。神はお前の怠惰な生活の罰を与えると告げられた。」

俺はワインをブーと吐き、むせた。

「な、何！神が俺に罰を！」

「そうだ、お前が仕事を投げ出した、お前が人間界に降り、人間のふりをして、人間の勇者と共に魔王を討伐の手助けをせよとの事。それまで、お前は天界に帰ってきてはならぬ。ちなみに、人間界に

落ちたらお前の力の1%しか出せないよう制限をかけておく。」

「そ、そんな殺生な！なんで完全無欠美男子天使の俺がたかだか人間風情の尻拭いをせにゃあかんのだ！」

「自業自得だ！さあ、行け！」

ミカエルが手を振ると、俺の脚元の雲が割れ、俺は人間界に落ちた。

(とある山の木の上)

「暇だなー。何かおもしろい事でも無いかなあ。強い奴でもいやあ、暇つぶしにでもなるんだがなあ。」

猿の様な男が呟く。三蔵法師様と経文を取りに行つた旅が人生で一番おもしろかつたような気がする。あの旅から300年もたつた今、あの時が懐かしくなる。

「せりに西を手指してみようかな。」

男は雲に乗り、西へと飛び出した。

(森の中の小さな小屋の中)

一人の少年が水晶玉を覗き込んでいる。彼は占われた未来に対して

若い顔にしわを寄せている。

「魔王がこの世を支配してしまつと、500年後の未来、アーサー王がこの世に誕生できないのか。キヤメロット王国すらこの世に存在できないかもしれない。大変ではあるが魔王は倒すしかない。この世に召喚されるだろう勇者と共に…」

彼は黒いローブをはおり、旅支度を始めた。

(城の中の巨大な魔法陣のある部屋)

僕はごく平凡な中学2年生。友好関係もそこそこあり、学校生活にもそれなりに満足している。この世に不思議な事を夢見たりしないし、地に足をついてる事が好きだ。別に超常的な力に憧れてもいいないし、喧嘩も嫌いだ、というか強くない。

「勇者、ワタル・ハセガワよ。汝を召喚した理由は、汝にこの世の征服を企む魔王を打ち滅ぼして欲しいのだ。どうかこの国、いやこの世界を救つては下さらぬか。」

と、セイルーン王国の国王が僕に頼み込む。

僕は平凡な生活が結構気に入っていた。それなのに異世界に勇者として召喚されるとは・・・。

王様と王妃様と姫、近衛兵達が緊張した様子で僕の返事をうかがっている。

そう、みんな不安なのだ。

魔王に生活を脅かされて、何時、己が死を迎えるかわからぬ「この怖れに。

苦肉の策として召喚した勇者（僕）に断られるのではないかとおえているのだ。

僕だつて魔王と戦うなど怖くていしょうがない、いや喧嘩をする事にですから僕は怯える。

もちろん力になつてやりたいと思つ心もある。みんなを安心させてやりたい。

そう、だから僕は決心した。決して後悔なんてしたくない。

僕は勇気を振り絞り、そつと口を開く。

「すみません、王様・・・。僕は戦つたどこりか喧嘩すらした事もないで、皆様方のお力になれる自信はありません。」

断るための勇気を振り絞つた。みんな、真剣な頼みを断る事だつて、相当な勇気がいるんだよ。まさに場の雰囲気を壊す事を恐れずに、自分の意見を言う事は、勇者の称号に値する。

王様はしばらへ考え込み、

「ふむ、勇者殿がそうおっしゃるのであれば致し方ないが、もう少しだけ考えては頂けぬ「嫌です、無理です、僕には荷が重いです。」
「・・・・・・・かなあ？」

僕は間髪入れずに、すぐさま即答。僕は喧嘩ができないが、ゲームには腕があり、ボタンの早押しの経験を生かして即答した。

「しかし、勇者、ワタル・ハセガワよ。汝を召喚した理由は、どうしても汝にこの世征服を企む魔王を打ち滅ぼして欲しいのだ。どうかこの世界とその未来を救つては下さらぬか。」

会話がループしました。ドラクエをやつていて、会話をループさせるのを見てバカだなと思つたが、実は泣き落としと同じぐらい効果があつたりして・・・これって遠まわしに僕に有無を言わさずに命令しているような・・・

僕は心を落ち着けて答えた。

「王様。僕は魔法どころか武術もやつた事ありません。それなのに盗賊どころか魔王を倒すなど絶対に無理です。」

「おお、それについては心配せずとも良い。勇者がこの世界に召喚されてから、勇者は強靭な肉体と強大な魔力を授かって召喚されるのだ。さつそくだが、勇者の力を測定してみようではないか。」

王様は僕に魔王を倒すと約束させる事は難しいと判断したようで、今は会話をそらすようだ。

黒いローブを着た魔術師が水晶玉を持ち、僕の前に来た。

「まあ、この水晶玉に御顔を映してくださいまし。」

僕は水晶玉を覗き込んだ。

魔術師が「はあ！」と魔力を込めたらしい。水晶玉を覗き込んでいた魔術師は徐々に微妙な顔をし始めた。

能力を測定する際に『見習騎士』とか『ベテラン魔術師』などがあり、それぞれの能力を6段階に判断するらしい。ここでは分かりやすく、S・A・B・C・D・Eとしておく。

僕の能力

戦士の才 : D (僕は喧嘩した事がないからだ)
魔術師の才 : B (どんな魔法が使えるか楽しみだ)
僧侶の才 : E (僕は信仰深くないからだ)

狙撃士の才；A (ちょっと意外だ)

諜報士の才；D (僕は頭が悪いからだ、しかし勇者にいつたい何をさせる気だつたのか？)

鍛冶家の才；B (僕は岡工が結構とくいだ)

商人の才；E (僕には頭も財産もないからだ)

料理人の才；A (これまた意外だ)

僕も王様王妃様も近衛兵も難しい顔をした。とても勇者の能力には思えない。これでは勇者をやるなど無理だと思うし、せいぜい勇者御一行様の一人になるのが精一杯だ。僕と王様の困惑した視線が交叉した。ちなみにまだ10歳ぐらいの姫様は居眠りしていた。

「じほん。しかし、近衛兵の中でも上位に位置するぐらいだ。恐らく勇者はこれからとてつもない成長を遂げると思つ。きっと大器晩成なのだ、そうに違ひない。」

王様はめげなかつたようだ。きっと若い頃はどんな苦境にも立ち向かう方だつたのだろう。みんなの困惑の視線を向けてくる中、僕は勇者としての使命を流れで任せられたようだ。

第2話 初めての場所には注意せよー（前書き）

一人目のチートな仲間をあともうちょっとで出そうと思います。
誤字脱字が多かつたので、直しました。

第2話 初めての場所には注意せよ！

僕こと、長谷川亘は親友の金田真央とお台場に観光にきていた。中学生一人だけにしてはちょっと遠出だったので、まるで冒険しにきたようでワクワクしていた。ゆりかもめに乗つて博物館を見たり、食べ歩きグルメを回っていた。

今後、異世界へ本当の冒険に出るとは知らずに……。

金田真央とは幼稚園からの友達で、とても仲良しだ。彼はとても勇気と元気があり、いつも弱虫な僕を助けてくれた事も多い。もちろん、喧嘩したこともあるが、言い争うだけで怖がる僕に彼はすぐにあきれて仲直りしたものだ。

そんな彼は新聞に何故か分らないが、ゆりかもめの切符が二人分挟まっていたのだ。新聞屋のサービスかな？ と思い、彼は僕に「お台場に遊びに行こう」と誘ってくれたのだ。

彼と僕はハシャギながらフジテレビを見学した。あつちこつちが目新しく、ハイテンションで見学した。

「ワタル、ちょっとトイレに行こう。」

僕達は白く、きれいなトイレに向かった。

入口に入ると、とても白い輝きが僕の目を刺した。

(トイレはきれいな方が気持ちがいいけど、ここまでピッカピカにする必要は無いと思うんだけどなあ。逆に落ち着かないかも。)

僕はちょっと長めのトイレへの通路を抜けると、白い輝きが薄れていった。

するとそこには昔の西洋風なドレスを着たお姉さんや、布地が白いがシスターみたいな服を着た女性の方達。その周りを守るかのように、すらりと並ぶ西洋風の鎧を着た兵士のような男の人たち。みんな僕の事を、ギロリと睨んでいた。（僕の主観です）

僕が居る部屋はレンガの壁で、まるでどこかのお城の中のようだ。

（しまつた！僕達、うつかりテレビの撮影現場にまぎれ混んじゃつたみたいだ。ど、ど、どうしよう、真央は・・・って居無いし…）

さつきまで隣にいたはずの真央の姿が見えなかつた。僕よりも早く気が付いて逃げたに違いない！薄情者！

僕が心中で親友に不満を抱えていると白いシスターさんが歩み寄ってきた。

「す、すみません、間違えてここに来てしまつたようです。そ、その、お邪魔をするつもりはありませんでした。し、失礼します！」

僕は回れ右！をして、さつきの白い通路を出よつとした。

しかし、僕達が通つたはずの通路は存在しなかつた。

僕がびっくり仰天していると、シスターさんが声をかけてきた。

「すみません、伝説の勇者様。私達があなた様をこの世界に許可なく連れてきてしまった事を真にお詫びを申し上げたいと思います。どうかご無礼をお許しください」

「い、いえ。僕はトイレと間違えてここに来てしまつただけです。きっと、他の役者さんと間違えているのでしょうか。僕は失礼いたします」

「あの、いきなりなので混乱されていらっしゃるのでしょうか。落ち着いて、どうか私達の話をどうかお聞き下さい」

「だ、だから、僕は役者じゃありません。人違いです。お金もありませんっていないので、みんなの撮影の邪魔をしても感謝料の方はかんべんしてください」

「いえ、そういう話ではなく、・・・」

少市民な僕と白いシスターさんは40分位の間、食い違った会話を続けていた。結局、僕が落ち着いたのはトイレの我慢ができなくなつて、トイレを借りた後だつた。他の皆さんもよくこんなに長い時間を我慢して立つていられるのが不思議だ。

僕はシスターさんに勇者召喚の話を聞き、「なんじゃそれ」とか、「真央はどうこいつたの?」とか叫んだ。

そうして、話は王様の前へとつながっていく・・・。

(城の一室のベランダ、・・・じゃなくてテラス)

勝手に僕が魔王を倒す話になつて、僕には部屋を与えられた。

僕は夜空に浮かぶ月のような衛星を眺めた。真っ赤な光が輝いていて、なんだか不気味だ。

僕はホームシックになつた、いや、ワールドシックかな?異世界よりもアマゾンの原住民にやりで囮まれた方がまだましかも。(かなり失礼、アマゾンの方々、又は出身の皆さま、もしこの小説をお読みになられていたら、ごめんなさいー)

「真央は今、どうしているんだろう?」

僕はため息をついた。

真央は僕と一緒に召喚されなかつたらしかつた。真央がテレビ局で僕を探しているのだろうか？それとも、この世界に召喚されたが別の場所にたどり着いたのか、僕には分からぬ。

白いシスターさんは、この世界の巫女のような存在で、僕にいろいろ説明してくれた。

僕をこの世界に召喚した魔法は、古代の遺跡に残されていた文献や魔法陣から得た知識らしい。5年前から突然と現れた魔王軍に支配されていつて、召喚魔法にすがつたそうだ。

詳しい事は分からず、元の世界に戻す方法も分からぬらしい。勝手に召喚して、迷惑な話だ。

ヒントが残つてゐるかもしない古代の遺跡も魔王の軍勢に支配されたようで、元の世界に戻る可能性を探すためには、魔王軍と戦うしか、道は無いようだ。

僕は魔王との戦いを決心した

元の世界に戻るために

ついでにこの世界の人たちの平和のために

でも、足が震えるのを止められなかつた・・。

それから3ヶ月、僕は城で戦い方や魔法の訓練をした。

いくら魔法の能力測定で一般兵ぐらいの結果が出ても、それは、その時点での潜在能力。戦い方や魔法の使い方を知らなければ、ただのガキだ。

3ヶ月の特訓のすえ、ようやく僕は旅立ちの準備を迎えた。
一般兵と同じ位の能力だけだけど・・・。どうやら、王様は近衛兵の
優秀な方と言っていたが、多田に見積もつての話らしい。トホホ・
・。

しかし、元の世界に生きて帰りたければ、もつと強くなるしかな
い。

一週間後は仲間を率いて旅に出るのだから。

第3話 チートな仲間、一人目登場！

ついに、旅立ちの日が来た！

・・・いや、来てしまった・・・。

「勇者ワタルよ！ そなたが魔王を倒す旅がついに始まる！ 汝が道中、無病息災である事を祈る。それと、道中の道草にはぐれぐれも気をつけるように！」

王様と王妃様と姫様が僕に祈りを込める。まるで何かのおつかいみたいな言葉だ。

（獅子王師匠！ ライオン 魚の目師匠！ アプロディテ あなた方の授けてくれた剣と杖と技術で魔王を倒します！）

僕は心中で誓った。ちなみに、僕の修行については、一応国家機密なので詳細はここには書かない。

僕が腰に差した、獅子王師匠から授かった、銅と鋼のハイブリッドでリーズナブルなハチキュッパの剣と、魚の目師匠から授かった、小さいタクトみたいな杖に向かって誓っている時、王様が思い出したように声をかけた。

「おお、勇者ワタルよ！ すっかり忘れておったが道中の仲間を紹介する！ 神官騎士、ミルドラ ス（どつかの魔王みたいな名前だなあ）だ！」

そんな大切な事忘れないで！ 王様はもう盲録したの？ と、心の中で文句を垂れていた。

すると扉の外から「誰だ！ お前は！」とか、「ゴギッ！ ドカン！」とか、

喧騒が聞こえてきた。

すぐに喧騒が收まり、扉から神官騎士ミルドラ　スらしき人が入つて來た。

金髪のポニー・テールで、蒼くきれいな瞳をしていた。とってもハンサムでその体つきは細くも筋肉が引き締まっているようである。神官騎士らしい、独特で優雅な鎧を着ていて、まるで一流の芸術家の作品の銅像が本物になつたようかの姿だ。

彼は輝く白い歯を見せてほほ笑んだ。

「勇者サマ、アナタハ神ヲ信ジテイマスカ？信ジテイルナラ、神ノ御加護ニヨリ、魔王ヲ倒ス事ガ出来ルデショウ！」

滅茶苦茶うさんくさいハンサムだった。

王様もビックリして、口を大きく開けている。

王妃様と御姫様は顔を赤らめて凝視している。彼女たちにとって、怪しいのと、ハンサムとはまた別問題らしい。

「神官騎士ミルドラ　スよ。2・3日見ぬ内に、ずいぶんとハンサムになつたの。髪は金髪じやつたつけ？」

「（ひそひそ声）王様、あきらかに別人です。さつきの喧騒も聞いたとして、怪しいと思わないのですか。」

大臣が王様に耳打ちする。

怪しいハンサムが答える。

「ワタクシノ、従兄ノミルドラ　ス殿ガ馬車酔イシタノテ戦エマセン、ソゴテ勇者サマノ御供ヲ代ワリニ務メサセテモライマスル『ルシファー』ト申シマス。ドウゾ、ヨロシクチヨンマゲ。」

ルシファーが怪しげな台詞を吐いて、輝く笑顔と共に優雅にお辞儀

をする。

「そ、そつか。分かつたルシファーよーそなたが立派に務めを果たす事を期待する。」

王様が答える。

「しかし、ミルドラスはこの城に住んでいるのに、なんで馬車酔いするのか？」

大臣が疑問をつぶやく。

王様！ 納得するな！ 大臣！ もつとはっきりと突っ込め！ ルシフ
アーモ、もつとましな嘘をつけ！

僕は心の中でどれだけ突っ込んでいるのだろうか？ 断つても会話
がループしてしまつ勇者に選択権が無いのである。

「それでは、近衛兵隊長、ヨシュア・A・ガーナ。」

王様が呼ぶ。

鎧を着た壯年の男性が歩いてきた。

「勇者殿、私も精一杯に力をこめ……。」

ズドン！

近衛兵隊長が急に倒れた。目を白く剥いて、口からブクブク泡を出
している。

「「ど、どつしたー近衛兵隊長！」「

大臣と王様があわてた声をかける。

「オオー、可哀想ニ！ キット、魔王トノ戦イヘノ訓練ノ疲労ト、緊張テ、倒レタヨウデス。」

ルシファーが棒読みで声を上げる。

「ルシファー、君の目が異様に蒼く光つて隊長を睨んでいたけど、知らんぷりするつもりなの？」

僕が思わず突つ込む！

「オー、疑ワレルナンテ、ショックでーす。」

ルシファーが大げさに天を仰ぎ、顔に掌を当てる。

「きっと、勇者殿はルシファー殿の目が蒼くきれいなので、見間違えたに違いない。うむ、仕方あるまい。ではもう一人の従者、魔導兵隊長ローラ・フロー・ラル。」

「はい。」と返事と共に、黒いローブをきた女性が歩いてきた。

「オー、美シイ女性ト御近ジキニ、ナレルトハ、トテモ嬉シイです。」

ルシファーが歓迎と共に彼女を抱きしめてキスをした。すると、ローラさんは顔を真っ赤にして気絶した。

「オー、ヤハリ彼女モ緊張ノアマリ氣絶シテシマイマシタ。力弱イ女性ニ困難ナ旅ハ無理ノヨウでーす。」

ルシファーが大げさに嘆く。

ルシファー、君は明らかに何かの力を使っているだろう。

「そ、そうか。それは困った。では他の者を……。」

その後も、精霊の巫女、召喚士、魔法剣士、魔法格闘家、魔法三銃士、などが呼ばれるものの、みんな不思議な事にことじ」とく氣絶した。

「ふーむ、わが国には他に優秀な者達がないのだ。もう勇者殿の従者に相応しい者がいないので、私から直々に文書を渡そう。これを見せれば仲間になつてもらえるかもしだね。」

王様が渡してくれた文書は「勇者殿と共に魔王を倒す旅の仲間になつてくれぬか、みごと務めを果たせたのならば、我が直々に褒美をやる。」と、仲間を集めるための内容が書かれていた。（チヤラチヤラチャンチャンチャーン）（効果音）勇者は仲間募集の紙を手に入れた。

「それと、勇者は狙撃の才があるので、私が父から受け継いだ物をやろう。代々王家に受け継がれる一品だ」

王様の命令で、召使いが銃を運んできた。
どうからどう見ても獵銃にしか見えなかつた。

「それは、王家が代々キツネ狩りをする際に使用するものだ。3発まで装弾可能で、魔力で弾丸を撃つ物だ。」

チヤンチヤラチャンチャンチャーン（効果音）。

勇者は王家の獵銃を手に入れた。これでキツネを狩れるようになつた。

「あ、ありがとうございます。」

僕は笑みをひそめさせてお礼をいった。これで魔王を狩れ…と言つのか。

王様は満足そうにほほ笑んだ。

「勇者よ、魔王を倒すつえで、一つ話がある。

この世界のどこかに勇者しか扱えぬ伝説の聖剣が必ずある。他の王國の王家や貴族が宝として持つてているかも知れぬし、商人が持つているかも知れぬ。

昔、この王家には代々勇者にしか使えぬと言われている伝説の聖剣があつた。石の台座に収められていて、決して誰にも抜く事はできなかつたと言い伝えられていた。」

「え、昔はこの御城にあつたのですか?…じつして今は無いのですか?」

王様は氣恥ずかしそうに手をそらして言つた。

「私の4代前の王が、國家が財政難になつた際に、「誰にも抜けぬのだから」と、言つて、台座ごと売り、財政難を乗り越えたそうだ。

」

そんな大切な国宝の聖剣を簡単に売るな!4代前の王!

僕があきれと怒りが混じつたツッコミを心の中でしていると、王様が気を取り直して話を続けた。

「勇者よ!…もしかしたら、商業国として発展した『マッカ 王国』に何か手掛かりがあるかも知れぬ。まずはそこを手指すと良い。この国よりも優れた武具もあると思つ。」

（獵銃よりもましな銃があるかもね。）
もちろん口にはしない。

執事から旅のための荷物を受け取る。

「勇者殿、改メテヨロシク御願シマス。
ルシファーがほほ笑む、怪しげに。」

「や、やつ。よろしく。」

僕は仲間のルシファー（本当は12人ついてくるはずだった）と一緒に魔王を倒す冒険の旅へでかけた。

第3話 チートな仲間、一人目登場！（後書き）

ようやく旅が始まります。「偉大なる賢者　トール&となる」と並行して話を書いていくつもりなので、どうやらペースが遅くなりそうです。

第4話 猛者たちとの戦い

怪しげなハンサムのルシファーと旅をする事になつた僕、まずは冒険者のギルトがあると聞いたのでそこに登録する事にした。ネットも新聞もないこの世界では、冒険者のギルトは情報が回る中心であり、魔王を倒す旅の仲間を探すのにも、この世界のどこかにある聖剣のうわさを聞くにも冒険者ギルトに所属する事がちょうどいいらしい。

僕はファンフーンと鼻歌を歌いながら、町を歩く美人にワインクするルシファーのそばを歩く事が重く感じた。女性の熱い視線と、不細工な男たちの冷たい視線を直接浴びなくとも、地味で小市民な僕にはきつかった。

（本当にルシファーって何者なんだろ？　ルシファーって名前、どこかで聞いたことがあるような気がする。・・・慨観感かな？）

僕は思案した。

城でルシファーに睨まれた猛者は氣絶し、キスされた女性を昏倒した。彼の能力は謎のままだが、少なくとも僕より遙かに強い事は確かで、火を見るより明らかだ。下手に彼を問いただして争つより、今は様子を見る方がいいだろう。藪をつついて蛇を出すのは得策ではない。

「ドウシマシタカ？ 勇者殿。ギルド一着キマシタヨ。」

「ああ・・・、うん・・・。」と返事して僕の意識がギルドへ向く。

僕達が建物に入ると厳つい男達がたたずんでいた。

僕は気負けしそうになつたが、ルシファーは鼻歌を歌いながらギ

ルドの受付に向かい、僕は流されるように続いていった。まるで、僕がルシファーの従者みたいだ。

僕が受付に目を向けると、ハシバミ色のきれいな髪をした女性が受付をしているのに気が付いた。

「こんにちは。今日はどのような御用ですか?」

ルシファーは、身を乗り出して受付嬢の手を握り、とろけそうになる笑みを彼女に向けた。

「コンニチハ、美シイ御嬢サン。私ハ、貴女ノ美シサと高貴ナ薰リニ惹カレテ来マシタ。今夜、一緒ニ食事ト、一人ツキリノ熱イ夜ヲ過シマセンカ? 今夜、一緒ニ二人ノ未来ヲ作リマショウ!」

ルシファーの輝く笑顔と露骨な誘いに彼女は赤くなる。でも、まんざらでもなさそうだ。

(露骨にナンパしないで欲しい。。。後ろのモテナイ猛者達の視線がチクチク痛い。・・・・ハあ。)

勇者は逃げくなつた。しかし、周りはきつい視線で囲まれてしまつた!

「ルシファー、露骨すぎるよ。初対面の人をナンパして何処まで行く気なの。」

僕はルシファーに耳打ちする。

「勇者殿、モチロン、ベッドノ中マヂ、トカ、彼女ノ中マヂ、でーす。」

「（ひそひそ）もうちょっと控えてよ。」

「分カリマーした。彼女ト、愛ノ真理ノ探究ト、生命誕生ノ神秘一立チ合イマス。」

「表現を控えるんじやなくて、行動を控えて欲しいんだけど・・・。とにかく、ルシフナー・・・、僕達はナンパしに来たんじやなくて、ギルドに登録しに来たんじよ。」

僕はルシフナーを諫める。

「チツ！」

輝く笑顔でされた舌打ちに恐怖を感じるもの、僕は受付嬢に意識を向けた。

「すみません、ギルドの方。僕達は冒険者のギルドに登録したいのですが・・・。」

僕は彼女の目の前でブンブンと手を振り、彼女の意識をルシフナーからこちらにそらした。彼女は僕を見て、がつかりしたような顔をしている。（ガキでダサくて悪かったね！）

「・・・えっと、ギルドの登録ですね。すみませんが、お名前とそれと身元を証明するような物はありますか？ 身元を証明する物がありましたら、煩雑な手続きを省くことができます。」

僕はこの世界に来て3カ月たつが、城から一步も出た事はなく、家なんて持っていない。何か身元を証明できるものはあるかな？と、考えていたら王様から渡された「仲間募集」の紙が役に立つかな？つと、思った。

彼女に渡すと少し驚いた様子だった。

「（ひそひそ）本当に勇者様と御一行様なのですか？本物の王家の紋章がありますが・・・。」

「ええ、そうです。」

僕もつられて小声で答える。

「分かりました。身元を保証する物はこれで十分です。では、従者様。こちらの方に勇者様と貴方様のお名前をお書き下さい。できれば戦いにおいてのプロフィールも書いていただけると助かります。」

「どうやら僕は彼女に勇者様の従者と見られたようだ。」

僕はうさんくさいハンサムを見上げる。そのハンサムは不細工な猛者達の視線を平気な顔で浴び続けている。

「・・・僕が勇者だとばれたら、仲間の行動についての責任を男たちに問われそうだな・・・。」

僕は責任回避をするべく、彼女の勘違いをそのままにした・・・。ジャジャーン（効果音）勇者は世渡りが上手になつた。

僕は僕達のプロフィールを書いた。僕は城の一般兵ぐらい、ルシファーは城で誰よりも強いと書いた。（実際はもっと強そうだが、僕にはそこまでしか分からなかつた。）

チーム名を何にしようか？と、考えていたら、ルシファーが横からペンを取り、「レディーの見方」と、勝手に決めてしまった。

「ええ～・・・『レディーの見方』御一行様。クエストとレベルについての『説明をさせていただきます。』

受付嬢はチーム名に顔を難しくしながら言った。

「レベルは受けられるクエストを制限する物です。これは無謀な挑戦をしないようにと配慮しての事です。クエストを沢山成功させたり、能力について実績を得たりすると、レベルが上がり、より高いレベルのクエストを受理する事ができます。ちなみにクエストを失敗、又は放棄すると異契約金を支払わなければならなくなるので、十分にご注意ください。貴方様は実績があまりお持ちでいらっしゃらないようなので、初期レベルのEから初めて頂くことになります。レベルはS・A・B・C・D・Eの6段階となります。」

ルシファーが話を聞いて顔をしかめた。

「メンドーデスネ。実績ガ有レバ、高レベルカラ始メラレマスカ？」

「えっと、そうです、はい。」

ルシファーは戸惑つた顔の受付嬢から体を後ろに向け、猛者たちに視線を投げた。

「コノ中ニ、高レベルノ人ハ居マスカ？居タラ、私ト決闘シテ下サーア。何人デモ、一度ニデモ構イマセン。」

「えっと、ルシファー！」

僕はルシファーの挑戦的な発言に慌てた。
でも、時は既に遅し！ ルシファーのハンサムな容姿と女たらしさが不細く・・、じゃなくて一流の猛者達の心に火をつけた。

「うおおお、ハンサムだからっていい気になるな！」

「お前の顔をグチャグチャにしてやる！」

「手前みたいな軟弱な顔を踏みつけたかったんだ！」

「女を全部持っていくな！」

「俺にも女を分ける！」

猛者達は心からの叫びと悲痛な願いを口にしながらルシファーにかかりていった。

ルシファーは不気味な笑みと共に両手の指を二本立てる。

「なんだ、6分で十分という意味か？」

僕は緊張する。ルシファーは強いと思うが、指を立てた意味が全く分からぬ。

猛者達を激突する寸前、ルシファーの姿がブレタ！
猛者達は次々に後ろへ吹っ飛んでいく。

一部の猛者は壁に頭を突つ込み、尻を向けている。

一部の猛者は隅で積み重なり山となっている。

一部の猛者は天に頭を突つ込み、首から下をぶらぶら揺らしている。

6秒もかからなかつた……。

ルシファーは両小指を口の前に持つていき、フツツと、息を吹きかける。

彼の小指はほんのり赤くなっているので、恐らく小指で「ピッポンをしたのかもしれない。無茶苦茶だ……。

（ルシファー……、本当に恐ろしい子……。）

僕と受付嬢は目をまんまるにしていた。
ルシファーガ輝く笑顔を受付嬢に向けた。

「美シイ御嬢サン、コレテ高レベルカラ始メラレマスカ？」

思わずコクコク頷く受付嬢。まるで人形のような動きだった・・・。

僕達はクエストレベルAから始める事になった。の中にレベルAの猛者が3人いたらしいが、ルシファーガ軽々と倒してしまったからだ。あの騒ぎの後、巡回していた衛兵が事件を問い合わせたが、「私は彼らに襲われました！（一応、嘘ではない）」と言い、ルシファーは何も罰を受けなかつた。ルシファーガの魅力は男にも通用するのか？あるいは何かの力を使つていたのか？とにかく事件を問う衛兵の目が少しおかしかつた。

僕達はギルドに届け出られたレベルAのクエストを見て、近隣の村の近くの東の山で暴れる謎の魔物を倒す依頼があつたので、それを受けてみる事にした。

それには御城で防具・武器を貰つたが一応武具店を覗いてみる事にした。

（魔物よりもルシファーガの方が謎だけどね・・・。）

第4話 猛者たちとの戦い（後書き）

急遽変更！次回はチートなオリジナルヒロインを出そうと思つ予定です。

第5話 勇者、初めてのお使い（戦闘）（前書き）

旅行に行つていて、遅くなりました。

第5話 勇者、初めてのお使い（戦闘）

僕とルシファーは武器を覗きに行つた。

「……いらっしゃい……。」

やる気のない声で店主が迎えた。

「……。」「

僕とルシファーは沈黙している。

店内に並ぶのは、鍬・鋤・草刈り鎌・のこぎり・斧など農具など生活に必要な物ばかりで、唯一あつたのは護身用のナイフ程度だった。

よくよく考えてみると、一般的の国民が、生活に不必要的武具を買ははずがない。

武具が必要なのは、城の兵士や、傭兵、冒険者だけであり、僕達が入つた店は生活に必要な物しかなく、この店で装備を整えても農民一揆になってしまい、魔王（悪徳領主）で、勇者（村の若いリーダー）みたいな構図が出来上がる。この国にも武具を作る鍛冶家はあるが、城の方で管理されているらしい。

つまり、僕達が城でもらつた物がこの国で良い武具であるということだ。

僕達は『謎の魔物の討伐』の依頼を受けるために、冒険者ギルドに戻つた。

ルシファーは少し大きめなギルドの建物に入り、真っ先にギルドの受付嬢とおしゃべりを始めた。

「所デ、美シキ御嬢サン。冒險者ギルドハ、ドンナ歴史ガ有ルノデスカ？」

「40年前までは『冒險者ギルド』といつ名前ではなく、『魔術師ギルド』だったのよ。」

ルシファーが受付嬢と仲良くなるための作戦から始まつた会話に、僕は少し驚いた。

「元々は、魔術師同士の知識を共有し合い、魔法を必要とする人へ人材を派遣する組合だったの。」

昔は、災害や生活などに魔法を必要とする人達に魔法を提供する事から始まつた。

東に大地震が起これば、天に祈りて、大地を鎮め
西で干ばつが起これば、雨を祈りて、大地を潤す
北で争う夫婦があれば、賢者の知恵をもつて、平和を導き
南で子に恵まれない夫婦があれば、癒しの力で子種を増やしてやる

いつの世も、人類が抱える問題は似たり寄つたりである・・・。

そんな様子で、昔は不思議な力を持つ魔物は居なく、戦争、治安維持、天変地異から他愛もない問題にも携わってきた。

しかし、40年前から力の強い魔物が発見された。

一般の人人が獵銃や斧で追い払おうとしたが、軽々とやられてしまつ程に強かつた。

そこで、盗賊などの悪党の討伐や、他国との戦争で戦う魔術師たちに魔物の退治を依頼が回つて來た。

いつしか、一般生活などで魔法を求められる数が減り、戦いや討伐ばかりの依頼が増えていった。

魔術師達だけでは足りなくなつたために、戦いに向いている傭兵などが、一緒に依頼を受けるようになった。

魔術師でない者も参加するよくなつたので、名前を変更する事になつたそうだ。

案の一つに『傭兵ギルド』が有つたが、殺伐としているので却下。依頼の一部に、未知の大陸や島の発見をする仕事を国から受けたりする事があるので、それにちなんで冒険者という事で、『冒険者ギルド』になつたらしい。

これなら、色々な人が依頼をしやすい雰囲気な名前だ。

「しかし、魔物は40年ぐらい前から突然現れたのですか？」

僕は意外な過去に驚いた。

「ええ、不思議な事にね。中には意思を伝えられる魔物もいて、それを魔族と呼ばれているわ。」

驚いている僕らに彼女は幾分得意げに話す。

「へへ、ソレハ凄イデスネ。魔物ガイキナリ、言葉ヲ話スナンテ。ルシファーが感心する。

すると、彼女はキヨトンとする。

「え、何を言つてゐるんですか？・・・ああ、そういえばルシファー様は異世界から来て下さつた勇者様ですものね。そういえば、意思を伝えるのも苦労無さつているようですし。」

・・・勇者は僕なんすけどね・・・。

面倒な僕と、女を口説くルシファーは彼女の感違ひを訂正しない。

彼女はルシファーの口調のおかしさに納得したようで、話し始める。『この世界は『神、イエスキリスト』に祝福された世界なのです。元の世界で聞きなれた神の名前を聞いた僕は驚いた。ルシファーは妙に納得した顔で頷いた。

彼女の話では、神の元で大いなる意思を一つに統一されているらしい。

この世界に住む住人は、声を通して自らの意思を相手に伝える事

ができる、紙や木に印を書く事で自分の意思を込める事ができるらし
い。

内容がなんとなく分かつてしまっていたが、依頼書をよく見返すと
訳の分からぬいたずら書きみたいなのがあつたが、それが僕の
脳内で変換されているのか、どうしてか読めてしまうのだ。

「まあ、そんな訳でこの国では意思を伝える練習はすれば、2歳に
なればある程度話せるのよ。動物の中にも人と意思のチャンネル
が合つて、人と話ができる動物もいるのよ。王に助言する動物もい
たそうよ。中には話ができる魔物がいてもおかしくないつという事
よ。」

彼女の説明に便利だなあと、僕は頷いた。ルシファーは、目線が顔
とそのちょっと下の方を行来きしていくが、僕は無視した。

「所で、冒険者ギルドにどんなようかしら?」

彼女は脱線してしまった話を元に戻した。

僕は彼女に掲示板に張り付けてあつたクエストを指差した。

「この依頼をこなしたいのですが。」

「勇者様がこの依頼をこなしていただけるのですかーそれは助かり
ます。」

彼女は少し驚いたようだったが、すぐに嬉しそうな顔をした。

「実はその依頼は4チーム失敗しているんですよ。」

・・・・やつぱり、止めておけば良かったかな・・・・。

僕が勇者らしからぬ考えを巡らせていると、彼女は説明をし始めた。

「(J)から東にあるスタッカート村の南には迷いの山脈があり、そ
こに獵へ行つた者達は半分ほど帰つて来なかつたそうです。帰つて
来た者も、「ば、化け物が・・・」と言い残して氣絶すると、次の

日に何も覚えていなかつたそうです。」

迷いの山脈つて何さ！普通は迷いの森じゃないの！冒険者初日から、何で難易度が高そうな場所に行かなくちゃいけないの！

そんな僕をよそにルシファーは、

「大丈夫デス、私ガ退治シテ来マショウ！」

・・・・もう、断れそうに無いな・・・・。

僕はがつくり肩を落としていると、彼女は思い出したかのように付け加えた。

「この依頼は1ヶ月前から受けている女性がいるんです。この依頼は期限が設けられていないので、依頼を断りさえしなければ失敗にはならないのです。その方と話をつけて協力するのも一つの手かもしれません。」

彼女の言葉に僕は思案する。

その人が強ければ、僕は生きて帰つて来られるかな？・・・でも、1ヶ月やって、成果が無いんじや、あてにならないかな？

「・・・・その人、美人かな・・・・？」

ルシファーがボソリと呟いた。

どちらも勇者には程遠い二人。所でルシファー、妙な片言な話し方はやはり演技だったのか？

「その冒険者の特徴は、水色の髪と瞳を持ち、バスター・ソードを一本、肩に背負つてます。」

「分力リマシタ！早速行キマショウ！」

ルシファーは水色の髪の女性に興味を持ったようだ。ルシファーに引きずられて、僕は出発した。

僕らは東のスタッフカート村を目指して歩いていた。

村へは道なんて、洒落た物は無かつた。

草がぼうぼうに生えた平野で、虫に刺されて肌が腫れ
胸元まで高さのある大きな川で流されそうになり
ウサギを追つて森に入るも、クマに追われて帰つて来たりした

その間ルシファーは、

聖なる加護で虫から身を守り
川の水面をひょいひょい歩き

クマに追われる僕を見て、腹を抱えていた

現代つ子な僕はへとへとになり、最初は用心して構えていた王家の猟銃も腰に差したままにした。

ルシファー、少しあ助けてほしいな・・。

途中、角の生えたウサギの魔物を見つけたが、人を食べる種では無いらしく、僕達を襲つてきたりはしなかつた。

雨もぽつぽつと降つてきて、僕の体力をさらに奪つていく。
平野なのに、まるで毒の沼に入つているような気分だつた。

魔物に襲われるよりも、道中でへばる僕の前に、ついに魔物が現
れてしまつた。

ブルンブルンと震えるゼリー状の体で、不気味な目と口を持つて
いる。

「スライムだな。」

ルシファーがつまらなさそうに呟く。

「雑魚ダ、ワタル、一人デ頑張ツテ下サイ！コレグライ大丈夫デス

！」

お願いだからルシファー、傍観しないで助けてよ！

僕は怯えつつも、初めて見る不気味なスライムと対峙した。

形は崩れたゼリーみたいだ。今思うと、ゲームみたいに涙型の形
を保つのは難しそうで、目の前にいるスライムの形の方がリアリテ

イーはある。

・・・・・スライムが可愛いなんて、あのゲームの中だけだ！・・・・・

僕は鳥肌を立てながら、王家の猟銃を3発撃つた。

スライムはあっけなく四散する。

「はあー、良かつた。本当に弱くて・・・。」

僕は安堵して、銃の弾丸を装弾して、腰に差した。

「さて、先を行こう！」

僕はルシファーに初めて勇者らしいリーダーシップを取った。

するとルシファーはにやにや笑っている。

「マダダゾ、ワタル。」

ぽつぽつと雨が降る中、四散したゼリー状の物は一か所に集まつてきて、元のスライムの形を取り戻した。

「ノノノノノ！」

僕は悲鳴を上げる。

スライム、お前は最弱モンスターじゃなかつたのか。

僕の方に向かってきたスライムを僕は素早く抜いた剣で切りつけた。

スライムが真つ二つになるも、つかのま、すぐに再生して僕に飛びかかって来た。

慌てて避けようとして無様に転ぶ僕の顔面をスライムが覆い、僕は息ができずに呼吸困難になる。

僕は必死の形相になり、両手でスライムを引き剥がす。

投げ飛ばしたスライムにタクトの様な魔法の杖を抜いた。

僕はスライムによりベタベタになつた顔を無視して、杖を四拍子で振つた。

火の精霊たちよ、我が呼びかけに答えて悪しき物達をその炎をもつて浄化せよ！

杖の先に拳サイズの炎が灯り、それをピッチャーホームでスライムに投げつける。

魚の目師匠アフロディテの教えによると、この世には様々な精靈が満ち溢れ、自らの魔力を精靈に捧げる事により、精靈の力を引き出す事が魔法らしい。

僕は火の精靈の力を借りて、火の球を生み出し、投げつけた。スライムからジュワッヒ、蒸発する音が聞こえて、その体は半分になつた。

「遂にやつたか！」

僕は喜びながら弱りきつたスライムを眺めた。

ここで僕は気を抜き、痛恨のミスを犯す。

僕はもつと火の魔法をかけるべきだった。

ポツポツと雨を受けるスライムは、塩で縮んだナメクジの如く、徐々に膨らんでいき、動けるほどに回復してしまつた。

僕はあんぐり口を開けて固まつた。

しばらくして沸々といら立ちが湧いてきた。

「どおおおおりやああ！」

僕は剣で地面の土をザックザクとスライムにかけ、剣の腹でスライムを上からどんどん叩いた。

スライムを軽く地面に埋めた僕は、林の方に走つた。

剣で枝をバツサバサと切り、枝を集め、スライムの上に置いた。僕はまた炎の魔法をかけて枝を燃やして、これでもかつと、言つぐらに炎の魔法を連発した。

ようやくスライムは蒸発して、僕は膝をついた。

「ヨウヤク倒シマシタネ、勇者殿。見事デス。」

にやにや笑いながら話しかけてくるルシファーに、僕はギラつく視線を向けた。

ルシファーはビックリした。視線で人を殺せそうな勢いだつた。

「・・・・先を行くよ・・・・。」

ルシファーはコクコク頷く。

普段は大人しい人程、怒ると怖い。それは事実のようだ。

初めての戦闘でスライムと死闘を繰り広げた勇者ワタル。
その険しい旅に果てに、勇者は魔王を倒す事ができるのか。
がんばれ勇者ワタル！

世界の平和のために

彼が元の世界に戻るために！

第6話 空色の少女

僕とルシファーはようやくスタッカート村に着いた。

木の小さな小屋が数個並んだだけのさびれた村だった。
さてと、同じ依頼を受けている人は何処にいるかな？ もう出発してたりして。」

「サテト、水色ノ髪ノ美少女ハ何処ニ居ルカナ？ 早ク会イタイナ。」
僕とルシファーは依頼を受けた冒険者を探す。ルシファーの目的は変わってしまったようだが。

村の端っこでは畠を耕している人がいたり、あっちこっちで鶏を小屋で飼っているようだ。

「すみません。南の迷いの山脈に現れる魔物についてお聞きしたいのですが？」

僕は畠を耕す男に声をかけた。

「はあ？ 畠を手伝いたい？ なら、頼むよ。」

男は耳が遠かつたみたいだ。

「違います。南の魔物についてお聞きしたいのですが？」

「そうか、なら畠を頼むよ。」

「違います！ だから・・・」

「聞こえてるよ！ バー口ー！ ここには素直に手伝つて言いやがれ！
手伝わねえなら帰れ！ ああ、仕事メンド癖。」

男が怒鳴る。

僕は茫然とした、徐々に腹が立つてきた。

僕はいら立ちを隠しながら子供達に声をかけた。

「君達、南の迷いの山脈に現れる魔物について何か知っているかい？」

子供たちは足を止めて僕を指差した。

「ああ、魔物が来たぞー！ 石投げろー！」

ガツン、ガツン！

子供たちはふざけて僕に石を投げつけてくる。そこそこ痛い。

「痛い、どうしよう、ルシファー……」

僕は助けを求めるべく、顔を手で庇いながら、首を回してルシファーを探す。

「辺境ノ村ニ隠レタ女神様、私ト、ロマンチックな夜ヲ過ごシマセンカ？」

早速村娘を口説いていました。

ヅツチン

何かが弾けた様な音がした気がした。

「フギヤアアア！む・か・つ・ぐー！！」

僕は大声で喚いた。

子供達は怯えて逃げ出しだが、鈍くさい鼻たれ坊主一人だけが尻もちをついた。

鼻たれ坊主は「うわあーん！！」と盛大に泣きだした。

僕がイライラ、イライラ、イライラしていると、どこからともなく、箒を手にしたおばちゃんが現れた。

「うちの子に何をするのよ！」

おばちゃんが箒の先を僕に向かって振りおろす。

僕はあわてて避けると、次から次へとありえない方向から箒を繰り出してくる。

箒を避けている内に家の壁まで追い詰められてしまった。

「ちょっと、待って！その子供たちに石を投げられたんだってば！」

「嘘言うんじゃないよ！うちの子がそんな事するはずないでしょ！」

異世界だらうとモンスターペアレントは存在するらしい。

すると、にやにやしながらを見物していたルシファーが助け船をだしてくれた。

「スミマセン、奥サン。彼ハ私ノ仲間デス。誤解デスよ。」

ルシファーはハンサムオーラでおばさんを照らした。

おばさんは顔を赤らめルシファーを眺めるも、ルシファーはこいつそりとそっぽを向いて、吐きそうな顔をした。

おばさんが落ち着いたのを見て僕はおばさんに声をかける。

「そうです、僕達は南の迷いの山脈に住む魔物を倒しにきました。

「そうかい、それは御苦労さま。ここまで来るのは大変だったでしょ？」

おばさんは打つて変わつて穏やかな対応になつた。

おばさんの相手も大変な事の一つでしたが・・・。

僕達はようやく話がつきそつた。

しかし、それを邪魔するものがいた。

いきなり殺氣を感じて僕は横に転げた。

その刹那、

ズドーンと爆発的な破壊音が響く。

横を見ると、巨大なバスター・ソードが僕の横に小さいクレーターを作つていた。

顔から血の気が退きまくる僕はバスター・ソードを握る人を見る。その髪と瞳は晴天の空の様な水色で、僕と同じ位の背をして、普通の女の子と同じぐらいの腕の太さだった。

そんな女の子が自分の背に迫るほどの大さのバスター・ソードを片手に一本ずつ軽々と持つている。

女の子が視線をこちらに向ける。その瞳には一切の感情がうかがえない、とても冷たかった。

彼女はその可愛らしい口を無表情で開く。

「お前がこの地を荒らす曲者か。」

「ち、違います！僕はこここの村に来て5分も経つていません！」

彼女の勘違いに僕は慌てる。

「嘘をつく必要は無い！この人相書き、お前にそつくりだ。」

彼女はそう言い捨てて、一枚の紙を突き出す。

その人相書きの人物は、僕と同じ黒真珠のような髪と瞳。

その顔の肌は日本人みたいな肌色。

目は二つ、鼻と口は一つだった。

問題は、その人相書きはまるで、クレヨンで描いた子供のいたずら書きのようで、黒髪と黒い瞳の人間ならば、男も女も当てはまつてしまふ人相書きだつた。

「・・・・・、あまり似ていませんよ・・・・・。

これで似ていたらちょっとショックだ。

「そんなはずは無い！この人相書きでは・・・・・

彼女は改めて人相書きを確認した。

すると彼女はしばらく黙つた。

彼女は少しだけ申し訳なさそうな顔をした。無表情なので分かりにくいか・・・。

「やっぱり、人違ひだよね。その人相書き全然似ていないよ。」

僕が笑いながら言うと彼女は答えた。

「・・・すまない、この人相書きはお前に違ひないが、この村とは別件の人相書きだつた。」

痛恨の一撃！僕は二重にショックを受けた。

「この村の件は、・・・これだ。」

彼女は漁つた鞄から、一枚の人相書きを出した。

それは人型の黒豚が描かれていた。

・・・僕とは黒以外の共通点が無い、というか人ですら無い。

「それで、お前に關しては・・・、えつと・・・、何で私はお前の人相書きを持つてているんだっけ？」

「僕に聞かないでよ！僕が聞きたいぐらいだ！」

首をかしげる彼女に僕は不満をもらす。

ふむ、と頷いて彼女は僕に問う。

「お前は何の目的でこの村に来たのか？」

この村に来て初めて話がかみ合つた。

「僕達は冒險者ギルドの依頼で、この村の南にある迷いの山脈に住む魔物を退治しに来た。」

彼女は少し考え込んだような顔をした気がした。

「私も、この魔物に手を煩わせている。他者と協力してはならないという決まりは無いので、お前は私と協力しないか?」

努力が実を結んだ。魔物退治は全く進んで無いけど。

「僕の名前は、長谷川亘。はせがわわたる」

「私ノ名前ハ、ルシフアーリ申シマス。以後、御見知リ置キヲ、美

シイお嬢サン。」

彼女は無表情な顔で僕とルシフアーリを見る。

ルシフアーリのハンサムオーラも彼女には効果が薄いようだ。

「・・・了解、私はキリだ。」

彼女はバスター・ソードを肩に収めながら皿口紹介した。

「・・・では、早速出発する。」

「へつ、もう日が暮れますよ?」

僕は驚く。

夜になり、魔物が活発になつては非常に困る。

「魔物対策はあるのですか?」

僕の問いに彼女はコクンと頷く。

「私がいれば、ザコが千でも万でもうつとも変わらない。」

「・・・、不安が増えました。」

「・・・行くぞ。」

彼女は東に向かつて歩き出す。

「・・・・迷いの山脈は南ですよ、そつちは東。」

彼女は立ち止り、南へ方向転換する。

「では、改めて、・・・行くぞ。」

彼女は南へ真つすぐと進んだ。

バキッ！-ドガッ！-

民家の壁にぶち当たるも、彼女は壁を蹴り破る。

仲良く食卓を囲み、団欒を楽しんでいる家族の夕飯を足で踏みつけて先を進んだ。

彼らは目をまん丸にして、口をポカーンと開けていた。

僕は慌てた。

「何をやっているの！？」

「何つて、迷わないよつて、南へ真っすぐ進む。」

「民家は迂回すればいいじゃないか。」

「迂回する内に、自分では気がつかない内に道が逸れ、とんでもない所へ辿りついてしまう。山を田指しているのに、気が付くと何故か海や、砂漠とかにいるものだ。田の前に壁があるならば、それをぶち破つて真っすぐ進む。そんな格言が有つた様な、無い様な。」

・・・その格言、使い方が違う！人生で挫折しかけた時の格言で、本当に迷子になつた時の格言では無い。もしかして、こんなに強いのに一力用も依頼をこなせないのは方向音痴だから？・・・

彼女はまた壁を蹴り破つて外に出て、ルシファーも面白そうに後に続く。

僕も外に出ようとして後ろから肩を掴まれた。

「お・ま・え・ら、何の家を荒らしとんじゃどりやああ！！！」

「ひらの家のお父様はどうやらお怒りのようですね。」

「御免なさい、さよなら。」

僕は勇者の足を生かして、その場から逃げだした。

無事に？水色の戦士の少女と合流した、勇者ワタルの御一行は南の迷いの山脈へ向かう。

ここまで苦難の道のりであつたが、彼らにさらなる試練が待ち受けれる。

まあ、ここまで道のりはスライム一匹だけだったが・・・。

さて、謎の少女キリと怪しいハンサムのルシファーの正体はいかに！？

次回で明らかになるか！？・・・・まだ無理かもしれま

せん

第6話 空色の少女（後書き）

もうすぐ夏休みも終わりで、学校が始まつたらなかなか書けないと
思います。

できるだけ書くつもりですが、更新できなかつたらごめんなさい。

第7話 勇者ワタル！早くも大ピンチ！？

僕とルシファーはスタッカート村で出会った、水色の少女ことキリの後を付いて行つた。

その後の数日、僕らは波乱に満ちた冒険をした。

雪山で遭難しかけたり（僕だけ瀕死状態に陥つた）、ジャングルで原住民に槍を突き付けられたり（僕だけ危うく神への生贊にされかけた）、

王族暗殺計画の容疑者にされたり（僕は王が飲むはずの毒を少量飲んで倒れた）、

『勇者よ、お前に世界の半分をくれてやる!』と言つ魔王の前から逃げ出したり（その時は二人とはぐれてい、僕一人だけだった）。

この依頼は簡単にはいかない。

この依頼をこなすには相当な覚悟が必要だ。

・・・と、彼女告げる。

「・・・、二人とも、覚悟はいいか・・・。」

「

彼女の問いかけに、僕とルシファーは沈黙で答えた。

僕らの沈黙に彼女は何かを感じたようだ。

彼女はひとつ頷いて、前に向かつた・・・が、僕とルシファーに呼び止められた。

「何で、迷いの山脈に行くだけで、万丈波乱な冒険劇を繰り広げなくちゃいけないんだ!!」

僕らは、長い道のりを経て、迷いの山脈の前にようやく辿り着いた。

キリは酷いぐらいの方向音痴で、僕らもどうして迷子になつたのか分からぬぐらいだ。

通常なら3時間歩けば着く距離なのに、世界を一周してこの山脈

に辿りついたような感覚だった。

さすがのルシファーもハンサムな顔に疲労の色が浮かんでいる。

僕も依頼を始める前から、疲労困憊で倒れそうだ。

唯一平然とした顔をしているのは、迷子になれているキリだけだった。

やはり、一ヶ月も依頼を達成できなかつたのは、敵が強いからではなく、彼女が残念な程に方向音痴なせいのようだ。

「・・・過去は振り返つても何も得られない。私達は前に進むしかないんだ。」

キリは遠い目をして空を眺めた。

「少しほ反省しろ！！」

僕は声の限り彼女に怒鳴つた。

迷いの山脈は見た目普通の山だつた。

山は木々で生い茂つていて、野生の動物、魔物も沢山いそつた。

ただ、それなりに高く、とても広大で、依頼の魔物を探すのも大変そうだ。

僕らが山に足を踏み入れようとした時、ルシファーが顔をしかめた。

「何だか、結界があるのか、空間が歪められている気配がする、いや、シマスよ。」

ルシファー、君は胡散臭い話し方が面倒になつたんだね。もう普通に喋つても良いよ。

しかし、結界があるといふ話しさは見過さずことができない。

僕はふつむと唸る。

「ルシファー、空間の歪みはこの迷いの山脈が持つものなの？誰かが作り出した物なの？」

「恐らく、何者力ガ、口の結界を作り出していくよつだ。」

ルシファーは思案しながら話す。

キリも自分の思考に没頭する。

「なるほど、私が迷いの山脈に近づく事すらできなかつたのは、結界のせいなのか！？」

「「それは違う、お前が方向音痴なせいだ！！」

僕とルシファーはハモツて、ツツコム。

彼女は聞こえてないのか、何も感じないのか、スルして山へ向かつた。

僕達は山を登り続けた。

実の所、登り始めて1時間ぐらいしか経過していないが、僕が現代つ子な上、世界を一周する程の迷子になれば疲労で歩けなくなつても正直仕方無いと思う。

僕は王家の猟銃を杖にしながら、山道を登つた。

王家の誇りを傷つけないかつて？・・・そんな物は糞くらえだ！

普段は温厚な小市民の僕も、疲労で気が立つてゐるようだ。

ルシファーも、自分の周りにいるのが残念な美少女だけだとやる気が出ないらしい。

キリは黙々と登り続けている。

彼女は強そなが、戦い以外の事はからきしだめらしい。

美少女なのにお色気がゼロなのは珍しい。

彼女も暇になつたのか、僕に話しかけてきた。

「・・・ワタル、何してる・・・」

「え、そりや、道しるべのため、道に印を付けてゐるんだよ。こうすれば帰り道が分かるんだよ。」

僕はナイフで木にペケ印を書きながら答えた。

「なるほど、・・・私も・・・」

僕は嫌な予感がした。

彼女はシャラ ンといい音を立てて、優雅にバスター・ソードを一本抜いた。

「ちょっと、ちょっと待って！！」

僕はあわてて彼女を静止するも、わずかに遅かった。

彼女は樹齢100年を越えた樹木にペケ印の軌跡を描いて切断した。

樹齢100年の木を切られて大地が怒ったのか？

巨木は天罰と言わんばかりに倒れ込んできた！！

何故か、善良で小市民な僕の頭上に！！

「？ 5 k \$ % “ # m ¥ @ * ! ! !

僕は声にならない悲鳴を上げて、横に飛び退いた。

ズドーン

僕が慌てたために脱げてしまった靴が、僕の目の前で巨木につぶされる。

「・・・・・」

僕は無言で彼女を睨みつける。

彼女は頭をかいて、口を開く。

「・・・・・ 気にするな・・・・・」

「君が気にする立場だ！！」

僕はとても泣きたかった。

魔物よりも先に仲間に殺されるような気がした。

僕達はひたすら登り続ける。靴が片方脱げてしまい、歩きづらいし、足の裏が痛い。

もし、山の頂上に魔物がいるのであれば、頑張つて上を田指せるだろう。

しかし、魔物は何処にいるのか分からぬのだ。

「ゴールの見えない山登りなど、やつていて気が萎えてくる。

この広い山脈の中から魔物を探せと言われても、数日はかかるつまうだらう。

「ああー、メンド癖ー。やつてらんねえよ。」

「ルシファーがボヤク。演技をする気力が無いようだ。

「おい、ワタル。こんな依頼ふけちまつて、とつと魔王の城へ行こうぜ。」

「困っている人がいるみたいだし、もう少しだけ頑張つてみようよ。だいたい、元々はルシファーが勝手に受けた依頼じゃないか。」

「ルシファーが今まで猫かぶつていた事に気づいていた僕は、ルシファーの地の話し方に疑問なく返す。

ルシファーは僕の答えに舌打ちする。

僕とルシファーの会話を聞いて、キリが尋ねるかのように僕の目を見た。

勇者だつて知られたらどんな反応をするんだらう？

僕は少し考え込んだ。

キリの人柄は、強くて、方向音痴で、馬鹿である事が分かつた。（別に言つても、たいして興味を持たないか、すぐに忘れてしまうかな？）

「うん、僕達は魔王の城を目指しているんだよ。」

「・・・そうか。」

キリは何かを考え込むように黙つていた。

僕達は山を登つていると、3匹のゴブリンが現れた。

キリは小物に興味ない様子で無視した。

「ワタル、今の内に経験積んどけ。」

ルシファーもゴブリンを無視して登り続けた。

「ちょっと、ちょっと待つてよ。」

ゴブリンは強者の一人には近づかずに、弱者な僕にだけ襲いかか

つて来た。

僕は恐怖に身をすくめながらも、王家の猟銃を構えた。

ゴブリンは僕の膝ぐらいまでの大きさで、茶色い不気味で細い体で、まるでミニイラみたいだ。頭からはちょこんと小さい角があり、手の爪は小さくも鋭く、黄色い瞳がきらきら光っている。

「キシャー！」

ゴブリンが奇声をあげながら飛びかかる。

僕は恐怖していたが、スライムの時は違つて落ち着いていた。スライムは得体のしれない化け物で、ゴブリンは得体のしれない獣に見えたからかもしれない。

人間、理解できず、見た目が気持ち悪いものを怖がるものだ。実際に僕は沖縄のなまこを怖がつて触れなかつたし・・・。見た目もひとつの大好きな要素だと思つ。

僕はゴブリンに狙いを一瞬で付けた。

僕の頭の中に獅子王師匠の教えが思い出される。

『ワタルよ、恐怖を飼い慣らせ。恐怖で身がすくんでは命を落とし、恐怖を感じずに強敵と立ち向かえは殺される。しかし、恐怖を飼いならす事で、恐怖を敵からの攻撃を察知する第六感に昇華するのだ。・・・でも無理は禁物。危なかつたら迷わずにげる。』

ゴブリンを相手にして本気で逃げようかと悩んだ。

しかし、ここで逃げていては何もできやしない。

ゴブリンに勝てない奴が魔王に勝てるはずが無い！（正論）

そんな考えをほんの一瞬で思考した。

狙いを定めた王家の猟銃が火を噴いた。

一発はゴブリンの腹に命中。

一発目は一人目のゴブリンの頭に命中。

3発目は外れてしまった。

3回目は「ゴブリンは仲間がやられてしまって、逃げ腰になつているようだ。

僕は一匹を倒した事に油断してしまい、装弾しようとした弾を落としてしまった。

それを見た3匹目はチャンスとばかりに飛びかかって來た。

僕は再び恐怖を感じながら、銃をあきらめて後ろに飛び退いて攻撃を避けた。

すると、『ゴン！』と大きな音が鳴り響いた。

「痛い！」

僕は頭を太い木の枝にぶつけてしまい、頭を抱えて蹲つた。

僕は窮地に立たされた。

ゴブリンは勝利を確信し、こちらに飛びかかってくる。

くそ、ゴブリン。ここまで手強いとは！！

僕は歯を食いしばって後悔するも、他人が見たら「お前が馬鹿だから。」と口をそろえて言う事だらう。

頭がぼんやりした僕は、ゴブリンが襲いかかってくるのを他人事のように見る。

そんな中、さまざま事が走馬灯のように脳内を流れた。

この世界に来なければ、迎えるはずだつた誕生日のケーキ
両親と一緒に行つたレストラン（母の料理は期待できない代物だ
った。）

まだやりかけの、ドラ H?とF ?

好きなアニメ・マンガと小説の続き etc...

・・・・・どうでもいい事が思い浮かんでくるな・・・・・。

僕が脱力しかけている時、親友の真央の姿が思い浮かんだ。
彼は笑いながら「馬鹿な奴」と言つてゐる気がした。

そうだ

僕は死ぬわけにはいかない
もう一度真央に会うんだ！（彼とは親友であつて、決して変な関係ではない）

僕の意識が覚醒する。

ゴブリンは目の前に迫つていて、剣を抜くのは間に合わない。
僕は手も使い、蹲つた状態から飛び上がり、木の枝をつかんでぶら下がつた。

ゴブリンは僕を見失つて、ドンと、そのまま正面の木にぶつかつた。

僕はゴブリンの上に飛び降りて、足で潰す。

「ピギヤアア！…」

悲鳴を上げるゴブリンに、僕は素早く剣を抜いて貫いた。
ゴブリンから縁の血が出てきて、ゴブリンは痙攣してから動かなくなつた。

「はあ、はあ、はあ。」

僕は激しい戦いと緊張で息が切れる。
ぱちぱちと拍手が聞こえる。

「おめでとう、ワタル。少しは強くなつたのかな？」

僕はルシファーを睨む。

ルシファーも僕の睨みに慣れたのか、にやにやしてくる。
「はああ…。」

僕はため息をついた。もう散々だ。

僕はまた山を登ろうとして、キリ ガいない事に気が付いた。

「あれ、キリ は？」

僕が尋ねると、ルシファーは首を振つた。

「ワタルが戦つている間にどこかへ行つた。」

ルシファーもため息をついた。

キリ とはぐれてしまつた以上、彼女と合流する事はもう不可能

だろう。

今頃、海底の古代遺跡や、天界で迷子になっているのかな？

ゴブリンと死闘を繰り広げた勇者ワタル、彼とルシファーはキリ
とはぐれてしまう。

彼らは・・・いや、ワタルは無事に迷いの山脈から帰る事ができ
るのか！？

第8話 そして、勇者の御一行様は誰もいなくなつた

僕とルシファーはルシファーと一人で山を登り続けた。

僕はルシファーを盗み見る。

ルシファー、・・・どこかで聞いた事のある名前だなあ。

そう思いつつも、僕は何処で聞いた名前なのか思い出せずにいた。
(ルシファー、君はいつたい何者なのだろうか?)

彼はキリ が居なくなつてから、ますます不機嫌になつた。残念な美少女も目の保養になつていたらしい。

僕は心を決め、彼の正体を問う決意を構えた。

「ねえ、ルシファー・・・さ、様。あ、あ、あなた、さ、様、まは。・
・いつたいな、何者なので、しょ、しょうか?」

僕は疲労のあまり、言葉づかいがおかしくなつたようだ。けつして、緊張により、過呼吸になんてなつていない。

「えーっと、どうするかなあ。」このまま力を隠して行くのもメンンドーだし。

彼は少し迷つていた。

神との言いつけば絶対なのだ。

もちろん、彼が良い子ちゃんじや無いので、こいつやってこの世界に堕ちたのだが。

「まあ、いつか。メンンドーだし。」

神の言いつけもどこ吹く風と、あっさり破る事にした。神様のお気に入りのくせに、罰を受けただけの事はある。

「ああ、俺は完全無欠美男子な偉大なる天子長様だ。」

「て、天使様ですかあ?」

僕の声が裏返る。これまでのルシファーの言動を考えても、とても天使には見えない。

唯一天使っぽい所は、ハンサムな所だけだ。

「疑つているのかあ?はあん!?」

「い、いえ、そんな事無いです。」

僕はあわてて否定した。

「で、でも。どうしてこの世界にいるんですか？」

僕は怒りを反らすため、話を促した。

「それはだな、恐らく嫉妬だ。」

彼は遠い目をして言った。

「し、嫉妬ですか？？」

僕は頭の中がハテナマークだらけになつた。

「ああ、俺のボスであるイエスキリストは俺に嫉妬したんだ。俺は、美しい物を愛で、美しい物を嗜み、わびさびで風情ある時間を過ごすのを愛した。」

僕は頭の中で、「美しいものを愛でる」 = 「女の子たちをナンパ」、「美味なるものを嗜み」 = 「酒池肉林」、「わびさびで風情ある時間を過ごす」 = 「口寝」と変換した。あながちはずれでは無いかもしれない。

ルシファーは続けた。

「神は大変忙しく、そんな心豊かな俺様に嫉妬した。俺をこの世界に墜とし、勇者であるお前と共に魔王を倒す事を命じられたのだ。」

神様はそんなルシファーに腹をたてたのかもしれない。数日間一緒にいる僕には、神様の気持ちが分かつたような気がした。

そんな話を聞きながら、僕はルシファーを聞いた事のある理由が分かつた。キリスト教で地獄に墮ちた、墮天使ルシファー、もしくはサタンともいう。話を聞いているうちに、僕は疑問に思った。

「神様をイエス・キリストって言つたけど、この世界にもキリスト教があるの？」

「ふむ、お前はキリスト教を知つてはいるのか。ビニの世界から來たんだ？ミラージュドリームか？アラゲ ジア？ジュー ランド？それともガイアか？」

ルシファーは珍しく興味ありげに聞いてきた。

「うーん、多分ガイアだと思う。僕達は地球って呼んでいるけど。」

「そうか、あそこは厄介だなあ。」

「何が厄介なのだろうか？分からぬが僕はルシファーに元の世界に戻る方法は無いか聞いてみた。」

「ねえ、ルシファーは僕を元の世界に戻す方法を知らない？」

「さあな？俺達天使には、神の命令無しには異世界に行けない。」

僕はルシファーの足にすがり着いた。ルシファーは嫌そうな顔をするが、ここで機会を逃すわけにはいかない。

「じゃあ、神様にお願いしてくれない。僕を元の世界に戻すように。」

ルシファーは面倒そうな顔をして、頭を搔いた。

「それは、無理かもな。」

「どうして？神様でも無理なの？」

ルシファーは首を振る。

「いや、神様だからこそ無理だ。」

「どういう事？」

僕は絶望した声で尋ねる。

「神や俺達神の遣いはな、信仰する者がいてこそ力を發揮できるんだ。だから、信仰者の取り合いは昔から続いているんだ。この世界は俺達の神、キリスト教が支配できた世界であるため、神は俺をこの世界に派遣できたんだ。」

ルシファーは足にすがりついていた僕を蹴り飛ばし、話を続けた。「ワタルの住むガイアは、さまざまな神々が自分の領土だと主張している世界である。仏教、イスラム教、ギリシア神話、北欧神話。後は忘れたが、さまざまな神の一派が領地を主張しているため、硬直状態の冷戦状態にあり、下手に手出しができないんだ。俺らがお前を元の世界に戻そうとすれば、他の神々から集中攻撃をくらう。他の神々の一派もガイアに干渉すれば、どうなるかは然り。まあ、だから、神に頼んで元の世界に戻る事はあきらめた方がいい。」僕はショックで頭が重たく、目の前が暗くなつた。なんで、神様のくせに、日中領土問題みたいなのを抱えているんだ！！

「何とかならないのーーー！」

「こら、やめろーーー！鼻水たらして、俺に近づくなーーー殺すぞーーー！」

再びすがり着く僕を蹴り飛ばした。

僕はしきしき泣くが、それはかなり控えめな表現かもしれない。

「はあ、最初の目標通りに古代遺跡を調査したらどうだ。俺も魔王を倒したら、神に頼んでみるわ。だめで元々なんだから期待はするな。」

「はあ、僕は元の世界に戻れるのかなあ？」

僕は涙ぐみながら、かすれた声で嘆く。

「誰か、助けてーーー！」と叫んで、都合よく助けてくれるヒーローを呼びたい。しかしながら、僕こそが、不運にも助けを求める声に引きずり込まれてしまった勇者なのだ。勇者は助ける側の立場なのだ。

僕とルシファーはまた歩き出した。

僕は未だに涙ぐんでいる。

しかし、いつまでも泣いたって、誰も助けてくれやしない。

ルシファーは可愛い女の子しか慰めないので。別に、ルシファーに慰めて欲しいわけではないけど。

僕とルシファーが歩いていると、突如、緑色のドラゴンが空から現れた！！

大きさは像3頭分以上はある。めちゃくちゃ大きい。

「ようし、ワタル。今度はあれで特訓だーーー！」

「無理無理、絶対無理ーーー！」

犬歯をむき出しにして笑うルシファーに鳴き叫ぶ僕は引っ張られた。

なんで、こんなに大きなドラゴンが現れるのぞーーー！プリンの次にドラゴン？こここの山脈はモンスターのレベルに波がありすぎるよーーー！

ドラゴンが何かを吐こうとしている。炎かレーザーか、ギーフレ

アかどうかは知らないけど。

僕はルシファーの手から逃れて、木の裏に隠れた。ルシファーは引っ張っていた僕の手ごたえが急に無くなつたため、転びはしないが、少し態勢が崩れた。

緑のドラゴンが緑色の粘液を出した。

緑色の粘液はあちらこちらに散らばつた。僕の目の前の木にも飛び散り、一瞬で目の前の木を溶かした。どうやら、毒攻撃だつたらしい。

僕はその猛烈な毒にビビつた。

果たして、直撃したルシファーは無事だつたのだろうか？

毒により溶けた時に白い煙が大量に発生した。

白い煙の中に一つの人影が立つていて。

彼の鎧はめちゃくちゃに溶け、服装も乱れている。しかし、彼には一つの傷も無く、皮膚も少しの赤みも帶びていない。

しかし、決して毒の影響が無かつたわけではなかつた。

それは・・・

「この、毒、くさい。」

僕は鼻をつまみながら、呟いた。それはとてもなく臭かつたのだ。

俯ぐルシファーの表情は分からない。

彼が顔を上げた時、僕は後ずさりした。とても表情が分かりにくい顔をしているドラゴンですら、恐怖しているのが僕にも分かつた。「てめえ、殺してやる！－完全無欠美男子天使な俺様をこけにしゃがつて！－」

ルシファーは一瞬で間合いを詰め、巨大なドラゴンを天空の遙かかなたまで蹴り飛ばした。まるで、アパンチを喰らつたバイマンみたいだ。

「待ちやがれ、てめえ、逃げるつもりかあ、はあああん！？」

「いえ、ルシファーに蹴り飛ばされただけですよ。」

僕のツツコミも彼は聞いていなかつた。

「はああああああ！」

彼は大きな叫び声を出し、背中から金色の大きな一対の翼を出した。頭の上には金色の輪っかが浮かぶ。

彼は一筋の閃光となつて、空高く舞い上がつた。

彼は流星となつたドラゴンを地の果てまで追いかけてゆく。

僕は一人だけポツンとその場に残された。

そして、勇者の仲間は誰もいなくなつた。

「僕、どうしたらいいんだろうか？」

その疑問に答えてくれる人はいない。

仲間とはぐれてしまつた勇者ワタル。彼はこの困難をどうやって乗り越えるのか！？

奇想天外万丈波乱！！彼の冒険はいかに！？

第9話 ダンジョンボスの居場所は？

キリ はどこかへ迷子になり、ルシファーも自分で蹴り飛ばしたドラゴンを追いかけて飛んで行つてしまつた。

僕は迷いの山脈という超難関な魔物の巣窟でたつた一人になつてしまつた。

ロープレだつたら仲間が死んで主人公一人になるのも分かるが、仲間が勝手に何処かへ行くなんて、どんなゲームクリエーターでも考えやしないだろう。

「現実は小説より奇なり」と言つが、そんな馬鹿な事は無いと思つていたのに。自分がそんな状況に陥るとはなあそら思つていなかつた。

願わくば、僕が目にしている世界は夢や本当に小説であつて欲しい。本当にこの世界が夢なら、どれだけ良かつただろうか。

異世界トリップを望む人間なんて、現実世界においての不適応者だけだと思う。あるいは、異世界トリップの過酷さを知らずにいるだけの者か。ていうか、普通はその苛酷さを知るわけない。

僕なんて、スライムとゴブリンに殺されそうになるぐらいの強さだ。ゲームの中でポコポコ倒すモンスターに殺されそうになれば、誰もが泣いて、元の世界に帰りたくなるだろう。

「はあ・・・・

僕はため息をついて、その場に腰をかける。今まで歩いてきて、もう足がパンパンで痛い。僕は足をもんでもぐす。靴の脱げてしまつた靴下が、もうボロボロだつた。

僕が今いる所は、標高80M^{メートル}ぐらいつて所だらうか。我ながら、よくここまで登り詰めたものだ。運動会の徒競争で悩んでいた自分が懐かしくなる。どう頑張つても3位にしかなれなかつた。

しかし、僕にはこんな所でくよくよしている暇は無い。

僕には魔王を倒すという使命があるんだ。

元の世界に帰つて、親友とまた馬鹿騒ぎをするんだ。

と言づか、こんな所でくよくよしていたら、後ろから魔物に襲われてお陀仏になりそうだ。一刻も早く対策を考え、この先の方針を立てなければ！

とりあいず、状況を整理しなくては…！

魚の田師匠も言つていた。

「どんな時でも、どんな困難な時でも、状況整理は大事です。ここで整理を怠ると、王家から預けられた手紙を紛失したり、お弁当を忘れてお腹を空かせたり、魔法を使おうとして、杖と埃はたき棒を間違えて振つたりしてしまうのですよ。」

そう、どんな時でもきっと打開策はある。しかし、己の眼を濁らせてしまえば、見えるものも見えなくなる。心を鎮め、落ち着ける事が肝心だ。

状況整理だ。

僕は迷いの山脈で一人である。

武器は剣と王家の猟銃と魔法のタクトである。

持ち物は王様の餞別にくれた金貨十数枚に、王家の狩猟袋。

王家の狩猟袋は狩猟に必要な色々な物が入っているのだ。袋は両手サイズだが、中は空間拡張されていて、小さいタンスぐらいの広さがある。中には、弾丸と薬莢がたんまりあり、投げ網、ロープ、鶴の恩返しにでてきたような罠（名前は覚えていない）、それに何やらいかがわしい本（この袋は王様の隠し場所だつたらしく、その題名は「タヘナルアナトミア」だった。杉田玄白らを愚弄するかのよつな代物だった。）。その本を見て、僕がどうしたかはここでは特筆するべき事ではない。健全なる男子ならば当たり前の事である。・・・・

状況整理をしている間に、もう口が暮れてしまった。世の中、罷り思えない物が罷だつたりするものだ。

僕は気を取り直して、考え直した。

「うーん、何か忘れているような気がするな？」

僕が悩んでいると、「グー！！」と僕のお腹が自己主張した。どうやら僕は、困難な状況に陥つたせいで、自分の体の状態が分かつていなかつたようだ。

「そうか！！何かを忘れていたりと思つていたら、僕は食料を持つていなかつたんだ！！」

ナルホドと、僕は手をポンと叩いた。

もう一度、「グー！！」とお腹が鳴つて、僕は空むなしくなつた。

「王様もエロ本なんかじやなくて、お菓子でも隠してくれたら良かつたのに・・・」

僕はうな垂れる。さつきまで夢中になつていたくせに、人は苦境に陥ると誰かのせいにしたくなるものだ。

僕は再考する。

すると獅子ライオン王師匠の言葉が頭の中に思いだされた。

「ワタルよ。世の中死んだらそこで終わりだ。それは誰もが知る事。ミミズだつて、オケラだつて、アメンボだつて、死んでしまえばそこで終わりなのだ！ 勇者ワタルよ、汝が少しでも苦境に陥つたのであれば、とりあいず逃げておけ。この世の平和の為に、何を為すべきか、逃げた後でゆるりと考えれば良いのだ！！」

獅子ライオン王師匠。あなたはライオンではなく、ウサギっぽい考え方をしていますが、弱者な僕にはそれが正しいと思います。だから、僕は貴

方の教えに従います！！

僕は獅子王師匠に感謝の念を胸に秘め、決意を固めた。

僕は迷いの山脈から下山し、ふもとの村で宿泊する事に決めた。どうせキリには、宇宙戦争の最前線や海底の古代遺跡に行かねば会

えないだろ？し、ルシファーも「んな広い山の中で再会できるとは思えない。

つまり、僕が今とれる最善策は、魔物に殺されないよう下山して、ふもとの村でルシファーと合流する事だ！

まあ、ルシファーなら気がつかないうちに黒豚の魔物を倒していられるかもしれないけど。黒豚よりもドラゴンの方が強そうだった。

そうと決まれば、「善は急げ」だ。

僕は登つて来た山道を下つて行つた。登つて来た時よりも足が軽い。依頼の魔物と戦う事を一時的に放棄したせいだろ？か。

「ふん、ふん、ふーん ふ、ふん、ふん、フーン」

僕はカルメンの鼻歌を歌いながら、スキップして下つて行つた。油断していたら、足が木の根に引っ掛けあって転んだ。少しベンをかいた事は誰にも内緒だ。

僕は下山している最中、何か動物を狩つて食事でもしようとも思った。しかし、僕が動物達を見つける前に、動物達が僕を見つけて逃げられてしまった。

どうやら狙撃士の才だけでは、優秀な猟師にはなれないらしい。帰り道は木にペケ印を刻んできたため、迷いの山脈でも迷わずに帰れそうだ。途中、キリが切り倒した木を見て、よく生きていたなと実感した。

僕はようやく迷いの山脈を抜けられそうだ。

もう夜は更け、空には満天の星が輝き、二つの月が空高く登つている。

「ようやく、こんな恐ろしい所から出れる。あ～ああ。村でおいしいご飯に、温かいお風呂、ふかふかのベッドが待っているんだろうなあ」

僕は迷いの山脈から抜けた事ができた安心感ですっかり油断をし

ていた。

弱者である僕は、どんな時でも周りに満する危険に気を払わなければならなかつたのに・・・。

「イタツ！！」

僕は小走りをしていると、足元の石に躓いて、盛大に転んでしまつた。

「痛たたたた・・・」

僕が起き上がるうとすると、僕の背の上を熱気が通り過ぎた。

「へつ！？」

すると、僕の左の方でドカーンと何かが爆発する音が聞こえた。

「ナ、ナ、何？こんな所で魔物の襲撃か？」

僕はあたりを見渡しが、暗くてよく見えない。

「フン、運の良い奴め！」

遠くから誰かの声が聞こえてきた。

「だ、誰？」

僕の声が上ずる。

僕は声が聞こえてきた方向に目を向ける。

暗いから見えづらいが、その人物はこちらに歩んでくる。

声からして、恐らく彼らしき人物は2m位の背丈であり、肌は黒いようだ。

彼は、武骨な黒い鎧と兜を身につけ、巨大な斧を片手に持つている。僕では持ち上げるのが精一杯だろう。

彼は不気味に笑いながら、こちらに足を進める。彼は僕を格好の獲物だと思っているようだ。

僕と彼との距離が50mに縮まつた時、月と星しかない空の下、ようやく彼の姿がはつきりと見えた。

「・・・な、なんで、こんな所に！？」

僕は声を上ずらせて聞く。

そう、それは意外な人物だつた。

彼は一足歩行をする黒豚だつた。

と言うか、キリが持っていた手配書とまったく同じ姿であり、僕らが探していた依頼の魔物であつた。

「ふふふ、なんでお前達が探していた黒豚一族最強の俺様がこんな所にいるのかだつて？冥土の土産に教えてやつてもいいぞ！？」

黒豚は偉そうに語る。

「ハハハハ！我こそが、魔族最強の4人のうちの一人！四天王の一角、知将！暗黒の混豚とは我的事だ。ワハハハハ！！！」

最初の冒険でいきなり四天王の一角が現れたようです。僕つてかなり、大ピンチ！？

僕はぶるぶる震えて、声も出ない。

「それで、何で俺様がこんな所にいるか？だつけな？」

黒豚は聞いてもいないのに、もつたいたぶつて話しだす。どうやら自慢したいらしい。

「俺様は結界を張り、俺様の城を隠していたのだ！！」

黒豚は自分の後ろの方を指、じやなくてヒズメを差した。

小さな崖の下に、小さなログハウスが建つてている。大草原の小さな小屋なのだろうか？

「えつ？な、なんで迷いの山脈の中ではなく、ふもとに小屋を建てているんですか？」

「小屋ではなく、城だ！間違えるな！！」

僕の問いに対しても怒る。自尊心はとても高いみたいだ。

豚は心を落ち着けて、話を続けた。

「まあ、良い。先ほどの問いに答えてやる。お前は俺様を見つけるためには何処を探す？」

クルンと丸まつた尻尾がゆれる。

「えつと、迷いの山脈？ですよね？」

「そうだ、愚かなる人間どもはあんなに高くて、登るのが面倒な迷いの山脈を探すだろう。そうして何日間か俺様を探しても見つから

なければ、ついにあきらめて下山してくるだらう。」

「えつと、そうですね。」

黒豚の言つ事に僕は頷く。

「ならば下山してきた時は当然へ口へ口だらう?」

「そうですね。」

「下山した奴は、当然気が緩んでいるだらう?」

「そうですね。」

「ならば、超強い俺様がそんな奴らと戦つても、もちろん瞬殺だらう?」

「そうですね。」

「もちろん、俺様だつて、毎度毎度、下山して村を襲い、登山して帰るなんて面倒でかつたるいだらう?」

「そうですね。」

「山で食糧を得なくたつて、村で食い物を奪えば楽だらう。」

「そうですね。」

「フフフ、だから俺様は迷いの山脈のふもとに我が城を建てたのだ。」

「(小声)せこい。」

「はあ? 何か言つたか? そのせこい策略に引っ掛けた馬鹿は何処のどいつだ? はあん?」

黒豚さんは耳ざとく僕の咳きを捉えた。その言葉は正論で僕は耳が痛い。

えつちら、おつちら、一生懸命に山を登つたのに。迷いの山脈で3度も死にそうな目に合つたのに! (その内一回は仲間のせいで...) 目標がすぐ目の前にあつたなんて、かなり気が萎えてくる。

チルチル達は自分の家で青い鳥を見つけて幸せを得たようだが、僕が山のふもとで見つけたのは僕を殺そうとする黒豚さんでしたなんちつて。

つて、全然笑えないし! ? ビリしたらいの? 助けてルシファー。

勇者ワタル、またまた大ピンチ！？
いつたい彼の運命はいかに！？

第10話 逆転、ぎゅくてん、ギャクテンテン！！

僕は世界で一番不幸な中学生に違いない。もちろん、現実、小説、あらゆる世界も含めて・・・。

僕は長い、長い冒険を経て、ついに目標の黒豚の魔族を発見する事ができたが、僕一人だけで対峙する事となつた。

ルシファーもキリ もいくら強くても、肝心な時に不在じゃあ、その力も意味が無い。

「フハハハハ、ガキ、お前はもう終わりだな！」

黒豚が巨大な斧を持って、こちらに近づいてくる。

全く、あの黒豚が迷いの山脈のふもとに結界を張り、住んでいたとは・・・。

迷いの山脈に踏み込む前、ルシファーガ「空間が歪められている」と言つていたが、その時にもつとよく調べておくべきだつた。今さら、悔やんでも遅いが・・・。

・・・でも、死にたくない・・・。

「ハハハ、死ねえーー！」

黒豚が斧を上から振り落とした。

「ヒ、ヒイイーー！」

僕はとつさに地べたを転がり、一撃で死ねるだらう攻撃をなんとか回避した。

「チツ！往行際の悪い奴め！ー！」

黒豚が忌々しそうに舌打ちする。

「往行際が悪いって・・・そりやあ、誰だつて死にたくないでしょーー！」

僕は悲鳴を上げて抗議する。

「口答えしないで、とつとと死ね、ガキ！」

黒豚が地面に突き刺さった斧を抜こうとする。

しかし、思いのほか深く刺さったので、抜くのに手間取っている

ようだ。

僕はそれをチャンスだ、とばかりに、王家の獵銃を構える。

「チツ！…」

黒豚は一旦斧を抜くのをあきらめ、半身になつて両手・・・じやなくて、両のヒズメを腰の後ろに構えた。

「叉^{チヤ}焼^{シユ}拳^{ケン}！…！」

両のヒズメの間に、サッカー・ボール大の火の玉が生まれ、僕の方に放つた。決して、豚が使つてはいけないネーミングセンスだ！

「ヒ、ヒ、ヒ…！」

僕は慌てて、無様に横へ跳ぶ。無論、マンガみたいに前転バク転で避けるなんて真似はできない。生命の危機にそんな余裕ある行動をする奴は、徹底的なナルシストだけだ。

「ふん、我的力はこんな物だけではないぞ…！…ハアアアアアア…！」

黒豚は力を貯め出した。もの凄いコモ、じやなくてオーラを感じる。

「そんなん、まだまだ余裕なのか…？」

僕は力の差に愕然とする。僕のは拳大、黒豚のは頭大。僕のは小学生のキャッチボール程度、黒豚のはプロの野球選手並みのスピードだ。

本気を出されたら、どんな攻撃を繰り出されるか計り知れない！

黒豚がルシファーよりは弱いと言つても、元タルシファーは雲の上の人だ（まあ墮天使だし）。それでも、黒豚は僕の力を遙かに超えていそうだ。

絶対に防いで、この場を逃げなくては…！

僕は草食獣の意地を見せてやる。（注意：ホモサピエンスは雑食です。みなさん、野菜だけでなく、適度にお肉も食べましょう）
僕は魔法のタクトを3拍子で振る。

全ての生命の源よ 乾きし大地を潤すもの 我、水の精靈に祈り

邪から守る盾となれ！

「遅い！又、焼包！」
「タッチーテ・ポン・レミア」
「水精の盾」

黒豚の魔法と僕の魔法が同時に完成した。

解説しよう！！

勇者ワタルは、黒豚が火系統の魔法を使う事を予想し、水の玉で自分を覆う魔法を使った。

水の玉の中心に自分が浮かび、全方向からの火系統の魔法をガードできる。その上、象が突進してきても、壊れずに、水の玉」と「口コロ転がつて、物理攻撃も防げるのだ！！

無論、目が回るが、恐らく巨大な洗濯機の中に入ったような感覚だろう。

魔力もそれ程消費しないこの魔法だが、唯一の欠点として、呼吸不可能による時間制限のみがある。

がんばれ、勇者ワタルよ！！

負けるな、勇者ワタルよ！！

何やら謎の熱血なナレーションが、僕の魔法を解説したような気配がした。

妙に具体的な気配を無視し、僕は目の前の状況に注目した。あわてて呪文を唱えたため、十分に息を吸えなかつたのだ。時間を無駄には出来ない。

視界は白く濃い湯気で満たされ、何も見えない。

どうやら黒豚は、僕を蒸し焼きにするようだつた。僕を囲む水も、もうすでにお風呂並みに温度が上がつてゐる。お風呂としては丁度いいが、戦いの最中では容赦なく体力を奪う。

「フフハハハ！ 何も見えないだろ？ 何も分からぬまま、この斧の錆となるが良い！」

水を通した声が僕の耳に響く。

(クソ！どうしたら良いんだ！)

この水の盾は、炎を防ぎ、雷も表面を流れ、地面に受け流す事ができる。

物理攻撃も防ぐが、斬撃だけは少し威力が弱まるだけで、完璧には防げない。

黒豚の腕力をすれば、水の抵抗など無意味だらう。

しかし、それ以前に、息も限界にきてる。

酸素不足で気絶するなど、戦場では死を意味する。

(もうだめだ！魔法を解いて、蒸し焼きにされる前に走って逃げるしかない！)

僕は魔法を解いた。

息が苦しく、思わず呼吸をしようとするが、熱気で僕の肺が蒸し焼きにされそうだ！！

走れずに、その場で跪つてしまつた！！

しかし、神が不幸すぎる中学生に情けをかけてくれたのだろうか？ 徐々に湯気が霧散し、呼吸が楽になつて行く。

「ぜえ、・・・・・ぜえ、・・・・・ぜえ・・・・」(どうしたんだ？)

僕は呼吸しながらも、疑問に思つ。

晴れてゆく湯気の中、僕の目の前に黒い人影があつた。

「ブヒイ・・・・・ブヒイ・・・・・ブヒイ・・・・」

黒豚も蹲つていた。ドテン！(僕は気分的にずつこけた！実際は、そんな余裕はないが・・・)

どうやら、黒豚はこの熱気の中で、斧を振り回してこちらに来たらしい、斧が近くに落ちている。

しかしながら、黒豚もさすがにこの熱気の中では動けなくなつてしまつたようだ。

黒い肌が真っ赤に染まつてゐる。

もうすぐで、豚の蒸し料理が完成しそうである。僕的にはニンニク料理を所望する。

まあ、人間ならとっくに蒸し焼きにされ、死んでいるだろ(?)の威力。

数秒だけあびた僕より酷いだけのダメージで済んだだけでも、彼は魔族として体が丈夫な事が窺える。

「ぜえ・・・ぜえ・・・ぜえ・・・」（お前は馬鹿か？）

「ブヒイ・・・ブヒイ・・・ブヒイ・・・」（無礼な人間め、ハツ

裂きにしてやる！）

僕と黒豚は同時に立ちあがつた。

二人とも、生まれたての小鹿の様に足が震え、駅前の酔っぱらつたおっさんみたいに、よろよろ歩き出した。一人とも顔が真っ赤なだけに、傍から見ると、酔っぱらつているように見えるだろ(?)。

僕は震える手で王家の猟銃を構える。

黒豚も斧を構えようとするも、武器のはずの重さが仇となり、ズルズルと地面に斧を引きずつてしまつ。

僕らは、二人ともゆでダコになりながらも、戦いを再開する。

僕は3発撃つたが、狙いが定まらなかつた。

一発はズれるも、一発は鎧に当たつて、貫通はしなかつたが、黒豚を仰向けに倒した。

僕は弾丸を装填しようとするが、上手く手が動かずには落としてしまつ。

黒豚はじたばたして起き上がろうとするが、鎧が重いせいで起き上がれずにもがく。

異世界から召喚された勇者と魔族を代表とする四天王の一角！誰もこんな情けない戦いを夢想だにしなかつただろう。

本当にこの黒豚は四天王の一角の知将なのだろうか？

僕はそんな事を考えながらも、なんとか弾を詰め、よろよろ黒豚の元へ歩いて行つた。

「よ、よひ・・くおの、ヒヨリなり・・・

僕は震える手で銃口を鎧の隙間に当てた。

「ひや、・・ひやめろ〜！〜！」

黒豚の顔が恐怖に歪む。

「ヒね ！！」

僕が頭を揺らしながらも、引き金を引こうとした。

ドゴツ！！！

鈍い音がした、もちろんこんな音を銃が立てる訳がない。

どこからともなく飛んできた拳大の石が、僕の額に直撃したのだ。

「ひ、ひたい（痛い）！！」

別にギャグでは無いが、僕は声を上げて、後ろに倒れた。

（い、いつたいどこから？）

後の方から2つの人影が現れた。

「大丈夫ですか、ボス！！」

「遊びが過ぎます、ボス！最初から私達にも戦わせて下さい！！」

「す、すみやない。」

一匹のイノシシが現れた。どちらも鎧を身につけ、槍を手に持っている。僕と同じ位の背丈だが、体はとても太く、体重は僕の2倍以上ありそうだ。

片一方は頭にリボンを付け、女の子らしい。。。。キモイけど。。。

イノシシの方が黒豚よりも強そうだ。黒豚の方が値段は高そうだ
が。。。

「さあ！ボスを叉焼チャーシューにしてくれた恨み、後悔させてやる。」

「全く、ボスにこんなにいい匂いを出させて。。。許しませんわ。」

あんた達もそれなりに失礼だと思うよ、仮にも自分達のボスを食い物扱いするとは。。。黒豚というブランドは思ったよりも強力なのだろうか？

しかし、僕もピンチ、逆転、またピンチだ。まさに塞翁が馬だ！
こんなに早く状況が変わるとは、孔子も予想しないだろ？
「もう・・・ここまでか・・・」

僕はもう心が折れ、あきらめかけていた。

「フン、人間のクセに、なかなか頑張ったがここまでだな！」

「フン、人間のクセに生意氣ですわ。」
イノシシ達が僕を睨む。

僕は絶体絶命のピンチだつた。

どうあがいたつて、生き残れつこなかつた。

僕が絶望して、仰向けに倒れていると、流れ星が見えた。

「助けて下さい、助けて下さい、助けて下さい、3回言えた。」

「フン、命乞いしたつて、そうは問屋が大根を下ろさない！！」

恐らく、このイノシシは問屋が卸すという意味をしらないのだろう。

流れ星が僕の必死な願いを聞いてくれたのか？

そんな時だ！天から救いの手が伸びたのは！！

流れ星がだんだん大きくなる。

「へ、こっちに流れ星が向かつてくる？」

「はあん？」

イノシシ（雄）が空を見上げる。

「ありや、ホントだ！！！」

どんどん流れ星が近づいてくる。

その「ヒガガガガ…」という音が耳に届き始め、少しづつ大きくなる。

そして！！！

流れ星が黒豚親分の上に直撃した！！

ズゴ ん！！！

鼓膜が破れそうなほど大きい地響きがし、土埃が煙幕となつて覆い尽くす。

黒豚親分の悲鳴は一切聞こえなかつたが、・・・完全に死んだだろつ。

「ボ、ボスウウウ！！！」

「きやあああ！！！」

一匹のイノシシが悲痛な声を上げる。

舞う土埃が晴れた後、そこにはとても半径5Mぐらいの大きさの

クレーターができた。

そのクレーターの中央で、黒い染みとなつてしまつた黒豚の上に、一人の人影があつた。

それは、暗いよるでも彼女が空色の美しい髪を持っているのが見て取れた。

「キリー！ どうして空から！？」

そう、黒豚の上に落ちた流れ星の正体はキリーだった。

僕の呼ぶ声に彼女は気が付き、僕を見上げる。

彼女はそつと口を開け、話す。

「・・・・・ここはどこ？」

僕は命の危機から脱したのに、とてつもなく疲労を感じた・・・。

第1-1話 迷物語（まよいものがたり）

「キリ……どうして君は空から降って来て、いつたい今まで何をしていいの？」

僕が驚いて尋ねる。

「……私は、目標を探していただけだ……とある、……目標は見つけたか？」

キリ はその目標を足で潰しながら、僕に問う。

「えっと、……君の足元なんだけどなあ？」

僕はキリ の方を指差した。

「……笑止、これはゴミだ。冗談も程々にしろ……」

「そう言われてもね……、本当なんだけど……。」

キリ は自分が踏みつぶしたものが、黒豚の魔族であるビックルが、それが生き物であつた事にも気が付いていないらしい。

それより遙か上空から落下して、足も挫かないなんて、そつちの方が冗談みたいだ。

「お、おい、お前ら……ボスを殺しておいて、俺達を無視すんじゃねえ！」

「あ、あんたたち……ボスをゴミ扱いするなんて、絶対に許さないんだから……！」

黒豚をゴミ扱いしたのは僕じゃないよ。文句ならキリ にだけ言ってほしい。

キリ が無表情の瞳で一匹を見つめる。

「「ビツウ……」

一匹は自分よりも強者の視線を受けて、本能的に危険を嗅ぎ取つたようだ。

まあ、大気圏から軽々と飛び降りてくる奴相手に、野生的本能なんてなくとも恐怖を感じられるだろう。

「……はあ、……キリ……今まで何をしていたの？」

「・・・・短く言つと、「お前は眞面目に頑張れば、元の世界に戻れる」という事だ。」

キリの言葉に僕の頭は疑問符だらけになつた。

「いつたい、どういう事?」

「話せば長くなる・・・・聞くか?」

キリが無表情な目で僕を見る。

「んんん! ? ちょっと気になるかな?」

「・・・分かつた。長くなるが話してやろう・・・。

私は目標を探しつつも、いつの間にか消えてしまつたお前達も探していた。(まあ、キリが僕たちを置いて行つたんだけどね・・・。)

私は迷いの山脈を越え、人の石像が立ち並ぶ街にやつて來た。

私が町を歩いていると、生きている人間を見つけた。

話を聞くと、この町の人間は呪いで石にされてしまい、元に戻すには聖なる泉の水を振りかけなければならぬらしい。

しかし、その周りにいる魔物が手強く、自分では近づく事ができないらしい。

私がその話を聞き、倒すべき魔物の手配書を見た。

その泉にはそれらしき魔物がいないので、そのまま目標を探す事に決めた。」

「そんだけ冒険して無視するのか!! 絶望している人なんて眼中に無し! ?」

僕のツッコミを無視して、彼女は続ける。

「旅を続けるうちに、私は天空に浮かぶ城に、何でも知つていると いう悪魔の存在を知つた。

私は海に沈む古代遺跡より、古代の遺物である飛空挺の存在を知つた。

飛空挺はもうすでに、地底国に住むダークエルフ達に盗掘された後だつた。私はダークエルフの軍団と戦い、飛空挺を手に入れた。

そして、私とジョニーは飛空挺で天空城を目指した・・・。』

「ちょっと待て、ジョニーって誰？」

「しかし、天空城を目前にして、悪竜の攻撃により飛空挺は壊れてしまった。脱出ポッドで天空城まで行けるのは一人だけだった。」

僕のツツ「ミはきれいにスル された。」

「ジョニーは言った、・・・。」

『キリー！こいつはもう駄目だ！脱出ポッドでお前だけでも天空城へ行け！』

ジョニーは操縦桿を握りながら叫ぶ。

『（キリ）・・・。』

キリ は沈黙したまま、ジョニーを見つめる・・・。

『いいから、俺にかまわずに行け！俺は、俺は、この大空を眺められただけで満足だ。全てに絶望した俺にこの大空を見させてくれたのはお前だ、キリー！だから俺に構わずに行け！！』

『分かった・・・。』

キリ は脱出ポッドに入り、操作した。

『えっと、そんなにあつさり行くの？ねえ、俺が良いつて言つたけど、それって無いよ。少しごらい戸惑つてよ。おい、ちょっと待て。』

・・・そして、私はジョニーの尊い犠牲により、天空城で悪竜と対峙する事ができた。』

「ジョニー、憐れ。同じ男として同情する・・・。けど、キリ。君つて上空から落ちても大丈夫じやん。脱出ポッドをジョニーに譲つてやれ！」

僕は男として声の限り叫んだ。

「私は悪竜を相手に苦戦し、倒すのに30秒もかかつてしまつた・・・。』

もちろんクールに無視。

「短つ、苦戦した割には短つ！悪竜の扱い雑！！キリ は大抵の相

手を瞬殺するだろ？から、まあ苦戦したんだろうナビ……。」

キリ は遠い目をして続けた。

「悪竜は息を引き取る前に言つた……

『グフ、この我が負けるとは……。我は地上の者達を散々苦しめた。しかし、それも必要な事だった。』

『・・・・』

キリ は黙つたまま聞き続ける。

『この星は危機に瀕している。化学という技術を発展させた奴ら、マールミエ星の奴らはこの星を征服しようと企んでいる。我は、奴らに対抗するため、奴らには無い、魔力という武器を貯めるために地上の者たちを喰らい続け、強大な魔力を手に入れた。』

悪竜はゴホッ、咳をする。

『奴らは何でも予測し、あらゆる事を知る事ができる技術を持つている。奴らを倒すには小細工など意味が無い！圧倒的な力で正面から叩き潰すしかないのだ！！』

キリ は考え込む。

『……なる程、それがあれば目標を探す事ができるのか……。』

『ん？何を言つておる？』

『・・・・そいつらを倒す・・・』

悪竜は驚く。

『そ、そんな馬鹿な。・・・いや、我を倒したお主なら、できるやもしれぬ。』

悪竜は考え込み、決心したようだ。

『ならば、我が今まで蓄えてきた力、我が全てを汝に託そう！……最後の希望よ！この星を頼むぞ！！』

悪竜が光の粒子となり、キリ の胸に吸い込まれて行く。

・・・・そして、私は悪竜の力を使い、宇宙へと羽ばたき、マール

ミ工星人と争つた。』

「・・・なんだか、ファンタジー世界を羽ばたいて、SF世界にまで手を伸ばしてゐるよ、この人・・・。」

僕は額に手を当てる。理解するのにも限界が近づいてきた。

「私は、マールミ工星人の大将と戦いになつた・・・。」

『ハハハ、美しく屈強なる戦士よ！何故、人は争い合つ・・・ぶくう！』

キリ は一本のバスター・ソードで敵の大将を細切れにした。キリ は宇宙船内を見渡す。

『・・・どれが何でも分かるという物なのだろうか・・・。』 目の前にはピカピカ光る物が沢山あり、押すことができそうな小さな出っ張りが無数にあつた。

キリ は適当に押してみた。ポチつとな！

『警告！警告！これよりオーバードライブモードに入ります。これより超加速、急上昇、急下降をしますので、心臓の弱い方、妊婦中方、気分の悪い方はご了承下さい。』

キリ の乗る宇宙船は、どんどん加速していき、ワープした状態で、ブラックホールに突つ込んだ。

・・・・・・・・・・

私は長い時間氣絶していたようだ。

私はゆつくりと目を開くと、5人の少年少女が私の様子を見ていた。

『あ、よかつた。気がついたのね。』

少女が微笑みながら、私に声をかける。

『・・・・ここは？』

一人の少年がうなずく。

『ここは、地球つて所だよ。翻訳の魔法も上手くいったようだね。』

私は彼らの顔を眺めた。

すると、驚いた事に一人だけ顔を知っている者がいた。少し、大きくなっているようだが、・・・・・

『・・・・・ワタル・・・・?』

『キリ、久しぶり、なのかな? そうだよ、僕はワタルだよ。まあ、君の知っているワタルとは時間軸が違うけどね。僕は君が知る僕より、未来の僕なんだ。』

私は考え込む。

『・・・・・よく分からぬ・・・・・』

ワタルはクスクス笑う。

『まあ、そうだろうね。昔、君から未来の僕の話を聞いた時、「なんじやあ、そりやつ」て、僕も思つたもん。』

先ほどの少年が話しかけてくる。

『君は、宇宙船で光速の100倍のスピードでブラックホールに突っ込んだ事により、3次元世界に時間軸、世界軸を加えた5次元世界から飛び出したんだ。それで君は時間の制約、世界の制約を超えて、この異世界である地球に辿り着いたんだ。』

ワタルは真顔になつて話しかけてきた。

『それでね、キリ。過去の僕には、「真面目に頑張れば、元の世界に戻れる」って伝えて欲しいんだ。それで、元の世界に戻るには・・・』

『駄目だよ、ワタル。過去に君は、未来の君からそれ以上の情報を得ていない。下手に教えすぎて、過去に、未来にどんな影響を与えるかは未知数だ。どんなバタフライエフェクトを引き起こすか分からぬ。』

『全く、ケチだな、真央。』

一人の少年の制止に文句を言つ。

ちなみに、バタフライエフェクトとは、簡単に言うと、過去のわずかな誤差が未来に影響をもたらす恐れがある事という事である。

(作者の勝手な解釈です。詳しく知りたい方はご自分で調べ下さい)

『ハハハ、過去に、未来のお前が伝えようとした事が悪い。
まあ、つまり自業自得だな。』

『全く、清水までそんな事、言わなくたって良いじゃないか。』

ワタルが口を尖らせる。

他のみんながクスクス笑い、ワタルが咳払いして、キリに顔を向けた。

『と、言つ訳で。過去の僕。恨むなら、お前に何も伝えなかつた、未来の僕を恨め。』

『フフフ。それって、あなたの事じやない。』

『うるさいな、渡辺さん。僕にとつては、僕よりも未来の僕が悪いんだよ。』

キリを除いて、みんなが笑う。

一人の少年が話しかけてくる。

『さてと、キリさんも、ここに長く居ない方が良い。異世界の住人である君は、この世界にも、君自身にも悪い影響があると困るから。』

『そうだね。偉大なる賢者のとある、頼んだよ。』

『うん、任せて！』

とおると呼ばれた少年は頷くと、目を閉じて歌いだした。とても優しい歌だった。

優しい眠りに包まれたようだった。

そして、気がつくと、

・・・・上空から落下していく、過去のワタルと再会していた。して、今に至る。』

僕の顔が変に歪む。

『なんじゃ、そりゃあー！』

未来の僕が言つたとおりに、過去である僕が叫んだ。

僕は必死に頭の中を整理した。

「えっと、つまり・・・。キリ ガ迷子のすえ、未来の地球で未来の
僕に出会つたという事か？」

壮大なる迷子の物語だ！たかだか黒豚を探すのにどれだけの冒険
をしているんだ。

全く・・・、これを迷物語と名付けよう。パクリっぽい名前だが・
・・。

ていうか、すごいなあ、キリ。僕とルシファーは、海底の古代
遺跡、地下帝国、天空城、宇宙戦争の最前線で迷子になると予想し
ていた。しかし、キリ はその全てを実践して、さらにその斜め上
を行つていて、未来の地球に行つて、未来の僕に会うなんて・・・。
「・・・私もよく分からなが・・・、恐らくそうだ・・・。」

ナルホド、僕は頑張れば元の世界に戻れるのか。これで、これか
らも頑張つていける気がする。でも・・・、

「未来の僕！もっと教えてくれたつて良いじゃないか！」
僕は未来の僕を恨んだ。

第1-1話　迷物語（まよいものがたり）（後書き）

偉大なる賢者とのコラボです。そのうち、一つのシリーズにして、ラストの小説で4人の主人公が戦う物語にしたいです。（注意・作者も今のところどうなるかは分りません！）

第1-2話 聖剣の手掛けり

キリ が空から降ってきて、四天王の一角らしい黒豚さんを踏みつぶしてしまった。

「現実は小説よりも奇なり」というが、黒豚さん達も女の子が大気圏から降つてくるとは思つてもいなかつたようだ。

「大気圏から女の子が奇襲をしかけて来る可能性がある」。今日の事を魔物たちは、今後の教訓に・・・まあ、今後一生役に立たない教訓になりそうだけど・・・。

壮大なる迷物語を語り終えたキリ は、その無表情な顔で僕に尋ねてきた。

「ワタル・・・、目標は何処だ・・?」

僕は頭を抱える。

「だ・か・ら！君がさつき踏みつぶしたんだよ！」

僕とキリ はさつきから同じような会話を繰り返している。

ちなみに、黒豚の部下であるイノシシAとイノシシBは、僕とキリ が食い違つた会話をしている間に、トットコ逃げるよ、イノ太郎だ。僕があいつらだつたとしても、こんな無茶苦茶な人間を相手にしたくなど無いだろう・・・。

「だから・・、目標は・・?」

「ああ、もう。黒豚は死んだんだよ。圧殺だか、鈍殺だか、撲殺だか、打殺だか、ガサツだか、知らないけど。」

僕は面倒になつて、そう言い放つ。恐らく、黒豚は世界で一番ガサツな殺し方をされた。

「とにかく、目標達成、依頼達成。もう、村に戻つて、ふかふかベッドで眠りたい。」

「・・・そうか、なら良い。私も、変な物を踏みつぶしてしまつて、足の裏が気持ち悪い・・。」

黒豚、憐れなり・・・。顔も合わせた事も無い少女に踏みつぶさ

れ、殺されたあげく、気持ち悪いとの一言しかないとは……。

僕は憐れな敵に黙祷もくとうを捧げてやる。

「じゃ、村に行こうか。ルシファーは何処にいるか分からなければ、そのうち村に戻ってくるよ。」

「……あいつなら、問題無い。」

僕の提案にキリ は頷く。

満天の星空の下、僕とキリ は村に向かって歩いて行った。

「……が、

「キリ ！そっちじゃないよ。こっちだよ。」

「そっちじゃ分からん。」

「指差しているでしょ！……てつ、そっちじゃないよ。こっちだよ。」

ドラ H?のあの敵、ラ アンじやなくて、キリ だつたら、誘導にとても苦労するだろうな……。キリ は空 ぶ靴を手に入れられなかつた。第一章 宮廷騎士・完。なんて……、

僕とキリ は大地の向こうを眺めていた。

真っ暗だつた空が白ばんで行き、星は徐々に姿を消してゆく。赤々と燃えあがる朝日がゆつくりと動いているように見えるが、意外と早く登つて行き、赤く染まつた空がすぐに蒼くなつて行く。

どこからか、鳥の鳴き声が響き渡り、一日の始まりを告げる。美しい朝の光景を見ながら、今日は清々しい天気になりそうだと思つた。

だけど……。

僕は目を擦り、心臓が脈打つたびに走る頭痛に顔をしかめる。

キリ は相も変わらずの無表情。

僕は美しい朝日を眺めたが、その美しい光は僕の頭痛を促進させる。まるで、僕は吸血鬼になつたかのような感覚だ。

僕は一生懸命にキリ、が迷子にならぬよう先導するものも、キリ、があっちこっち向かおうとするので、僕はひつきりなしに彼女を正しい道のりに乗せなければならなかつた。

おかげで、僕達は一晩中歩いて、ようやく村に着いたのさ・・・、トホホ。

「はあ、キリ、ようやく着いたね。君のその迷子になる才能は、もうすでに、神の領域にまで達していよ。」

「・・・褒めても何も出ない・・・。」

「皮肉なんだけどね・・・。」

僕は軽口をたたきながら、宿屋の扉を叩く。

中には朝早くから宿のおばちゃんは働いているよつだ。

おばちゃんはテーブルを拭いていた。

「あれ、・・・おばちゃんは・・・僕がこの村に来た時、僕に簫で叩いてきた人だ。」

そう、おばちゃんは僕が子供を泣かしたと決めつけてきて、僕を簫で叩いてきた人だつた。

おばちゃんがテーブルを拭く手を止め、僕の顔を見上げた。

「あれ、・・・坊やは・・・誰だっけ?」

おばちゃんは簫で叩きのめした僕を忘れていたよつだ。

全く、やるせない気持ちだ。きっと、キリに倒された黒豚も、天国で僕と同じ気持ちなのかもしれない。僕はかつての敵の気持ちに勝手に共感した。

「いや、僕は貴方に簫で・・・」「ああー迷いの山脈の魔族を倒すと言つてた坊やか!もう2週間経つたから、魔物に食われたのかと思つたよ!」

おばさんは僕の言葉を遮るかのように言った。

ちなみに、僕達は迷いの山脈を丸一日しか探索していない。ほとんどが、迷いの山脈までの道のり、キリの迷子に付き合わされ、かなりの日数が経つただけだ。読者の方はお忘れかもしれません。

・。

「それで、あんた達。迷いの山脈の魔族を倒したのかね？」
おばさんは目を輝かせて尋ねる。

「えっと、一応倒しました。」

「・・・倒したらしい・・・。」

僕は口ごもる。キリ は未だによく分かっていないらしい。

「一応倒したって、どういう事だい？」

おばさんがいぶしげに聞き返した。

「えっと、その、・・・彼女が踏みつぶした・・・。」

おばさんは、見た目は普通の体格の女の子であるキリ を上から下までジト目で眺めた。

「それ、何かの冗談かい？」

「いえ、そういう訳じゃないです・・・。」

僕もその出来事を目の前にしなければ信じないだろう。

「ふーん、そうかい。・・・まあ、特殊な魔術を秘匿する人はいるからね。余計な詮索はしないよ。」

おばさんは、僕らが貴重な魔術を隠したがつていると解釈したようだ。

「でも、あの魔族を倒してくれて、本当に助かったよ。」

おばさんは詮索する目を引っ込めて、感謝の言葉を表した。

「おばさん、あの魔族にはとつても困っていたんですか？」

おばさんは憤慨したように話をまくしたてた。

「もう、聞いてよ！あの魔物が来てからもう散々な目に会わせられたよ。それ以前はさ、普通にのんびり暮らしていたのに。私達が考える事なんて、作物を作ったり、獵にでかけた男達が獲物を持つて来られるかとか、いい男がこの村に来たりしないかとか、そんな事しか考えなかつたんだよ。全く、困っちゃうよ！あの魔族が来てから、もう滅茶苦茶！豚の新しい料理方法を考えたり、夫がビビッちやつて、夫婦の営みも上手くいかなくなつたり。全く、嫌になつちやう！ああ、そういうえば、マツカ 王国で半年に一度の商売フェス

一時間程、おばさんのマシンガントークが炸裂！勇者の精神力をガソリンガンと削つてゆく。まるで猛毒に犯されたようだ。

ちなみにキリは勝手に空いている部屋に入り、ベッドの上で熟睡中だ。・・・するい。

・・・・・ とにかくでね、こここの村の出身のヒミリーはね、マッカ
王国の学者の所に嫁いだのよね。羨ましいわ、あそこで買い物でき
るなんて。その学者は8年前まで、聖剣の研究をしていたらしいわ
よ、まあ盗まれたらしいけど・・・あの夫婦には4人の子供がいて、
長男はイケメンだそうよ。下の子も将来イケメンになりそうね。全
く、ヒミリーの旦那さんはどれだけ強靭な物を持っているのかしら。
うちの旦那にも分けて欲しいわ。

「えつ！聖剣！？」

聖剣の話に、僕は闇に沈みそうになつた意識を取り戻した。意識が闇に沈みそうになる程、おばちゃんのマシンガントークは凄まじい威力だった。

「あら、嫌だ。あなたはまだ子供だけど、そんな事に興味があるのね。ええ、エミリーの旦那さんは強靭な剣を一振り持っているわ。一発で2度斬る事ができるらしいわよ。」

・・・一発で2度斬るって、どういう話だ・・・。秘剣！ツバメ返しでハツスル！なんてね。

良く分からん、・・・まあ、分かりたくないけど・・・。

「いや、そういう話じゃなくて・・・。その旦那さんは聖剣の研究をしていたって、どういう話なの？」

おばちゃんのマシンガントークには超重要なキーワードが隠されていた。もし、これがゲームならば、僕はおばちゃんのマシンガントークを読み飛ばして、キーワードを見落としていただろう。

「何！一発で二度斬る、だと！くそ、世の中にはそこまで極めた男がいるのか。俺も、『胃の中の蛙』という事か。」

いつの間にか、ルシファーがマシンガントークに介入していた。「ルシファー、その蛙は死んでいそうだけどね。ちなみにルシファーはどこに居たの？」

「あら、そちらのイケメンさんは昨日の昼に来て、ここで仲間を待っているんだって。仲間って、そういうえばあなたの事だったのね。」

おばちゃんの言った衝撃の事実に僕は腹を立てた。
全く、ルシファー・・・。君はあんな危険きわまりない所に僕を置いて行つて、自分はノホホンと宿に泊まつていたのか・・・。
自分だってルシファーの事を気にかけないで村へ向かつた事を忘れて、僕はルシファーを恨めしいと思つた。例え、同じ事をしても、不幸な人間は他人を恨めしく思うものだ。

「一発で二度斬る技かあ・・・、いったいどうすれば習得できるのだろうか？」

「さあ、マシムのスープでも飲んでみたらあ、効くらしいわよ。あんたいい男だし、彼女が喜ぶんじゃないかしら？」

「いや、あのさーそろそろ聖剣の話に戻して欲しいんだけど・・・。」

「

僕は眠氣で頭痛のする頭を抱えて言った。どれだけ、その話を引つ張るんだ！早く話を聞いて、すぐに寝たい！

「いや、私も詳しい話は知らないのよ。エミリーと旦那さんはマツ

力 王国に住んでいたマジカ。ちなみに、マジカ 王国の特産のマジムが怪しいと思つわ。」

「もつ、その話はいって！それより聖剣の事を教えて！せ・い・け・ん！…」

僕が大声を出すも、おばちゃんはいつもに顔をしかめ、耳を押さえる。

「それ以上は知らないわよ。マジカ 王国に行つてきたり？」

「そうするよ。」

おばちゃんから重要な情報が聞き出せただけで、とても満足だ。「ところで、迷いの山脈にいた黒豚の魔族はどんなようすだったのかしら？」

僕が部屋を借りて寝よつと思つたが、おばちゃんがまた話し始めた。

「ああ、なんとか倒しましたよ。」

僕は一刻も早く寝たいが、おばちゃんはまだ話を続けるつもりらしい。

「実はね、あの黒豚の魔族が村に食べ物をよこせつて言つて暴れるのね。それで、毒を盛つた豚肉を「人間の子供の生贊です。」と言つて食べさせてきたわけなの。もう2カ月近くの間、毒を盛つていたんだけど、なかなか死ななくてね。私達が盛つた毒は効果あつたかしら？」

人間の子供と騙されて、ブタを食べさせられて共食つさせられ、毒を盛られるとは・・・。

あいつ相当なバカだつたらしい。

しかし、なるほど、僕があの黒豚の魔族相手に善戦できたのは、その毒のお陰かもしだい。結局はキリ が倒したけど・・・。

さすがにあの情けない戯いぶりで、四天王の一角を名乗れやしないだろう。

あれ、でも・・・、あの黒豚が馬鹿な真似をしなければ、僕に余裕で勝つていたような気もするけど・・・。

それはきっと、僕が弱すぎるのか、あの黒豚が馬鹿すぎるかのどちらかだろ。

僕はそんな事を考えているうちに大あくびをだした。もう限界だ。

「おばちゃん、僕、一泊するね。」

僕がおばちゃんにそう言つて、適当な部屋に入らつとした・・が、ルシファーに襟首を掴まれた。

「ワタル、もう太陽が十分に登つているぞ。こんな時間になつても寝るなんて、グータラがする事だ。時間は待つてくれやしない。世界平和のため、俺が天界に戻るため、時間を一刻も無駄にはできない！」

ルシファーが熱血に、なにやら自分勝手な事も言つている。

「あの、僕、一睡もしていなんだけど・・。ほら、キリも寝ているし、今日はここで・・。」

すると僕達の後ろで足音がした。振り返つてみると、寝ていたはずのキリの姿があつた。

「問題無い・・。私は先ほどもベッドの上で寝て、こここの村に辿り着くまでも眠りながら歩いたから大丈夫だ。」

「キリ！この村まで歩くのに、君はとんでもない方向に歩いてゆくから、おかしいなとは思つた。どうして、そんな眠りながら歩いていたなんて器用なまねをするんだ。おかげで僕は村に向かうのに苦労したんだぞ！」

僕は悲痛な叫び声を上げた。

「・・・というわけで、次の町を目指して出発だな！」

ルシファーが僕の襟首をつかみながら言つた。

「僕つてば、一睡もしていないのに、出かけないといけないの！ルシファーの鬼！」

僕は目を赤くしながら言つた。

「さあ、出発！」

ルシファーが僕を引きずりながら歩き出し、キリが後ろをついてくる。

僕は仲間に振り回される星の元に生まれたらしかった・・・。

無事に四天王の一角を倒したワタル達。

彼らを待ち構える試練とは？

聖剣とはいつたい、どこにあるのか？

勇者ワタルについてくるキリ の目的とは一体何か？

万乱？盛、奇奇怪怪。

勇者ワタルの冒険はいかに！？

第13話 狩りの鉄則

勇者の御一行様は次の国を目指して歩く。目的地である「商業国・マッカ国」は、南の港町へ行き、船に乗る必要がある。飛行機も、モーター・ボートも、車も、自転車も、三輪車もないこの世界、瞬間移動の魔法を使えない以上、地道に歩くしか手段がないのだ。

「も、……もう、だめ……」

この世界で、最も有力な移動手段である一本足も本人に体力がなければあてにならない。現代っ子で、もやしつ子な僕には、体が万全の状態でも大変だというのに、昨日から一睡もしないで歩き通せば無理もあるのである。

僕らはスタッカート村を出発し、次の目的地の「トンノ・ロッソ王国」を目指している。トンノ・ロッソ王国まで続く母なる大地こそが、僕の目の前に立ちふさがる大きな壁だった。

歩いても、歩いても、終わりが見えず。歩いても、歩いても空の色だけが変わって行くような気がする。僕は同じ草原をグルグル歩かされているかと錯覚するが、ようく目を凝らせば見つけられる風景の違いにより、僕らが徐々に進んでいる事が分かる。

「はあ、……もう無理！」

僕が草原の上に倒れ込む。首に草がチクチク刺さるが、そんな事も気にならない程だ。

ルシファーが面倒くさそうに僕を見降ろす。

「おい、ワタル。ここで野宿するつもりか？ 次の国まであと少し

だぞ」

「んもう……あの村で少し寝させてくれれば……」

僕はいびきをかく。異世界から召喚された勇者にだつて、労働基準法が適用されないといけないと思う。こんなの人権侵害と過剰労働だ。危険手当だつて絶対に適応されるはずだ。

「はあ、仕方ないな。ここで野宿するか。キリ、お前はいいか？」

「……問題無い」

キリ は無表情のまま同意した。

ルシファーとキリ も、三人で頭をつき合わせ、ミツバのクローバーのようにして寝つ転がる。空から見ると、よくありがちな絵になるが、ハンサムと美少女と死にかけのもやしつ子ではなんかビミョーな絵になりそうだ。

そんなの誰も見ていないのではないかと思つが、実はそうでは無い。

光あふれる真つ白な世界。上は完璧にまで澄んだ青空で覆われている。

足元を覆うのは真つ白い雲。そして、とある場所には蒼空を映して、蒼い湖がある。

その蒼い湖のそばには一人の人間、いや、天使が座つていた。

そう、ここはルシファーが墮とされる前にいた世界、つまり天界である。

湖のそばに座つている天使は呟いた。

「ルシファー、本当に旅は順調なのか？」

ルシファーの双子の弟にして、天使副長のミカエルである。彼は寝つ転がっている3人を見つめていた。

彼は天界の湖から下界を見下ろしているのかと思いきや、彼は自分の手元にある水晶玉を覗きこんでいた。

実は、天国もまた一つの異世界であり、雲の下を行けばルシファーがいる「ファンタジア」に行ける訳ではない。キリスト教一派はファンタジア以外にもさまざまな異世界にまで勢力を広げているのだ。ちなみに、今さらだが「ファンタジア」とはワタル達が旅をしている世界である。本当に今さらだが……。

ミカエルはため息をついて、水晶玉の映像を消した。

「こりや、ルシファーが帰つてくるのに時間がかかりそうだなあ」
ミカエルはこうみえても兄の事を気遣つていて。兄が「あれ食いたい」と言えば、彼はそれを作つてやり、「仕事サボりたい」「女をだきたい」と言えば、あれこれ世話をやいている。もしかしたら、ルシファーの駄目つぱりには、ミカエルにもその責任の一端があるのかもしれない。ひょつとすると、神がブラコンなミカエルからルシファーを引き離すために、彼をファンタジアに送つたのかもしない。

ちなみに天使の役目は神からの遣いとして、人間達に干渉することである。そのほとんどは人間の観察である。

ワタルはファンタジアで言葉が通じる事に驚いていたが、それに訳が在る。人間が発する意思は天界を経由し、翻訳されてから他人に送られる。天使たちが人間の観察をしやすいように、天界で翻訳される時に天使達が人間達の意思を読み取つてているのだ。簡単に言つと、通訳と盗聴を同時にこなしているのだ。地球ではそれができないのは、他の神々の一派達がけん制し合つてているため、干渉できないのだ。

天界の都合で言葉が通じ合い、常に天界に話が筒抜けなのをワタルは知らない。知つていたとしても、どうしようも無いが……。
もちろん、天使たちも一つの世界に取り掛かれるほど暇では無く、ほんのわずかの会話しか盗聴しないけど……。

ファンタジアのある草原では三人は深く眠つていた。彼らには見張りという概念は存在していないようだつたが、運良く魔物には襲われなかつた。しかし……、

「く、首が痛い。ケツも足も痺れてる……。」

僕は堅い地面で寝たため、体中のあちこちが痛む。おまけに、ギ

ユルギュルつと、この世にあるとは思えないほどの腹の音が鳴り響く。僕は一昨日の朝から何も食べず、ずっとお腹が鳴り続けている。美しい朝日を眺めるが、それを美しいと思つわびさびの心を持つ余裕は僕に存在しない。

僕が起きて暫くしても、ルシファーとキリ は寝てるので、僕はつさぎか何かを狩るうと思つた。

「さてと、王家の猟銃の出番かな？ フフフ、我が銃は血に飢えている……、つて、僕にはそんなセリフ似合わないな……」

飢えているのは、銃ではなく僕の胃である。このままでは萎んで、しぼんで消えてしまうのではないかと思うほどである。もやしつ子と言えど、食べなくては死んでしまう。靈を食べて生きるなんて器用なまねはできないのである。

僕は眠る一人を放置し、王家の猟銃を脇に構える。ここまでお世話になつた王家の猟銃がその真価を發揮する時がきたのだ。元々は猟銃だし……。

草原からちよつと歩けば、林があるのでそこに向かつ。

狩りの鉄則その一

林に入つた僕は、まず地面に目を凝らす。動物の足跡など、生活の痕跡を探しだし、巣穴などを見つけるのが狩りの鉄則だ。

僕は、用心深く地面を睨みつける。

「……よく分からぬ……」

たかだか中学一年生につさぎの足跡を見つけられる訳が無い。ラッキー・パンチを狙うしかないのだ。

狩りの鉄則その二

不用心に音を立てない事。動物達は人間よりも遙かに耳が良く、こちらが音を立てて近づけば逃げるに決まつてゐる。そうして、獲物を見つけられずに終わつてしまつ。

僕は一步一步を丁寧に、静かに歩む。

そう、そつと、そつと……

「グギュルルルル！」

僕のお腹が盛大に鳴り響く。

僕のお腹の裏切り者……。

狩りの鉄則 その三

狩りは、空腹で次の狩りに支障が出る前に行つ事。僕はもう遅いが

僕はやけっぱになつて、ギラギラした目で獲物を探す。
ウサギを探すも、全く見つからない。

「はあ、何でもいいから出てこい！」

空腹は人を短気にさせる。僕はギュルルと鳴るお腹を押さえて叫んだ。

「ギャオオオオ！！」

するとお約束なのか、僕の後ろから一メートルを超えるクマが現れた。

「ヒツ！！」

現れたのは魔物のクマで、名前は「テディベア」。かわいい名前とは裏腹に、一流の猟師として名をはせた「テディさん」が油断した所を襲い、殺した事から名前を付けられた。以前に僕が遭遇して、追われた事のある種だ。

そいつを見た時、僕は一瞬怯えたが、今の僕は以前の僕ではない。スライムを殺し、ゴブリンを蹴散らし、自称四天王の一角の黒豚さんと激戦を繰り広げたのだ。

僕は必死の形相で王家の猟銃をクマに向ける。

しかし、クマに至近距離まで接近されたため、銃をクマの大きな鉤爪に弾き飛ばされた。

あっけなく飛ばされる銃を諦め、僕は走りながら剣をクマに投げつけた。僕の剣術ではクマにやられてしまうだろうという考えだ。剣は鋭くクマの首元に飛んでいき……、クマの牙にガチリと挟まれた。

「魚飛^{キヨヒ}ー！！」

背を向けて走り続ける僕を追つて、クマは剣を加えたまま四足で

走る。

「勇者さん、お待ちなさい。ちょっと、落し物。白い刃渡りの、手軽な片手剣へ」

もちろん、そんな事をクマは言わずに、僕に襲いかかってくる。

僕は走りつつ、魔法のタクトを腰から引き抜き、三拍子で振る。

全ての生命の源よ 乾きし大地を潤すもの 我、水の精靈に祈り
邪から守る盾となれ！

「タッチ・デ・ポン・レニア
水精靈の盾」

僕は水の守りの魔法を、慌てていたために、間違えてクマにかけてしまつたようだ。タクトの先が蒼く光、次の瞬間に水の玉がクマを包み込んだ。

クマは驚いてもがくも、水の玉の中心に浮いているため、足が地面に届かない。

そこでクマは泳ぎに出た。しかし、前に泳いでも、泳いでも、水の玉もクマの動きに合わせて動くため、クマは水から逃れる事ができない。クマは泳いで僕に近づいて来るが、クマの泳ぎよりも僕の全力疾走の方が少し速かった。クマの泳ぎの速さに、僕は怯えながら走つたのだが……。

数分後、クマはようやく溺れ死に、僕は荒い息を整える事が出来た。

「ひょっとして、これは守りの魔法ではなく、僕の使える最強の魔法なのかなあ」

黒豚さん相手にこれを使えば良かつたかもしれないと、僕は改めて思う。

僕は水の玉の中で溺死したクマを見つめる。

「こんな大物、どうやって運ぼうか？」

僕は自分勝手な二人の仲間をあてにする事はできない。

僕は水精靈の盾を維持し、水の玉を移動させた。結構便利だが、途中で集中力が尽きてしまい、結局引きずる事になった。

ようやくルシファー達の所に戻れた僕は、クマを食べる準備をする。

一人はぐっすり眠っていたが、僕が薪を集め終わつた所で目を覚ました。

「おお、ワタル。お前がこんな大物を仕留めてくるとはやるなあ。俺も腹が減つた所だ。」

「……上々」

三人で調理する事になった。と言つても、調理器具が無い以上、ただ焼くだけになつてしまつが。

クマを切り分ける時に、少し困つた事になつた。僕の持つナイフではとてもじやないが、切り分けるのが大変だ。ライオン獅子王師匠からもらつた剣も、戦いとクマに噛まれた事でボロボロになつている。

「……私が切り分けよう

キリが二本のバスター・ソードを引き抜き、高らかに構える。キリが剣を目にも止まらない速さで振りおろすも、クマの手前でピタツと止めた。重たい剣を寸止めするのは難しいが、なんでそんな事をするのか僕には分からなかつた。

「どうしたの？ キリ」

「……私の剣はバジリスクの牙で出来ていて、斬つた物に猛毒を与える。クマを切つたら、毒で食えなくなる……」

僕とルシファーはズッコケそうになる。キリの所為で命を落としかけたのは何度目だろうか？ 所でキリ、そんな危ない物を初対面の僕に突きつけたのか。

僕達は再び考え込んだ。クマを食べるにはどうしたら良いのか？

「そうだ、俺にはこれがある！」

ルシファーが何かを思いついたようで、彼は立ちあがつた。

ルシファーが両手をパンツと叩くと、両手の間から金色の光が溢れた。

「ま、まぶしつ……」

光が治ると、ルシファーの手には神々しく輝く金色の剣が握られていた。

「どうだ、カッコいいだろ？」「

ルシファーが自慢げに剣をブンブン振るう。

「ルシファー、その剣を魔法で作つたの？」

僕は興味津津で尋ねた。

「ああ、これはなあ。ミカエルの奴からパクッてきた剣だ」

ルシファーが子供みたいな顔で笑う。

「えつと、それっていいのかなあ？ まあ、仕方無いか、今すぐ返せないだろうし」

僕は微妙な顔をする。僕、だって、曖昧にだが神話についてしっている。大天使ミカエルから剣を盗み、クマを切り分ける為に使う事を許されるのか疑問に思うも、空腹の方が目先の問題だ。僕が探し求めている聖剣よりも格が高そうな剣でルシファーがクマを切り分けるのを黙つて眺める。

僕はありがたい剣で料理されたクマの肉を、ありがたく頂戴する。塩すら無く、ただ焼いただけの肉だったが、飢えに勝るスペイスは無いのだ。

カーン、カーン、カカーン、カーン。

天界のとある鍛冶家から金属を鍛える音が響く。炉ではミカエルが鬼の形相で、金槌を振りおろしている。

「全く（カーン）、ルシファーめ（カーン）。人の剣を（カーン）、盗むとは（カーン）」

ミカエルが兄のルシファーに振り回されるのはこれで何回目だろうか。腹が立つにも程がある。

「これでは（カーン）、部下の前にも（コーン）、出られんではないか（カーン）。私の剣を（カーン）、よりによつて（コーン）、包丁代わりにするとは（カーン）」

剣を失くしたなんて、天使副長の沽券に関わるので、こつそり代わりの剣を用意しないといけない。

「全く、兄さん！ 少しは大人しくしていってくれ！」

ミカエルの苦労はまだまだ続きそうです。

闇幕 魔王は闇で笑う、だ囗ロン

翡翠のような色をした壮大な草原が風にざわざわとゆれる。空で止まっているかのように浮かぶ白い雲も、じつと目を凝らせば風に流れゆくのが見え、時々眩しい程に輝く太陽が隠れたり、覗いたりする。

その草原に囲まれるように巨大な街が広がる。街路は石畳が敷き詰められ、建物はレンガが組み合わされていれ、色とりどりの屋根から伸びる煙突から、のんびりと薄い煙がちらほら覗いている。

タロ・街で一番の早起きさんは タロのパン屋さん

（とあるパン屋のウインドウの中で、大きなタロがハ本中六本の腕でパンを一気にこねるパフォーマンスをしている。）

犬の子供たち・今日も楽しい 学校行こうー 友達沢山だー

（三人の犬の顔を持った子供達が鞄を手に持つて、くるくる踊るようにして学校へ向かうつてこる。）

黒ヤギ・駄目だ 止まらない 手紙食べるのー 手紙 運ぶ！
私の役目なのにー

（黒い山羊の頭を持ったおじさんは、ポストの前でむしゃむしゃ手紙を食べながら嘆く）

牛男・奥さん！ 奥さん！ またたびはいかが？ 今夜！ 旦那と
！ 燃え上がる夜

猫の女性・あらり 嫌だわ 恥ずかしいわ。お口 お上手 その
気になつちやう

(一本足で立ち、牛の頭と牛の体を持った男が、三角耳としつぽを
覗かせ、猫の顔を持つ女性に香水を勧めている。)

街のみんな・今日も平和だ 楽しい一日が始まる~

(街の住人が踊つてゐる)

(シーンが城の玉座の間に移る)

兵士たち・この国で一番偉い 魔王陛下 おなづり~

(兵士たちは胸に手を上げ、膝をついて歌つ。)

(身長は三メートル近くで、神々しく輝く黄金の甲冑で身を包んだ
ライオンの顔を持つ魔族が、玉座に悠然と歩いて向かう。歩くたび
に、黄金色のたてがみが揺れる)

ライオンの魔族・陛下、お姿~、拝見できて~ 部下は、とても
も!~ 名誉で歓喜

(ライオンの魔族が玉座の隣に立つ。ライオンの魔族の背が大きす
ぎて気が着かなかつたが、身長150cm位で、黒い仮面とマント
を身に付けた少年が玉座によじ登る。少年が小さいわけではなく、
城の全てが大きすぎるようだ)

魔王陛下・皆の、衆よ!~ 出迎え御苦労~ 今日も、一日!~ 仕
事に励め~

部下全員・陛下 嬉しき ありがたき御言葉へ 今日も頃へさせて
下さい 貴方様の元で~

そう、読者の方もお気づきのように、ここは魔族たちが住む国。『キヤロット平原』の中央に位置する、『アンダーギー国』である。アンダーギー国は、巨大な街に囲まれて、天高くそびえ立つ、巨大な城が鎮座している。その城は『モン・ブラン城』と呼ばれ、魔王はここを拠点にしている。

金色の甲冑を身に付けたライオンの魔族は魔王の右腕が務まるほどの力を持ち、黒づくめの魔王を常に護衛している。二人と初対面の人であれば、ライオンの魔族を魔王と勘違いしてしまいそうである。

黒い仮面をかぶった魔王は、見た目だけは人間の少年のようであるが、その正体はごく一部の者しか知らない。

巨大な城と城下町から成り立つ、このアンダーギー国、実は歴史が36年と浅い。魔王が現れたのも、実にたったの5年前だ。何から何まで、他国にとつては謎につつまれた国である。

魔族はあらゆる獣の姿を持った、人間みたいな姿をしている。ワタルと戦った黒豚さんも同じだ。

大きすぎる玉座で足をブラブラさせている魔王陛下にフクロウの魔族が近づいてきた。

彼は魔王陛下に向かつて膝をつき、頭を下げる。

「魔王陛下、ご報告したい案件が五つ程あります」

「ふむ、報告せよ、アウル宰相よ」

魔王が頷いて、報告を促す。

「は、では申し上げます。一つ目は新たな用水路の建設の予算の目途が立ちました。二つ目は、手に職を持てなかつた者達に、救済処置として与えた仕事が順調です。魔導書、学術書の写本を書かせま

したが、それなりの出来具合でござります。」

「ふむ」

アウル宰相の報告に魔王陛下は頷く。

アウル宰相は苦い顔をして報告を続ける。

「三つ目に、魔王陛下には誠に申し上げ難いのですが、古代遺跡に眠る時空間魔法の解析は滞つているようです。」

「つむ、仕方あるまい。我も簡単に事が運ぶとは思つていいない。根気良く続けるしかあるまい。優秀な研究班ならば時間の問題であろう」

「はつ、ありがたき幸せ。研究班も陛下の御言葉を励みに努力するでしょう。」

彼はさらに深く頭を下げる。

「四つ目の報告ですが、バーサーカー將軍の消息が依然と不明のままでござります。」

「ふーむ、あの者が我らを裏切るはずが無いと信じておる。きっと、任務に手こずつてあるのだろう。あの者の人格と実力を信じておれば良い」

かしづくアウル宰相は「はつ」と返事をし、最も重要な案件について魔王陛下に報告する。

「五つ目の報告ですが、四天王の一角である知将が人間に殺されたそうです」

「なんだと！　あいつの事はどうでもいいが、あいつを倒すほどの人間がいるのか！？」

ライオンの魔族が驚き声を上げる。

「レオン將軍、落ち着け」

魔王が偉そうに、玉座の手もたれに肘を立て、頭を手で支えている。玉座が大きいために肘かけが高く、傍から見ると、彼の腕と首が痛いたしい。足も床に着かない所為で、長時間座る時はエコノミー症候群に気を付けなければならないようだ。

「あいつは勝手な行動が目立ちすぎた。人間に殺されなければ、い

ずれ始末していた存在だ。その点ではその人間に感謝する事にしようと

魔王は頭を支えていた腕を下ろした。格好をつけるのは良いが、腕が存外にしごれたらしい。

「しかし、その人間については十分に調べる必要がある。アウル宰相よ、その人間について調べよ」

「はっ、かしこまりました」

アウル宰相は頭を下げて退出した。扉が閉まるやいなや、レオン将軍が魔王陛下に話しかけた。

「魔王様、知将を倒した人間についてどうお考えですか？」

魔王は思案げに自分の顎をなでる。一番やり安い格好の付け方のようだ。

「ふむ、興味深いな。できれば殺さずに会ってみたいものだ。」

魔王は顎をなでる手を止めた。

「所で、レオン将軍」

「はっ、何でしようか魔王陛下」

魔王は何かを思い出すような顔をしながら、彼に問い合わせた。
「知将はどんな名前だったかな？ 黒豚つて事しか覚えていないのだが……」

彼も頭をひねつて考える。

「なんでしたつけ？ 通り名が『暗黒のコシトーン』だったような、違うような？」

「もう、あいつなんて『恥将』とか、『畜生』とかで良いんじゃねえ？」

魔王が笑いながら言い、レオン将軍は苦笑する。

「なら、『きちしょう』とかはどうでしょう？」

「……クックク、フッハッハッハ、ワーッハッハッハ！－！」

魔王とレオン将軍は互いに目を見合わせ、こらえきれずに大きな声で笑い出す。

あの世で黒豚さんは「ちきしょう！－！」と叫んでいる事だらう。

嫌われ者は裏で笑われるものだ。

闇幕 魔王は闇で笑う、だクロン（後書き）

「よひ、心の相性よりも体の相性を大事にするルシファー様だ。まあ、ここで第一幕は終わりつて所だらうな。実際にこの小説を章分するかどうか疑問ではあるが。実際どうよ。美男子で完全無欠な俺様をさしあいて、トオルの奴が主人公つてマジありえなくねえ。俺が主人公でよくねえ、つて思う訳よ。さあつて、次回予告は……つて、なんだよ作者。はあ？ 何プラカード持つているんだよ。何なに、まだ次話はできていない？ 次回予告すんな！？ 俺様に指図すんな！ 次回予告をしどきやあ、それが次話になんだよ！ と言つ訳で次回予告だ！ 港町だよ！ 港町と言えばあれだ、ポロリしかねえだろう！？ 何！？ そんなの無茶だあ？ 無茶だと思つ奴は、テメエの田ん玉でもポロリしどけ！」

第14話 港の王国 トンノ・ロッシ

「ふあー、ようやく着いた」

僕は大きくあぐびをした。ここまで道のりはとても長かった。もつすでに夕日が沈みかけている。

トンノ・ロッシ王国は大きな港を持ち、レンガ造りの町には常に潮風の匂いが漂ってくる。漁業や貿易が盛んで、街は活気に溢れている……はずなんだけど……。

「なんだか、しけた街だなあ」

ルシファーが眉をひそめてはつきりと言つ。

そう、夕日が沈みかけているとは言え、人が見当たらず、閑古鳥が鳴いている状態だ。

「うーん、どうしたんだろう?」

僕も首をかしげる。

「……道に迷つて戻れないのでは……」

「「それはお前だけだ!!」」

僕とルシファーは同時にツッコム。キリの迷子は僕らの中で悪夢になつてゐる。

「まあ、どうしてかは分からぬけど……、とりあいず、冒険者ギルドで依頼の成功を報告しようが。その時に何か分かるかもしけないし」

僕は少し悩んでから決めた。

冒険者ギルドは互いに連携し合い、常に魔法で連絡を取り合つてゐる。多少は手数料として依頼料から差し引かれるが、他のギルドでも報酬を受け取る事ができるのだ。

「そうだな、何よりもまずは行動だ。女を口説く時も、細かいプランを練るよりも、まずは声をかける事が大事だしな。」

「……行動する事が大事なのは認めるけど、なんでもかんでもナンパを基準にしないで欲しいな」

僕はあきれつつも、冒険者ギルドを探す。

僕が辺りを見渡すと、よほよほの老人が杖をついて歩いていた

すみません 冒険者ギルドはどうですか？

しかし、老人は僕の呼びかけに気がつかないようで、そのまま素通りしようとする。

僕は老人に近づいて、先ほどよりも大きな声で問い合わせた。

「すみません、冒険者ギルドはどちらでしょうか?」

「僕は少しだけナイス」として、老人の耳に怒鳴るように腰をかた。

やかましわ！！

こんだ。僕の耳に痛恨の一撃だ。

僕は思わず耳を押された。耳鳴りがなかなか治まらない。
「全く、人に怒鳴るなんて最近の若者は礼儀を知らん。全く、嫌な
世の中になつたものじや。どうして、最近の若者は年寄りを敬おう
とせんのか。わしらが若い頃では考えられんことじや、嘆かわしい。
だいたい最近の若者は急け者で、大の大人になつても親に面倒を見
てもらうなんぞありえ話じや。二十も過ぎれば、親の面倒を見始め
るものじや らう。くびくびくびくびくびくびくびくびく
くびくびくびくびくびくびくびくびくびくびく

老人の「最近の若者は」と始まるお説教攻撃！ 勇者の精神力を
ガンガンと削つて行く。

「ほそほそ（うざいな、ただ道を尋ねただけなの）」

「なんじゃと！！ うざいだと！！ それが説教を受ける者の態度か！？ 冒険者、ギルドへの道を尋ねたかったのであれば、もつと礼

儀正しく聞かんか！！」

老人が鬼の形相で怒る。

「き、聞こえているくせに。どうして耳の悪い振りをするんだよ。僕だつて腹が立つてくる。こんな老人を敬いたくは無い。」

「いーや、さつきは聞こえんかったわ」

老人は偉そうに答える。

「いや、だつて、さつき冒険者ギルドへの道を尋ねていろって理解していたよ」

「ふん、初めお前さんは何て声をかけたか？」

「『冒険者ギルドはどちらでしょうか』と尋ねましたよ」

「わしが聞こえなかつたのはその前じゃ」

老人は威張り、僕もさらに腹を立てる。

「『すいません、冒険者ギルドはどちらでしょうか』と、確かに尋ねました」

「馬鹿者！　わしが聞こえなかつたのはそりそその前じゃ……」

「えつと……」

僕は頭にハテナマークを浮かべる。その前は何も訊ねていよいはずだが……。

「『こんにちは、素敵なお嬢様。大変申し訳ないのですが、どうか私の頼みを聞き受けてはいただけないでしょうか。』といいつ言葉が聞こえなかつたんじゃがなあ」

「そんな事言つてねえし、言つ訳無いだろう……」

「海より広い僕の心も、ここらが我慢の限界だ……ぶん殴りたい！」

ルシファーは僕の様子を面白がつて見物しているだけだが、どうやらキリは僕と老人のやりとりに見るに見かねたようだ。

「……冒険者ギルドは？」

「あつちじや」

キリの問いに老人はあつさり答えた。

老人はキリの顔を見て、だらしなく鼻の下を伸ばしていく。

「！」の通りにそつて行くんじゅよ、御嬢さん

「…………」

僕は怒りのあまり、何も言えなくなつた。何か話そうとすれば爆発しそうだ。これ以上この老人と関わりたくない。

「所で御嬢さん、わしの家でお茶でもせんかのう」

僕達はいやらしい顔の老人をがん無視して、すぐさま冒険者ギルドに向かつた。

通りは緩やかなカーブを描いていて、僕達はその通りに沿つて進むが……

ドゴーン！！

キリ が民家の壁を蹴り破つた。

「な、何してんの、キリ さん」

僕はあわててキリ に声をかける。

「…………通りを真つすぐに進んだら、田の前に壁があつたから蹴り飛ばした……」

「じじ は通りに沿つて進めつて言つたんだよ。直進しろつて言わなかつたよ。人の家の壁を金輪際蹴り飛ばさないで！」

僕はキリ の手を握り、走り出した。美少女の手を引いて走るのは映画のワンシーンのようである。

「なんじゅ じりゅー！！

怒りを爆発させた雄叫びがなければ、映画のワンシーンのようだつたかもしれない。

パツパラ、パツパパーン！ 勇者の逃げ足スキルが上がつた。勇者は「とんずら」を覚えた。

（勇者絶賛逃走中）

僕らは冒険者ギルドのトンノ・ロッソ国支部に逃げ込……じゃなくて、辿り着いた。大きな港を持つ国なだけあって、冒険者ギルド

もセイルーン王国よりも一回り大きい。

僕達はギルドの扉を開くと、建物の大きさとは対照的に、人が少なかつた。

「全く、だらしない若者ばかりじゃ。ここはわしがなんとかせねば何やら息巻いている御老人が一人、優男風の青年が一人、おばちゃんが一人いるだけだつた。

「なんじゃこれ、冒険者っぽい人が全然居無いじゃん……」

「誰一人居ないとは……」

啞然とする僕と、嘆ぐルシファー。僕は茫然としながらも、ルシファーの嘆きに聞き返した。

「ルシファー、戦士はいないけれど、一応人は居るみたいだけど?」

「ふん、俺は美女以外を人として認めねえんだよ」

それはかなり酷い発言だよ、ルシファー。ひょっとしたら、神の言いつけで僕に付いて来ているだけで、僕の事も人として認めてな
いつて事は無いよね?

僕はルシファーに肯定されるのが怖くて、その疑問は口にしなかつた。

僕はそんな恐ろしい考えを振り払つてから、報酬を受け取るために、誰もいない受付に近寄つた。

「すいません、誰かギルドの方はいらっしゃいますか?」

「なんじゃ!」

「うわっ!」

すぐ近くで息巻いていた老人が返事をして、僕は少しごびっクリした。

「わしは、こここのギルド長のサルモーネじゃ」

またもや不機嫌そうな老人と会話する事になつてしまつた。射て座の人は老人に近づいてはいけないという占いでも出されたのかな? 万年不幸な僕は、見てもない星座占いに難癖をつけた。

僕はギルド長におずおずと声をかけた。

「あの、スタッカート村の南にある迷いの山脈に出没する謎の魔族

を退治しました……」

ギルド長は僕とルシファーとキリ に皿をやる。

「ふん、優男と少女とガキにこんな事ができるはず無いだろつ。嘘もたいがいにしろ！」

ギルド長は頭ごなしに否定する。

僕がタジタジになつていると、ルシファーも参戦してきた。

「はん、盲録したジジ になにが分かるんだ。ジジ は大人しく寝ていればいいんだよ」

ルシファーが冷ややかに言つ。どうやら、優男扱いされた事に腹を立てたようだ。

「なんじゃとお！」

ギルド長が顔を真つ赤にさせ、手をブルブル震わせている。

「あ、あのう……」

ギルド長もルシファーもお互に怒りを納める気はないよつだ。僕は弱弱しく声をかけるも、二人を止める事はできなさそうだ。

僕は助けを求めるべく、キリ の姿を探した。しかし、キリ はギルドに用意されているテーブルの上で居眠りしている。こんな喧騒の中で居眠りするなんて、とんでもない程の昼寝スキルだ。

二人を止める事はできなさそうだ。老人はルシファーに殺され、僕達は逃亡しなければならなくなる。勇者のくせに逃亡ばかりなのも情けないけど……。

しかし、女神は僕らを見捨ててはいなかつた。

「こり、お父さん。せっかく来てくれた冒険者の方々に失礼でしょ！」

「スパン！ ギルドに居たおばちゃんがギルド長の頭を殴る。

「痛いな……、急に何をするんじや！」

「いつも、いつも、「若者は礼儀がなつとらん」と言つてゐくせに、ちょっとは自分も礼儀作法を学んだらどうなの！？」

おばちゃんはどうやらギルド長の娘のようだつた。

「本当にごめんなさいね、冒険者の方々。……アリーチェ！ 冒険

者の相手をして！」

おばちゃんは階段に向かつて呼びかけた。

「はーい、ただいま！」

じたじた足音がした後、「きやつ！」といつ声と大きな音が響いた。ギルド全体が揺れたような気がした。

しばらくすると、半ベソをかいした金髪美少女が姿を現した。ギルド長の孫でおばちゃんの娘らしいが、この血筋でどうやつたら美少女が生まれるのかが、とても不思議だ。

「イタタタ……、えつと、冒険者の方。今日はびのよみがの御用時でしううか？」

腰をさすりながら尋ねる彼女に、僕は心配する。

「あの、大丈夫ですか？」

「はい？ 何の事でしょうか？」

彼女は笑みを作っている。

「だから、その腰……」

「はい？ 何の事でしょうか？」

どうやら今の事を無かつた事にして欲しいらしい。

僕は意識を自分の用事の方に向けた。

「えつと、迷いの山脈の依頼の報酬を受け取りに来ました」

「分かりました。」これより確認を行います。まずはギルドカードを見せて下さい。」

僕はしぶしぶギルドカードを渡す。

「いつの間にギルドカードなんて持つているんだ」との疑問をお抱えのみなさん。僕とルシファーはセイルーン王国の冒険者ギルドでギルドカードをもらっていたのです。しかし、僕の名前と冒険者番号、そして、「レディーの見方」という恥ずかしいチーム名が書かれていれば、その存在を忘れて仕方ないのも御理解して下さい。彼女はギルドカードに書かれたチーム名を見て噴いた後、別の部屋に入った。すると、何やら物凄い物音や、「きやつ」という叫び声が聞こえて来たり、剣と剣がぶつかり合つような音が聞こえてく

る。

しばらくすると、彼女は水晶玉を持って受付に来た。

彼女は乱れた髪を整えながら、説明を始める。

「この水晶玉は触れた方の記憶を映しだす事のできる魔道具です。こちらに手を触れて頂き、依頼達成の確認と魔物についてのデータを取らせて頂きます」

「へえ、凄い魔法だね」

「ええ、昔は魔道士ギルドでしたから」

僕は感心する。確かに、これでデータを集めれば、魔物の対策とかに困らないかもしねれない。

「でもさ、これで人の記憶を覗いたりとかって、できちやうの？」

彼女は首を振る。

「いえ、これは触れた方が思い浮かべた記憶を映しだすだけです。触れた方が拒否すれば、記憶を映しだす事もできないですよ。おまけに、経験していない事を想像しても、それを映しだす事はできません」

どうやら、プライバシーは守られ、虚偽の報告もできないようだ。

「では、どちら様が、報告をなされますか？」

「あ、じゃあ、僕が」

僕は黒豚の魔族と戦つた時の事を思い浮かべて、水晶玉に触れた。僕は黒豚と戦い、逆転して、逆転され……、最後に黒豚がキリに踏みつぶされる所が水晶玉に映し出された。

「…………」

ギルードとおばちゃんは驚いて黙りこむ。

「…………」

アリー・チエも黙りこむ。

「…………」

さすがのルシファーも目を丸くしている。

「ＺＺＺ…………」

当事者のキリは眠り続けている。

祖父、子、孫の三人は眠るキリを見つめる。

「……とても、お強いんですね……」

なんとなく、話をするような雰囲気ではなくなってしまった。

港の国、トンノ・ロッシ国に辿り着いた勇者御一行。この国を脅かす影はいかに！？

万丈波乱、奇奇怪怪。わたる達を襲いかかる敵は？

第1-4話 港の回国 テンノ・ロジン（後書き）

わたる：「やあ、贅沢な外食と言えば、サイゼリアが思い浮かんじやう回わたりです。しかし、前回のルシファーの会話は酷かつたよね。この「最弱勇者とチートな勇者の御一行様」の主人公の僕の名前を聞違えるなんて……。『偉大なる賢者』の主人公の名前と間違えて欲しくないよ。全く、読者の方はとつくに気づいていたよね？」

読者：「…………」

わたる：「…………あれれえ？ 読者の方の三点リーダーが多すぎるなあ、なんて。…………ひょっとして、気づいてもらえなかつた？ な、な訳無いよね？…………そして、今日まで、たよなひ～（泣きながら走り去る）

第15話 魔物が来りて家壊す

嫌な態度のギルド長、サルモーネが、胸糞悪いじじーがキリーに土下座をする。

その娘のおばちゃんも、キリーの前に美味しそうな料理を並べる。さらにその娘のアリーチーも、キリーに涙を流して懇願する。

「お願いします。どうかこの国を御救い下さい！」

「…………」

美少女のお願いにキリーは沈黙を守り続ける。

「どうか、この国を救って下され！」

「…………」

僕達をこけにした老人が額を頭にすり付けも、それでもキリーは沈黙を守る。

「どうか、これで手を打つてくれないかねえ。私からもお願いするよー」

「…………」

おばちゃんは、牛のステーキ、ブリのステーキ、キャビアのステーキを並べるも、キリーは鼻をピクピクさせるが、それでもかたくなに沈黙を守り続ける。どうやら、三人の中でも一番効果があるようだが、あと一歩足りない。

「キリー……」

僕は困ったように眉を曲げ、彼女の名を呟く。

「バクバク、もぐもぐ、むしゃむしゃ、がつがつ、ズルズル、ふーふー、シャキシャキ、ちゅるちゅる、ズーズー、ばきばき、バシュバシュ、ギコギコ、ドキューンドキューーン」

ルシファーは、おばちゃんがキリーに運んで来た料理を、次から次へと胃袋に収めていく。読者に不快な思いを強要してしまっただろう。食事の様子を描写するのは、テーブルマナーを大いに逸脱しているので割愛させてもらつ。

「…………」

キリーは一生懸命に頼み込まれるも、相も変わらず沈黙を守つて
いる。

「どうか……、どうかお願ひします」

アリー・チヨの涙がほとほと床にこぼれる。そんな彼女達に対して、
キリーは……、

「…………」

まだテーブルの上で居眠りをしていた。

「すまんが、わしらの話を聞いてはくれないかね」

ギルド長がキリーの肩に触れようとした。次の瞬間、キリーの手
が動いた。巨大なバスター・ソードが目に見に留らぬ程の早さで抜か
れ、剣が閃光となつて空中に軌跡を描く。

「うわあ！！」

ギルド長が後ろに尻もちをついて、危うく剣を避ける事ができた。
キリーの剣もいつの間にか鞘に収まつている。寝つころがつたまま
剣を抜き、振つて、鞘に納めるなんて神業をどうやって行つている
かは分からぬが、それを遙かに超える程すごい事は……

「…………」

「…………寝ているんだ、キリー…………」

僕はぽつりと呟いた。

そう、一連の動作をキリーは眠つたまま行つたのだ。どこのドイツの歐州の殺し屋か、はた又はセイントかと叫びたくなつてしまつ。
「ははは…………」

僕はこまかすよつに笑い、キリーと頼み込む三人を眺めた。三人
は隠れてしまつたアマテラスを外に出すかのように、キリーの気を
引こうとしている。腹を立てたアマテラスの方が、虫けらを相手す
るよつに、完全完璧に興味無いキリーよりマシかもしない。

キリーに頼み込む三人の様子を見ると、とてつもなく面倒でやつ
かいな頼みごとと思われる。頼み事を引き受けるか、ここは逃げ
ようか、僕は本氣で迷う。キリーとルシファーはどんな敵が相手で

もどこ吹く風だが、僕にとっては死活問題だ。ちなみに、ルシファーはどこ吹く風と言うような顔をして、食後のデザートに手を付けていた。

僕は真剣に悩んだ。

この場から逃げ出すべきか、色々と言ひ訳をつけてこの場を去るか。前者は彼らに嫌な思いをさせ、後者は彼らに嫌な顔をさせるだろう。

例え他人を見捨てても、……それでも、僕には、守りたいものがある！

もちろん、自分の命だ。誰だって我が身がかわいはず。生存欲求は生物の根本にあるものだ。

「すみません、彼女は疲れているようなので、日を改めて伺います。それで、えつと、その、…失礼します」

僕はキリーを起こそうとして、寝ぼけた彼女に危うく剣で切られそうになる。ルシファーに彼女を起こしてもらおうとするも、デザート中の彼に振り払われて転ぶ。

アリー・ヒュはそんな僕を見て、今度は僕にすがりついてくる。「すみません、屈強なる戦士の従者様。どうか、どうか、この国を助けていただけるように御説得して下さい」

乙女の涙の攻撃！ デルデルデン（効果音） 勇者は良心に縛られてしまつた。

勇者はとんずらをしようとした。

しかし、勇者は動けなかつた。

「いや、…その、…僕は…」

「それは、つい半月前の事です…」

乙女は勇者を無視して語り出した。

勇者は良心に縛られて動けない！

「以前のこの国は、各国との貿易の窓口となつて、世界最大の貿易国として賑わっていました。みんな、みんなとても幸せでした。あの日までは…」

乙女は語り続けている。

勇者は逃げ出した。

しかし、勇者は良心に縛られて動けなかつた！

「半月前に、突然港の近くの海に巨大な魔物が現れたのです。その魔物は、私達の船も、他国からの船も全て飲み込み、多くの人が犠牲になりました。もう、私達の国では、貿易どころか、魚一匹も手に入りません。沢山の冒険者が挑み、帰り打ちに会いました。いくら歴戦の戦士達も、船の上からでは矢を放つしか方法はありません。しかし、矢は海の表面までしか届きません。魔物は簡単に船を沈めてしまうのです。このままでは、この国はお終いです」

彼女は顔を覆つた両手の隙間から涙が流れている。関係はないが、ドラゴンでは海のモンスターとどうやって戦つているのやら。普通に剣や拳が届くのだから、ゲーム内の海のモンスターは丁寧に甲板まで上がって来てくれるようだ。船艇に穴を開けて沈没させれば勇者パーティを全滅させられるのに……。上手く助かつても、新たに船を手にいれるのは大変そうだ。そう、現実はゲームと違つて厳しいのだ。死にたくなれば、なんとしても断らなければならぬ。「いや、その、僕は……」

勇者は言い訳を唱えた。

しかし、勇者は良心に縛られて動けなかつた！

「お願いします、どうかこの国を救つて下さるように御説得して下さい」

勇者は命の危機を感じた。

勇者は良心の縛りをふりほどいた。

「すみません。申し訳ないですが、海の魔物はたいして魔法の使えない僕らには荷が重いようです。遠距離の風・雷の魔法や、空を飛ぶ魔法がない……と……」

僕は言葉を濁らせ、キリーとルシファーに目をやる。

ルシファーは神に使っている天使、もしくは墮天使。ついこの前は光の翼で飛んでドラゴンを追いかけた。

キリーはこの前、天空の城に住む悪魔を倒した。その時に手に入れた力で宇宙へ飛んで行った。

たしかに、ルシファーとキリーならば海の魔物を倒せるだろう。しかし、僕が生き残れるかは分からぬ。ルシファーは自分が戦つて、僕だけ戦わずに待つてはいる事を許さないだろうし、キリーに一人だけで行かせても迷子になるだけだ。二人に戦わせる事は、必然的に僕も死地におもむく事になる。正直に言つて戦いたくない。

僕が言い訳を考えていると、どたどた足音が近づいてきた。

「サルモーネさん！ 大変だ！」

玄関のドアが大きな音を立てて開かれ、一人の中年男性が入ってきた。漁師でもしているのか、中年になつても体はがつしりしている。地球の現代人の中年男性女性が見れば、羨ましがるだろう。男性は自分の体と、女性は旦那の体と絶対に見比べる。

「どうしたんじゃ、ガツビアーノ！」

どうやら、何やら問題が発生したようだ。この混乱に乗じて一旦退却するべきか……。

僕は三人の気がそれたすきに、ルシファーとキリーを連れて出ようとした。

「そ、それが、ついに街の中まで魔物が現れたんだ！」

「な、なんじやとお……！」

ギルド長は悲鳴をあげ、おばちゃんとアリー・チエはショックで口も開けないようだ。勇者である僕も、街に現れた魔物の話を聞いて足が止まってしまった。

「な、何があつたんじゃ！」

男はおばちゃんから水を受け取り、喉をうるおしてから話を続けた。

「それがついさつき、妻と息子の三人で食事をしていたんだ。すると突然、家の壁が破壊されたんだ！ もう、家は半壊さ！ 恐らくたつたの一撃でそれだ！ 苦労して立てた家なのに……、仕事も無いこの状況でどうやって生きてけつて言うんだ！」

男が嘆く。でも、あれ？ ついに、家の壁が壊された？ どうかで聞いたような……。

「衛兵には知らせたか？ どんな魔物だつたのか？」

男は首を横に振る。

「衛兵には知らせたが、残念ながら魔物の姿は見ていないんだ。あつと言う間に去つて行つたのでな」

男は怯えながらも悔しそうに言つ。ギルド長は考え込んで話の続きを聞いた。

「何か無いのか。些細な事でもいいんぢや？」

男は首をひねりながら思い出すよつに言つ。

「……そういうば、少年と少女の話声みたいなのが聞こえたような？」

僕の額に冷や汗が滲む。ものじつに心あたりがあるよつな、持つていてるよつな……。

心中で焦る僕をよそに、キリーもついて起きてもはやんの料理を食べ始め、今度はルシファーが居眠りを始めた。

「そつと……、そつと……」

僕は一人を連れだす事をあきらめ、一人でもこの場から逃げ出そうとした。

しかし、ギルド長はこちらをじつと見ていて、勇者に向かって目から不気味な光を放つた。ギルド長はキリーの戦う姿を水晶玉で見た。そして、少年の僕と少女のキリー。そこからどんな答えが導き出されるか、鋭い人間ならば答えは決まっている。

勇者は、ギルド長の視線により、体がマヒして動けなくなつた。

「どうか、こちらでも冒険者に知らせ、話を聞いてみる。うちもかつかつで養つてはやれないが、住む場所の日途が立つまでうちにいるといい」

ギルド長は話しながらも、男の頭越しに僕へ不気味な光を放ち続けている。勇者はマヒが続いて動けない。

「ありがとう、サルモーネさん。さつそく妻と息子をつれてくる

男は外に出て行つた。

『さ、さてと。僕らも邪魔でしょ、帰ります。失礼しま……』

僕はぎこちない動きで歩こうとするが……、

『すみませんが、冒険者の方。先ほどのお話ですが……』

ギルド長の丁寧な頼みごとが再開した。しかし、今度は先ほどと違つてどことなく威圧感を感じる。

『は、はい……』

僕は硬直したまま返事する事しかできなかつた。

僕らは宿屋で三部屋とつた。これから旅を考えると、できるだけ安く済ませたい。しかしながら、キリーと同じ部屋で眠るのは身の危険を感じるし（けつしてエロい意味ではなく、先ほどギルドでの様子を見ると、単純明快に命の危機である）、ルシファーは美人な女性をひつかけるため、相部屋は却下らしい。

『はあ、結局……、依頼を引き受ける事になつてしまつたなあ……』

僕は深いため息をついて、ギルド長との会話を思い出す。

『それでじやなあ、ここはお互いのために……、ここはお互いのために、海の魔物を倒すべきだと思うのじやが』

くそジジーは、「お互い」を強調しながら僕に話しかける。

『いや、その僕らは飛べないです、遠距離魔法も……』

『大丈夫じゃ、ここから西へ行つた所に「迷いの森」がある。そこには優れた魔法使いがいるという噂じや。彼に協力を頼むのじや』

『あの、それなら何でもつと早くその魔法使いに頼まないのですか？』

『迷いの森へでかけた冒険者と近衛兵がいたが、みんなその魔法使いを見つけられなかつたのじや。お前さん達ならばきっと見つけら

「はあ……、やつかいな事になつたな……」

僕はため息をつく。ジルド長の遠まわしに脅され、一日後に迷いの森の魔法使いを探す事になった。

もちろん、ルシファーやキリーならば海の魔物を倒せるだらう。しかし、あの二人の実力は認めているが、人格は認めていない。二人の気まぐれに自分の命を預ける事が不安なのだ。命綱は多ければ多い程良いのだ。まあ、こんがらがらない限り……。その魔法使いも、ルシファーやキリーみたいに自分勝手でなければ良いのだけど……。

僕はさらに深いため息をつく。これから事を思うと頭が痛い。まあ、魔王を討伐するために異世界へ連れてこられた事を考えると、あまりの頭痛で倒れそうになるが……。

僕はこれから計画を立てている最中、なにか大事な事を忘れているような気がした。

「そうだなあ……、ぼろぼろの剣の代わりを買わないと行けないなあ……。この町では王家の猟銃以上の銃は期待できないだろうしなあ……。はあ、武器を買うお金をやりくりしないと……んつ！？」

僕は大事な事を思い出し、ベッドからがばっと身を起こした。

「そりゃ、黒豚討伐の報酬をうやむやにされた！？」

海の魔物を討伐するため、ここから西の迷いの森へ魔法使いを探しに行く事になつた勇者わたら。彼とこの国の運命はいかに！？

万世？ 盛、危機壊会

勇者ワタル、次回も生き残れるのか！？

第15話 魔物が来りて家壊す（後書き）

「…………、どうかへ向かつと、いつも世界が広く感じるキリ
一…………。」

次回また

…」

第16話 勇者ピンチを切り抜ける

窓から暖かい太陽の光が僕の顔を照らす。どこからか聞こえてくる鳥の鳴き声が目覚まし代わりになる。僕はふわふわのベッドの中でぼんやりと目を開く。

「ふあ～。ふかふかで暖かあ～い」

僕は枕に頬ずりする。この至福の時にもう少し浸つてみたい。「はあ～。人生の至福だなあ～」

僕はベッドをべた褒めするも、この宿屋は決して高級な宿屋ではないし、ベッドも家にあるせんべい布団より固めかもしない。

しかし、城を出発してから2週間、僕は野宿ばかりで一度たりともベッドに指一本も触れる事ができなかつたのだ。人の価値観なんて相対的な物である。地球の裕福な国と比べると見劣りするが、硬い地べたの上と比べたらこのベッドは天国である。これを相対性理論と言づ（真つ赤なウソです）。

しかし、心残りがあるも僕はベッドから起き上がる。

「うーん…、い、いててえ」

僕は手足を思いつきり伸ばすも、ふくらはぎがついつてしまい、ベッドの中に再びうずくまる。ついた方向と反対方向に足を曲げれば良いとは分かっているが、こざつてしまふと痛くて動かせなくなるものである。

数分後、足をさすりながらも僕はようやくベッドから出る事ができた。

何といっても、旅の準備を整えなければならない。ライオン獅子王師匠からもらつた剣の代わりとなる武器を探したり、携帯食料を準備したりしなければならない。僕は王家の獵銃をメインウェポンにしているが、近接武器も用意しておいたほうが良い。

「はあ～。僕の手に合う武器があるといいけどなあ」

お金がもつたないので、聖剣を手に入れるまでは大事にしよう

と思つていたの。世の中上手くいかないものだな。

セイルーン王国では鍛冶家を国が管理していたが、この国でもそうなつていたら困る。この国の現状ではたいした武器をあてにできないかもしけないが、自分の身を守る程度の物が欲しい。

僕は階段を下り、宿の食堂に向かつた。

「お姫さん、おはよひざいます」

宿のおばちゃんが笑顔で挨拶してくれる。

「……おはよひざいます」

僕は一瞬涙ぐみそうになつた。温かい好意を受けるのはひどいだ。

僕が食堂に辿り着くと、すでに先客がいた。

「よう、嬢ちゃんよく食つな」

「ばくばく、もぐもぐ、がつがつ」

キリーは料理にがつつき、テーブルの上に皿が積み重なつてゐる。

「あら、ルーちゃん素敵よ」

金髪でボインな美女と、

「ええ、こんなにワイルドでカッコいい男は初めて。ベッドの中でもかなりワイルドだつたわね」

黒髪でワインな美女がルシファーの両隣を占領してゐた。

「だらう?」

ルシファーが気分よさそうに笑う。さつそく美女をひつかけたようだ。両手にメロン……じゃなくて、両手に花とはまさにこの事だろう。

僕が立ちつくしていると、金髪ボインがこちらを振り向いた。

「ねえ、地味な子がこつち見てるわよ」

「あら、いいじゃない。初々しくてかわいいじゃないの」

黒髪バインが馬鹿にしたような顔をして褒める。おそらく、皮肉つぽい。

「おお、ワタルじゃねえか。俺の連れだよ。おおい、ワタル。金を

借りたぞ。キリーの分も払つといてやつたからな」

「うおおつとつと

ルシファーに投げつけられた皮の財布をあわてて受け取る。中を見ると、金貨一枚と銀貨数枚しか残っていない。これじゃあ、一週間分の宿代、又は剣一本分のお金にしかならない。

「…………ルシファー、どんだけ派手な遊びをしているんだ！」

「ああ？ そんな事で目くじらたてんなよ！ みみつちい奴」

ルシファー達は僕にあきたらしく、三人でどこかへでかける。今まで死にかけた事は何度もあるが、経済的に追い詰められるのはこれが初めてだ。

僕はため息をつく。キリーの前に積み上げられた皿を見ると、彼女にも原因があるのだろうが、半分以上はルシファーのせいであることは自明の理である。

僕は自分の部屋に戻つて考える。ベッドが気持ちよくて眠りそうになるが、ベッドから起き上がる事は却下である。

僕らは一週間分の宿代はすでに払つてあるので、一週間の生活は保障されている。

しかし、僕には武器が必要だ。武器を買い、ギルドで依頼をこなすしかないが、依頼に失敗すれば後がないのだ。もの凄く困る。

普通なら、危険な仕事を受ける事を理由に、ギルド長から報酬を前借したり、ここの中様に口を聞いてもらいつ。

しかし、キリーが家を壊した弱みで、それが難しくなつていて。あのジジーは手を貸してくれないだらう。

「これは、八方ふさがりか？」

僕はため息をつく、何か良い手は無いものか……。

僕は意味も無く自分の荷物を探る。無意味な事でもわずかな間の現実逃避ぐらいはできる。

中の空間が小さくタンスぐらいに拡張されている獵銃袋の中には、

色々ながらくたがあつた。落とし穴作りキット、本当に戻つてくるのか不安な程いびつな形の手作りブーメラン、麻酔薬も麻痺薬もない吹き矢、作りかけのロープ、犬笛などなど。全て狩猟関係ではあるが、役に立ちそうにない。

僕がさらに探つていると、何故王様が持つていなのかは分からないが、エッチな下着（妙に胸が小さめの女性用だと思うが、僕にはおかま用かどうかは判断できない）も見つかった。

改めてRPGゲームについて考えると不思議である。なぜ、エッチな下着の上に旅人の服とか重ね着しないのか。ゲーム内だと普通の装備だが、裸に鎧を着るのも十分に変態である。

もしかすると、鎧という装備は下に着る服とセットになつている可能性も否定できなが、それならばエッチな下着+旅人の服+鎧の方が断然防御力がありそうである。

僕は獵銃袋に入つていたエッチな下着を丁寧に部屋の暖炉にくべようとした。なんたつて王様が着用していたとしたら気持ち悪い、あの王様ならばその可能性を否定できず、とても怖い。

しかし、現在は金欠なので恥ずかしさを我慢し、キリーを連れて売りに行こうと思う。キリーが着用したと嘘をつけば値段を釣り上げる事ができるだろう。彼女は見た目だけは良いし、世の中の男の半分はエロさで出来ているのだ。

さらに荷物を漁つた。

「あつ、これがあつた」

僕は袋の中でぐしゃぐしゃになつた紙を取り出した。そう、セイルーン王国の王様からもつた仲間募集の紙である。ぐしゃぐしゃになつているも、きちんと王家の紋章が印されている。

「これを見せれば、この国の王様に武器をおねだりぐらうできるかもしねれない」

そうと決まれば善は急げ。お昼までベッドで寝つ転がり、その後キリーをつれて道具屋とお城へ向かう。

えつ、どうして今すぐ向かわないかって？ それはだね、キリー

に何かを頼むのにはお昼を「」馳走するしか手は無く、朝「」はんを食べたばかりのキリーを食べ物で釣る事は難しいからだ。決して、僕がお昼まで眠つていていたい訳ではない。

「ねえ、キリー。いらない物を売るの」「ついて来てくれない?」「…………」

お昼には早すぎる時間に、僕は宿屋でキリーに頼み込が、キリーは面倒くさそうな顔をする。

「ついて来てくれたらい、何か御馳走するからさ」「分かった……」

僕が御馳走の事を話に出すと、一つ返事で答えた。キリーの頭の中には戦う事と食べる事以外の全てが抜け落ちているらしい。

僕達はまず、お城に向かつた。良い武器がもりえると良いけれど……。

トンノ・ロッソの城は、セイルーン王国の城と違つて華美ではないが、その全てが実用的な感じが在る。

城の門から見える庭園には、花の代わりにブロッコリーとか野菜が沢山植わっている。

城の門から見える、城の中央に見張りのための高い塔が一つだけあり、その他は一階建てで平べつたくなつていて、これならば、足腰が悪くなつても移動が楽そうだ。

城の門から見える兵士や馬の飾り付けも、小さく紋章がついている他に飾りつけがない。

城の門から見える家根は……、えつ? ビうしてさつきから城の門からの景色描写ばかりかつて? それはだね……

「お前達みたいな子供が、セイルーン王国からの勇者だつて? 嘘

もたいたがいにしろ！

「厳しい門番が怒りまじりに僕らを門前払いにする。

「いや、あの本当です」

僕も困った顔で言い返す。

「ああ、はいはい。ぼうや、小さいのに偉いですねえ。今度来る時は両親と一緒に来てくれるかなあ？」

もう一人の門番が僕らを馬鹿にしたような声で追い返す。

「本當です。ここにセイルーンの国王の親善書があります

僕は袋から仲間募集の紙を取り出す。

「くしゃくしゃだな。ふむ……、魔王を倒す仲間」だと……、王家の紋章をまねるなど、不届き物め！――

「はいはい、おじさん達は忙しいから、友達と一緒に遊んでね」
厳しい門番が怒りだし、ふざけた門番が「しつしつ」と僕らを追い払うように手を振る。

「……ワタル、世間は鬼ばかりだ……。気にするな」
落ちこむ僕をキリーは微妙な慰め方をしてくれた。

ああ、お金が足りないよ。同情するなら本當に金をくれ。

僕らは城から引き返す。

「仕方ない、他をあたるか……」

僕らは街の武器屋ではなく、武器になりそうな物を売つていそうな店を探す。

こここの国でも、武器を作る鍛冶家は国が管理しているらしい。街にも鍛冶家はいるが、生活雑貨を作る程度らしい。
なかなか見つからないので、先に物を売る事にした。
「キリー、あまりしゃべらないで、適当に頷いていてね

「…………（こく）」

僕達は、すげべそうな男が店主の服屋を探し、そこに入った。

「こりつしゃい

店主が僕を見て、次にキリーを見て顔を少し緩ませた。

「すみません、古着を買ってほしいのですが……」

「どんな御品でしょうか」

僕は店主の元に歩いていき、エッチな下着を出す。

純情そうな少年がエッチな下着を出すとは思わなかつたのだろう、店主は目を丸にする。

「これ、君？……なわけないか。お母さんのかい？」

「いえ、これは彼女のです」

「…………（こくり）」

僕はキリーに少しだけ視線を向け、キリーが頷く。

ちなみに、僕はちらりとしかキリーに視線を向けていない。はつきりとキリーを指差して「彼女のです」とは言つていないので。例え遠くにいる女性の事を「彼女のです」と言つても、嘘はついていないはずだ。だって、「彼女」とは自分と相手を除く、第三者の女性を指す言葉だから。

ただ、この理論を用いる時、この下着を王様が愛着していた場合、僕は嘘をついた事になる。お互いの為にも、その恐ろしい可能性がはざれている事を心の中で切実に祈つてやる。

「そうか、そうか」

店主は少しだけいやらしい笑みをもらす。「知らぬがほつとけ」

だ。

「では、金貨一枚でどうかな？」

単なる下着に金貨一枚は破格だと愚つたが、僕はとりあいず値段を釣り上げてみた。

「いえ、適正な価格で買つて下さい。売る所によつてはその倍を余裕で超えるでしよう」

僕は当てずっぽな値段を言つ。

「ぐぬぬ、相場を知つてゐるって事か……。なるほど、彼女のつきに来ただけの事はある

えつ？ 本当に値段がつり上がるの？ この世界の男達は、どん

な頭の構造をしていくのだろうか？

僕は心中で驚くも、ポーカーフェイスを保つ。興味のないキリーは元々ポーカーフェイスだ。

「ならば……、金貨10枚でどうだ！ これ以上は無理だからな」店主のいやらしい笑みが厳しいものに変わる。どうやら、本当にこれ以上は無理見たいだ。

「それでお願いします」

僕は思わず幸運に喜び、店主から金貨10枚を受け取る。まさか、五倍にまでつり上がるとは思わなかつた。

店主が下着をにやにや受け取る様子を見て、急に思い出した事があつた。

「あの……、これも買つてもらえませんか？」

僕は王家の狩猟袋から王様が隠したエッチな本を取り出す。黒豚討伐の旅をした時に見つけたものだ。

「そ、そ、それは！ 五年前に絶版になつた「ター・ヘナルアナトミア」！ スギヤータ・ゲン＝パークが監督した超レア物！」

店主が目を輝かせる。

「た、頼む！ 金貨五枚、いや、金貨八枚で手を打とう！ ゼひ売つてくれ！」

店主が血走つた眼で熱烈に頼み込んでくるので、僕は少し怖くなつた。そうやら、王様が所有する物はどんな物でも一流らしい。

「わ、分かりました」

僕は店主から金貨八枚も受け取り、店主は本を大事そうに抱える。「ありがとうございました！」

ほがらかに礼を言う店主から逃げるように僕達は店を出た。

僕は王様から二十枚の金貨を受け取つたが、それに近い金貨を得る事ができた。王様の馬鹿さ加減には感謝したぐらいだ。

なんたつて、そのおかげで経済的ピンチを切り抜ける事が出来たのだから。

第16話 勇者パンチを切り抜ける（後書き）

「例え、火の中、水の中、ベッドの中。こつでも、どこでも、どんな時だつて、どんな場所でもワイルドに吠えるルシファード。全くよ、ワタルの奴はだめだな。その本は売る前に俺にも見せろよな！ むかつく野郎だ。さてと、次回の予告だ。」

「これは……、どれだけ残酷な武器なんだ。この血に塗られた武器を手にしろって言つのか……」

新たなる武器に恐れおののく勇者ワタル。
万里長城！ 喜気回合！
彼の冒険の旅はいかに！？

第17話 呪われた武器

食物連鎖という言葉が在る。

草は草食動物に食われ、草食動物は肉食動物に食われ、肉食動物は死んで土に帰る。

雲は雨を降らして川となり、川は海へと流れ込み、海は蒸発して雲となる。

国民は働いて社会から金を得て、一部の議員は国民から税を得て、その議員は特別接待費として社会にお金を還元する。そう、全ては巨大な因果で巡り回っているのだ。

僕は目の前の光景を見てそう思つ。

「がつがつ、むしやむしや、もぐもぐ（×100%）」

キリーは巨大な丸焼きにかぶりついている。その肉はググゲルという豚に良く似た生き物で、額に角が生えているのが特徴的だ。グゲルはとても凶暴で、戦士や魔法使いでなければ狩るのは難しいらしい。食物連鎖の中で、ググゲルを食べる動物は、人間か、白い亜熊（熊によく似たという意味）のダムガンだけである。

「……キリーは食物連鎖の頂点に立つ存在なのかなあ

「全く、お客様、すごいね……」

食堂のおばちゃんが目を丸くしている。

次々にググゲルの丸焼きがキリーの胃袋の収まるのを見ているだけで、僕は胸やけしてくる。ググゲルの丸焼きは、大人10人ぐらいで食べる、パーティー向けの料理なのだ。

キリーを虎に例えると、僕はミドリムシぐらいかもしれない。ミジンコに例えるのは、ミドリムシの方が役に立つという僕のなけなしの誇りゆえである。

僕はお茶をすすりながら、キリーの食事が終わるのを待つていた。キリーのおかげでお金が手に入ったとはいえ、たったの一食で、銀貨50枚（又は金貨一枚の半分）は飛んで行つてしまいそうだ。

あつと言つ間にキリーは丸焼きを食べ終えてしまった。まあ、僕はキリーのあまりの食べっぷりに、声一つだせなかつたが……。

「さてと、キリー。武器を探しに行こつか」

僕は席から立ち上がつた。

「……ダムガンの肝焼きで最後にする……」

キリーが物足りなさそうな顔で言つ。

「……すみません、ダムガンの肝焼き一つ」

僕はため息をついて追加注文する。もしかしたら、金貨一枚使つてしまふかもしれない。

「はあ、なかなか武器が見つからないね」

「…………」

僕は愚痴を言い、キリーは無言で返す。こんな時に無言の描写をする必要は無いと思うが、三点リーダーがなければ、キリーが食べる、戦う以外の描写がなくなつてしまつ。ヒロインとしての存在感を出すためには、無駄に見えで、必要不可欠な物なのだ。

僕らは武器を探し求め、やけに人の少ない街中を歩いていると、何やら喧騒が聞こえきた。

「たつぐ、動くなよ！」「むかつくんだよ！」「がらくた売りやがつて！」「おらおらおらー！」

4人の男が、たつた一人の人間を足蹴りにする。必死に耐えていれる人は長い髪を乱し、服もスカートもぼろぼろにしている。

勇者である僕は、きびしい視線を真正面に向け、足早に歩く。

キリーも無表情な視線を真正面に向け、颯爽と歩いてゆく。

「あつ？」

僕らが近づいて来るので、四人のうちの一人が気付いて視線をこちらに向けたが、気が付くのが一瞬だけ遅かった。

カツカツと、僕らの靴音が石畳の上で小さくも、早いテンポで鳴り響く。

僕とキリーは彼らに足早に近づいてゆる……、彼らの横を通り過ぎ、……遠ざかりはじめた。

「ちょっと待つて下さい、そこの方！ どうか助けて下さる」

足蹴りにされていた人が、僕らに助けを求める。

常に無表情のキリーですが、面倒臭そうに顔をしかめた。

足蹴りにされていた人は、長い髪を乱していく、膝上までのスカートもぼろぼろ、片

方のハイヒールも折れている。けれど、一番特徴的なのは剃られていても目立つてしまう青い髪である。つまり、彼は女装した中年男性なのだ。

「幻聴が聞こえるなんて、ビックやら僕らは疲れているようだ。ビックで休もうか？」

「……」

キリーは静かに頷く。

勇者はさりにスピードを上げ……、「待つて下さい……お礼はしますから！」

「キリー、僕らは依頼に備えて、今日中に武器を手に入れなくてはいけない」

「……」

勇者とキリーは己の使命感に燃えあがつた。

「う、うちは武器を売っています。1割引にしますから！」

「……弱者は生きてゆけない、己の世の真理……」

勇者一行はスピードを落とさずに歩き続ける。

「は、半額、半額でいいですよ！」

勇者一行はわずかに歩みを緩めるが、足を動かすのをやめない。

「ただ、ただでいいですよ！」

変態男が必死に叫ぶ。

「弱きものを虐げる悪漢よ！ そこの人を離せ！」

「……よわちもののしいただるあかんよ！ ハーヒョシトをはなせー！」

「セー！」

勇者一行は体の向きと態度を百八十度変えて、悪漢A・B・C・Dに言い放つた。キリーも僕のまねをするが、普段の無口つぶりが災いとなり、復活の呪文つぽい台詞を言い放つた。それとも、彼女はきちんとした台詞を言つのが面倒だったのかもしれない。

「なんだとお！ ガキ二人に何ができる」

悪漢Bが怒鳴り声を出す。

ガチヤツ！ シヤララ ン（×2）！

勇者は腰にかけていた王家の獵銃を構える。

僕は腰にひもで輪を結び、そこに獵銃をさして歩いている。これら外套で隠れるし、こざという時に腰だけで構える事が出来る。キリーも背中にある一本のバスター・ソードを抜く。毎度毎度、どうやつて巨大なバスター・ソードを背中から抜いているのか、とても不思議な程だ。

「お、お前ら……、そんな事をしてただ済むと思つていいのか！？」

衛兵に捕まるぞ！」

怯えたように悪漢Bが怒鳴る。少年よりも銃を警戒し、そして剣よりも、その重たい剣を軽々と扱う少女に怯えた。

勇者はため息をついて、タコ殴りにされた変態男を指差す。

「……人の事言えるの？」

「ちつ！ 帰るぞ！」

悪漢A・B・C・Dは逃げ出した。

悪漢たちはいなくなつた。

「あ、ありがとうございました」

変態男は息絶え絶えで礼を言つ。田の周りに青いあざができるのが、なんともコントつぽい感じがある。

「いえ、僕は当たり前の事をして、当たり前の物をもらひただけです。僕は露骨に催促した。田の前の女装したおっさんをまじまじと見ていたいとは思わない。

「は、はい。……えつと、店までついて来てください。……あつ、申し遅れました。わたくの名前はカンタロです」

僕とキリーは無言で変態男について行く。無言のままつっこて来る僕達に変態男は重圧を感じたらしい。

「あの、Jの格好を見て勘違いをされているのではないかと思いますが……、私は女装趣味ではありませんよ」

「どの口が言つんだよ」

キリーも無言ながら同意見らしい。JくJく頷く。

「いえ、この服は……、妹の形身なのです……」

男は悲しげな顔をし、海の方角を眺める。

僕はその表情を見て、少しだけ憐れみと罪の意識を感じる。

キリーは相変わらずの無表情だ。

「……この港の付近に突然現れた魔物の話はご存知ですか？」

「……もしかして、海の魔物に殺されたのですか？」

男は涙をこらえるように目を閉じ、静かに頷いた。

「ええ、妹はマッカーサー王国へ向かう船に乗つて、その船が魔物に……」

男の閉じられた目からちらりと光る涙が流れだした。

「……それは……御気の毒に」

男は袖で涙を拭つた。

「ええ……、賭博で……、首が回らなくなつて……一発当てたら、ヒック……、必ず帰ると……ヒック、……何十年かかるか分からぬけど、……待つてねと、……言い残しました……」

それつて、借金を押しつけられたんじゃないのか？ 絶対それ夜逃げしようとしていたよ。もしかして、やつきの男たちは借金取りだつたんじゃあ……

僕はだんだん微妙な気持ちになつてきた。

しかし、男は話しているうちに、感極まつたようだ。激しく嗚咽をもらす。

「……も、もつ。……勝手に、服を着られて、……怒る妹は、……もういないんだ……」

「……」

元々、妹の服を着る変態だつたんじゃないか。

僕は同情する気が失せてしまつた。さつさと武器をむりつて、おさらばだ。

僕らはめそめそする男の後を黙つたままついて行つた。

「着きました」

少し歩くと、小さくボロボロの店に辿り着いた。看板を見ると、金物屋らしい。

僕の家の近くには、古くて小さい建物だが美味しいラーメン屋みたいな隠れた名店があるが、この店も隠れた名店?……の期待は出来なさそうだ。

僕は嘆息する。ろくな武器を手に入れられなさそうだ。包丁とかおなべとか貰つて、どつかでお金にしようかな。

僕とキリーは変態男の後に続いて店の中に入った。

店の中にはおなべとか、フライパンとか、色々な雑貨が乱雑に並べられていた。「じつちゅ」「じゅ」に並べられているため、お店では無く「」屋敷と間違えられそうである。

「あ、なんでもいいですよ。遠慮なく持つて行つてくれ」

変態男は笑つて僕らに勧めて来る。

「はあ、何が在るかねえ……」

僕は鎌をつまみあげる。残念ながら、くさつつき鎌ではなく、くさかり鎌だ。

「これなんて、どうですか?」

変態男は僕にショートソードを差し出してくる。その剣は新品なくせにどこかくたびれていて、刃紋は直線と波の中間ぐらゐ……つまり、刃がめぢやくぢやである。両刃の剣であるが、左右非対称にも程がある。

「これ、自信作なんだ。無名だけど、なかなか良い線いっていると思つよ」

「ここにこ顔の男の白髪にて、僕は無口になる。

「さあ、振つてみていいよ」

男が勧めて来るので、僕は試しに八分ぐらいの力で振つてみた。

ビュン!! ザクッ!!

剣の刃が良い音をたてて空氣を裂く。それは良いのだが、今刃のある位置が大問題である。

「ははは……、良い素振りだね」

変態男が床にかがんでいる。男が立つていた胸のあたりの壁に刃だけが突き刺さっている。剣の刃が柄からすっぽ抜けたのだ。

「それは、……えつと、……そつだ、それは『飛影剣』と言う名ですね。斬撃が飛ぶんだよ?」

「それ、今考えたよね? あきらかに、ただ柄から刃が抜けただけだけど」

これが自信作ならば、現在も未来においても、この変態男に鍛冶家の才能は無いらしい。

聖剣が手に入るまでの間に合わせがあるかな? と思って来たのだが、これでは荷物になるだけかもしない。どこかに売つて金にする事もできないかもしない。

僕はため息をついて、再び物色を始めた。何か探さないとくたびれ損だ。

キリーは僕と反対側を探していく、何かを見つけたようだ。

「……これはなんだ?」

キリーは一本の折れ曲がった細い鉄の棒を両手に持つている。

「ああ、それは、宝物を探す占い道具ですよ。面白半分に作つてみたんです」

それは、あきらかにダウジングだった。

「片手に一つずつ持つて、宝のある場所で交叉したり、開いたりするんだ」

キリーがダウジングを受け取り、この金物の山に向けていく。なんと、胡散臭いダウジングはひとつ金物の山で交叉した。

キリーは無言のまま、いらない金物を後ろに放り投げ出した。

「ゴーン！」

「痛つ！」

キリーの投げた金物が僕の頭に当たる。

「ちょっと、キリー！」

ガゴーン！！

僕の頭に大きな金たらいが被さり、視界が暗くなる。

「まったく、もう！」

僕が金たらいを取ろうとしたら、カツーンと鋭い音がした。僕の手はビクツと震えて止まる。キリーの様子が収まるまで被っていたほうが良さそうだ。

僕は飛んでくる金物が収まってからたらいを取つた。僕の周りには金物が散乱している。

「全く、やめてよね、キリー……んつ？」

僕は文句を止めて、足元に落ちている包丁を拾つた。恐らく、さつきの鋭い音の正体らしい。金たらいが無ければ、僕の脳天に突き刺さつていたかもしれない。

「何!? この包丁は！」

その包丁には、ドラゴンの美しい彫物がほどこされ、刃は銀色の刃紋が波打つて輝く。試しに少し伸びてきた自分の爪先に刃を入れてみると、たいした抵抗もなく刃が通つた。

「そ、それは、死んだオヤジの力作！ 名刀秋雨だ。こんな所にあつたのか！」

変態男がわななく。どうやら相当な一品らしい。って言つた、父親の力作をがらくたの中に埋もさせていたのか。あの金物の山の中で、刃こぼれしなかつたのが奇跡だ。

僕は名刀を守るため、遠慮なく獵銃袋の中に入れる。

「……でも、これでは魔物と戦えないねえ……」

「そ、そうですか……」

金物の山の中で腐らせていたし、なんでも好きなだけあげると言

つた以上、「父親の形見だからやめて」とか言い出せないのだろう。キリーはダウジングが気に入つたらしく、無表情な顔を少しだけ緩めて再び宝を探している。

「では、こちらはどうでしょう？ 槍に近い物ならばありますよ」

変態男は別の部屋に行き、すぐに戻つて來た。

それは長い鉄の棒で、先に三又に分かれている。三叉の槍にしては、妙に細すぎるが……。

「……それって、鉛もり？」

「そうですよ、父の力作なんです」

変態男は満面の笑みを返す。彼は鉛をなでながら、思い出すよう

に語り出す。

「父は、『これはまだ、未完成だ』って言つていました」

「未完成？」

「ええ、父が言つていました。この世界の何処かに、神のレシピで奇跡の品を作る事ができる『鍊金の溶炉』があると。鍛冶家にとつて、それは夢であり、父はそれを作り出そうとしました……。もちろん失敗だったようですが……」

彼は悲しげな笑みを浮かべる。

「それで、お願ひします。これで旅をして、連金の溶炉を見つけたら、父の作った鉛もりを完成させては頂けないでしょうか？」

「え、えっと……」

「約束してくれなくても結構です。難しい事は承知です。しかし、ここにあってもいざれ朽ちてゆくだけです。」

「うん、ここにあれば朽ちてゆくだけっていう事は認めるよ。」

「お願ひです。……夢を見させてはいただけませんか？ ただ、父の作品が人の役に立つだけでも嬉しいんです」

「わ、分かりました」

「あ、あ、ありがとうございます！」

僕は勢いに負けて、思わず頷いてしまつた。

男は本棚から一冊の本を取り出して、鉛と一緒に差しだしてくる。

「これは、父が残した連金レシピです。あくまでも理論上ですが、父の夢を確認してください」

デルデルテーン 勇者は『未完成の鈎』と『連金レシピ』を手に入れた。

デルデルテーン 勇者は『駄目ダメダメで、どうしようもない女装好きの鍛冶家の男の父の夢』のクエストを引き受けてしまった。（まあ、「ミミになつたら後で捨てれば良いか……）

「さて、こちらもありがとうございました。僕らも帰る事にします」未だにダウジングを続けるキリーの手を引っ張つて鍛冶家を後にする。キリーの袋はパンパンに詰まっていた。色々と気に入つた物があつたらしい。

「ふう……、なんか疲れた」

武器を探すのにだいぶ手間取つてしまい、もつそろそろ夕食の時間だ。依頼の日まで、あと一日猶予があるが、この鈎がダメなら、色々と面倒だ。

「宿屋に着いたなあ。夕食までちょっと横になるかな……」

宿屋についてもキリーはダウジングを続けている。宿屋のお金にまでダウジングしないといいけれど……。キリーならば宿屋のお金も物品も、ダウジングが交叉すればゴミでも何でも持つて行つてしまつだろ？。泥棒行為に発展しなければいいけど。

僕は自分の部屋のベッドに横になる。隣から、「ルーチャン、激しそぎ」「ああん」とか、「まだまだ！」とかいう声には耳を塞ぐ。現在の地球では、プライバシーについて厳しくなつていて、プライバシーを知らされてしまう方も迷惑を被つていてのかもしない。

僕は耳から意識を反らすため、先ほどもりつた連金レシピに田を通す。

「えつと、鈎の連金レシピは、つとー。」

僕は鈎の連金レシピを読む。

達人の鈸 達人が振るう鈸。トビウオをも貫く。

〃 未完成の鈸 + 達人

名人の鈸 名人が振るう鈸。マグロをも貫く。

〃 達人の鈸 + 名人

鉄人の鈸 鉄人が振るう鈸。サメをも貫く。キャビア、ふかひれが食べたい人には必須。

〃 名人の鈸 + 鉄人

人間国宝の鈸 人間国宝が振るう鈸。クジラをも一突きで仕留める。

〃 鉄人の鈸 + 人間国宝

天上の鈸 天使達が振るう鈸。海龍をも一突きで仕留める。

〃 人間国宝の鈸 + 天使

神々の鈸 神々が振るう鈸。海神をも一突きで仕留める。

〃 天上の鈸 + 神

「.....」

僕は沈黙した。なんだか、これは、練金レシピではなく、悪魔のレシピなのでは?

達人の鈸とかさ.....、練金材料が『達人』ってなんなのさ。人を武器の材料にするの? 達人の鈸とかに意味不明な石を使うよりは、武器名と材料名が一致しているけど.....。これって、かなりまずくない? って言うか、これは最終的にけものの槍や、賢者の石になるんじゃないの?

「こんな武器を完成させろ、って言うのか?これは.....、ど

れだけ残酷な武器なんだ。」の血に塗られた武器を手にし、つて
言つのか……」

勇者は新たなる武器に恐れおののいた。

僕は部屋を飛び出し、宿屋にある大きな窯に向かった。

「どうしたんだい？」

窯の前にいたおばちゃんを無視し、鉛と練金レシピを突っ込んだ。
「はあ、はあ、す、すみません。一緒に燃やさして下せこ」

僕はおばちゃんの返事もまたずに、部屋へ戻った。

「はあ……、これで大丈夫かなあ……」

僕がベッドに倒れ込むと、何やら硬い感触があった。

「ん？ 何だるうこれ？」

僕は毛布をめぐると、捨てたはずの鉛と練金レシピとじて対面した。
「な、なんじやこれ！？」

デルデルデーン 装備が呪われている。勇者は装備を捨てる事
ができない！

「う、う、う……、うそーん！……」

とある夕方、町中に情けない叫び声が響いたとさ。

第17話 呪われた武器（後書き）

「やあ、こんにちはみなさん。普段の食事は冷凍食品ばかりの現代っ子な主人公です。僕つてば、最近悩み事ばかり抱えてさ、もう大変なんだよね。みんなは壁に行き詰った時はどうしてるの？ 僕は一旦ファンタジー小説に現実逃避して、落ち着いた後、問題に向き合うようにしているんだ。まあ、その頃には問題を忘れているんだけどね。忘れるくらいなら、それは大した問題ではないっていう証拠だよ。みんなも試してみたら」

「ちょっと！ とおる！ 勝手に人のあとがきを横取りしないでよ。君は自分の小説のあとがきで話せばいいでしょ！」

「だって、賢者の方は作者が行き詰っているんだもん。でも大丈夫！ 君と僕のキャラは被っているから、名前さえださなきや、読者にばれないって」

「僕の出番を取るな！」

「波乱万丈！ 奇寄怪怪！ では、次回の最弱勇者とチートな勇者の御一行様をお楽しみに！」

「僕の台詞を取るなあ！」

僕はあれから何度か、あの変態から受け取つてしまつた銛を捨てようとしたが、どこに捨てても僕の手元に戻つてしまつ。川に投げても、いつの間にか僕の手に握られていた。土の中に入れても、宿屋の部屋に立てかけられていた。商人に銀貨八枚で売つた時はようやく捨てられたと思った。しかし、数時間後に王家の狩猟袋を整理していると、「元々ここに居ましたが何か?」とでも言つてはいるかのように、しつかりとそこに収まつていた。

僕は銛を捨てられない事を嘆いたが、明日の出発に備えて、仕方なくその銛を使う事にした。銀貨八枚は僕のポケットにしつかりと収めたままだ。商人に、せつかく銀貨八枚で買つた銛を失くしたといつ残酷な事実を知らせるのがしのびない。

翌朝、僕はベッドの中で目を覚ました。僕はしばらくボケつとす
る。

(ウウ……なんか、また寝ちゃいそうだな)

僕は大あくびしながらゆっくり背を起こし、僕は宿の食堂で朝食しながら一人を待つ。

「ふあああ……。まだかにやあ……」

僕が朝食を終え、机に突つ伏していると、ルシファーが来た。

「ルーちゃん、今日出発なのお? 私、超~寂しい~」

「ルー君、大丈夫? 依頼は危険なんでしょ?」

「大丈夫よ、ルーちゃんにとつては、あんたを満足させるよりもた
やすく魔物を倒しちゃうわよ」

ルシファーが美女をひきつれて現れた。昨日に加え、蒼々とした

草原色の髪をした美女も増えている。

「大丈夫だ、心配するな。むしろ自分達の心配をしたらどうだ？ 戦いの後は気分が高まっているからな、体力を整えた方がいいぞ。俺と過ごす夜のために、な！」

「「「キヤー！！」」」

美女ABCはピンク色の悲鳴を上げた。

勇者のテンションはどん底に落ちた。

「よお、とある。キリーはまだ起きていないのか？」

ルシファーが僕に話しかけて来る。彼と一緒に僕まで周りの視線にさらされるが、なんだか慣れてきてしまった感じがする。慣れとは怖いものだ。

「そうみたい、キリーを起こしに行こつか？」

「おお、起こしてこいよ。こうこう時はお約束通り、着替え中に出くわすのがセオリーだな。もてないお前にゆずつてやるぜ」

「はあ、……そうする」

ルシファーの馬鹿にした態度にあきれて言葉が出ない。いつたい何のセオリーだつて言うんだ。

僕はキリーを起こしに、彼女の部屋へ向かう。彼女の部屋の戸をしつかりノックする。僕にはルシファーが言つよう、ラブコメ展開があるとは思わない。しかし、急に部屋へ踏み込めば、敵と間違えられて剣で斬り付けられそうだ。キリーと比べたらゴルゴなんて、目じゃないのだ。

「キリー！ 朝だよ！ 起きてる！」

僕はノックするが、返事がない。ただの扉のようだ。

「キリー！ 迷いの森に向かうよ！ じはん食べられなくなつちやうよー！」

僕はノックするが、返事がない。ただの部屋のようだ。

「おかしいなあ。ぐつすり眠つているのかなあ？」

僕は扉を開けた。しかし、ベッドはすでに、もぬけの殻だった。

「あれ？ キリー、どつかに行つたのかな？」

僕は部屋を見渡すと、小さなテーブルの上に手紙が置かれていた。「えつと、なになに。『お昼に昨日の所へ行きます。夕飯までには帰ります』だつて?」

「どうやら、キリーはいつでもどこでも必ず迷子になるとこつセオリーがあるひしかつた。」

僕とルシファーはトンノ・ロツソ王国を出発し、西にある迷いの森に居ると言う噂の魔法使いに会いに行く。

キリーが行方不明になつたと言つたら、『言い訳しても無駄じや。どんな手を使つても、依頼をこなしてもらつぞ!』ギルド長のサルモーネは、頑固な老人らしく聞く耳を持たなかつた。

「はあ、迷いの山脈の次には迷いの森か。次に冒険する所は、迷いの山林とかつていう名前じやないよね?」

「しかし、森の魔法使いね。どうせなら、泉の精靈とかならいのに。魔法使いつて言つたら、たいてい男かしわくちゃのばあさんだからな」

僕とルシファーは文句を言いながらも、迷いの森に辿り着いた。迷いの森を見たルシファーは顔をしかめた。

「おい、とある。……この森は空間が歪められているぞ」

「そう……、歪められているね……。どつかで聞いたよくな……」たしか、迷いの山脈でも同じ事をルシファーから聞いた。あの時は、黒豚が山の中ではなく山のふもとに居た。

「もしかして、今回も魔法使いは森の近辺に居たりして……」

「おい、とある?」

僕は森の近辺を探り始めた。同じ手には一度と引っ掛けつてやらないぞ!

「おい、どうしたんだよ、とある?」

ルシファーは突然の僕の行動を不思議に思つたようだ。彼は黒豚

がどこに居たのかを知らなかつたのだ。

僕は茂みをかきまわして、魔法使いの住処を探す。絶対に何かあるはずだ。

茂みを探る僕の手に何かが触れた。

「ん？ むにゅ？」

しつとりとしていて、なめらかな手触り。獨特なフレーバーな香りが僕の鼻を刺激する。手にとつて見ると、なんとまあチョコレート色のご立派な「Feces」でした。「何何？ いつたいそれは何だつて？」と、疑問をお持ちの方々。Fecesとは、肛門から排出される、食物のかすや腸粘膜からの分泌物などのかたまり。便もしくは糞（講談社出版 日本語大辞典より）Hi, repeat after me! 「Feces」, once more 「Feces!」 例文1； The daughter of age tell her father not to defecate. Because the smell of his feces is the most stinking in the world.

「つぎやああ！」

僕は んこを放り投げたが、それは粘り氣があつたため、コントロールがとんでもないことになつた。

「わっ！」

ルシファーが慌てて飛び退く。彼の足元に んこが落っこちる。

「あ……」

驚きに染まつていた彼の顔がだんだんと怒りに染まつて行く。

「……と・お・る！－」

ルシファーの体から金色の光が漏れだし、彼の背に光が集まつて光の翼が形成しかかっている。

「ま、ま、まじ！」

彼は鬼の形相をしていて、土下座ぐらいでは許してもうえそそうに

ない。

「『』、『』めんなさい！！」

勇者はとんずらした。

「待ちやがれ！！」

しかし、ルシファーは親の敵を追うかのように駆けて来る。

「ゆ、ゆるして！！」

僕が森に逃げ込んだ。すると、何やら妙ちくりんな音が聞こえ出した。

「ポワワワーーン！」

急に僕の視界がオレンジ色の光に包まれて、周りの景色は絵の具をかきまわしたかのように崩れ始めた。

「くそ野……まち……が……」

直前まで迫っていたルシファーの手も、出来の悪いところ天のよう崩れていった。

「な、なんだ！」

景色がよういつそぐるぐる回り、いくつもの線となる。大地がなくなつたかのように足元がおぼつかなくなり、頭の中はぐらぐらする。

ぐるぐる、ぐらぐら、ぐるぐる、ぐらぐら……。

「うひ、……おえつ！」

僕自身は回つていないので、回り続ける景色を見ていると気持ち悪くなってきた。胃液が喉元までせり上がりてきて、ひりひりする喉を手で上から抑える。

叙除に景色の回り方はゆっくりになつていき、木でできたログハウスのような部屋が目に入つて来た。

僕は立ちあがろうとするも、まだ景色はかすかに回り、足元もふらふらして再び座り込む。

「すみませんね、あなたにはこちうに転位していただきました」

幼い声の方向に目を向けると、くらくらと回る僕の視界に黒っぽい人影が見えた。

「あ、あなたは……？」「おえつ！」

僕は酔いに勝てなくなり、思わず吐く。

「ありやー、きちやない！盛大に床を汚してくれまちたね」

声に少し嫌そう感情が混じっている。

「しかし、仕方ありませんね。ちちんと手順と礼儀を守らなかつた僕にも責任がありましゅ」

声を聞く限り、彼はかなり幼いようだ。

「お客さんをもてなすに、自己紹介が遅れまちたね。ええ、僕の名前は……」

「み、水……」

「むつ、仕方ありまちえんね。……『精靈さん、水ちょうだい』。……どうぞでしゅ」

彼は魔法でコップに水を満たし、僕の口元まで運んでくれた。僕はコップを受け取り、ノドでひりひりする胃液を流し込んだ。

「では、自己紹介でしゅ。僕の名前は……」

「き、気持ち悪い」

僕は床に倒れ込んだ。こんなにも木の床が気持ちいいと思つたのは、これが初めてだ。

「はあ、自己紹介は後でしゅ」

彼はぷりぷりして、机の上の水晶玉を見つめる。

「さてさて、予言の勇者さん。あなたの実力を見せて頂きましょうか。あ、そうでした。あくまでも勇者さんの実力を測るのに、従者の方にはこちらで待機していただきましゅよ。……まあ、聞いていいようでしゅが……

ちなみに、「勇者 転位魔法に酔つて倒れ込んでいる情けない少年」です。しかしながら、どうやら彼は、ルシファーを勇者と間違えていたようでした。僕には訂正する気力もないけど。

「試練は心知体を試すものでしゅよ。フフフ……。まず一つ目の試練は、いくつもの幻の道を見せるでしゅ。しかし、そのうち本物はたつた一つ。間違えれば、最後の審判の時まで永久にさまよい続

けるでしゅ」

物凄い恐ろしい試練を、黒い人影はいたずらを仕掛けた子供みたいに目を輝かせてみている。

「な、な、なんと。周りの木々を吹き飛ばして、正しい道を見つけてでしゅ。凄いでしゅ！」

どうやら、ルシファーは力技でクリアしたらしい。

「ふふふ、しかし、一つ目の試練はそう簡単にはいかないでしゅよ。濃い霧に包まれたそこは一本道で、一步でも横に歩けば崖に真っ逆さまでしゅ。しかーし、霧の中には勇者の助けを求める人々の幻影がああああ！－－これは心を鬼にしても進む事が求められる恐ろしい試練でしゅ！－－」

ハハハと、笑う黒い人影をぼんやりと僕は見る。ようやく頭がはつきりしてきた。黒い人影は130cmぐらいの背丈で、声は五歳ぐらいに聞こえる。

「な、なに！－－助けを求める幻影をがん無視でしゅ！－－幻影を見事に見破ったのでしゅか！？ それでも、動搖一つ見せないとほんとでしゅ、恐ろしいでしゅ！－－」

ああ、多分、ルシファーは幻影だらうと本物だらうとがん無視しだらうさ。ルシファー、本当に恐ろしい子……。

僕は心の中で呟きながら、わななく黒いローブの男の子を見る。背丈が130cmぐらいに見えたが、彼は厚底の靴を履いていて、実際は110cmぐらいだった。

「まだまだ、次は大きな鉄球が襲いかかるでしゅ。一度、これをやつてみたかったでしゅよ。やはははは！」

目がギンギラギンに輝いている。小さな子供がサディストに笑う様子は結構怖い。

「わおおおお！－－巨大な鉄球を軽々と蹴り飛ばしたでしゅ！－－」

野球を見る子供みたいに大はしゃぎだが、見ているものはかなりきつい。相手がルシファーでなく僕だったら、今頃バタンキューになっている。

「さて、次は天井が下りてきて押しつぶしちゃう部屋でしゅ。謎を解かないと部屋から出られましょーん！」

いつの間に建物内に入っていたのか、辺り一面、森しか見えなかつたが。

僕の思考が終わるよりも早く、ルシファーはその試練をクリアしたようだ。

「おお！！！謎を解かず、普通に部屋を壊しました。凄いでしゅ！！！しかし！！次は甘くありませんよ！！！」

いや、今までの試練は、恐らく人間には無理だと思います。

「この試練は今までに自分が犯してきた罪を見せる部屋でしゅ。自分の罪の重さにひれ伏すといいでしゅよ！ ははは……うわああ！ ！ 水子の靈が一杯でしゅ！ 怖いでしゅ！！ この男、どれだけの罪を犯して来たんでしゅか！？ しかも、これまたがん無視でしゅ！…『パパ、パパ』と呼ぶ怨靈も眼中に無いのでしゅか！？」

どうやら、水晶玉の向こうは大変な事になっているらしい。僕は床に倒れていて正解だったようだ。もし水晶玉を覗いていたら、しばらく夜中にトイレへ行かれないだろう。

「まあ、勇者はすごい精神力の持ち主なんでしょうね……」「ルシファーはすごい精神の持ち主なのは確かだよ……」「めまいが治まってきた僕が咳く。

水子の靈に怯えまくっていた幼い魔法使いだが、氣を取り直して不敵に笑う

「ふふふ。だけど、あと最後の試練が残つていてるでしゅ！…」

第1-8話 魔法使いの試練（後書き）

「全く、なんだよー！ 今回の話はーー！ ワタルがヒヒ 言つてい
るシーンはナシで、俺ばつかが苦労してるじゃねえかーー！ おい！
作者あーー！ キリスト教一派が地球を支配下においていた暁には。貴
様をぶつ飛ばしてやるからなー！ 覚悟しろよーー！ 破濫蛮情、鬼
鬼漬漬。 次回の最弱勇者をましに書かなきやぶつ飛ばすーー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7217v/>

最弱勇者とチートな勇者の御一行様

2011年11月29日17時51分発行